黒猫と死にたがりのお嬢様

森ヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒猫と死にたがりのお嬢様

【Ｎコード】
Ｎ３９９５Ｖ

【作者名】
森ヒスイ

【あらすじ】
影から新しく生まれ出たユニには頭に猫耳とお尻に黒いしっぽがついている。名前以外、記憶はない。彼女はどうやら街でまれに生まれる黒猫という存在らしい。人を楽に死なせてくれる存在で正体不明。ユニと同じ黒猫のノーラが住む屋敷の令嬢フランシスカは変わり者で、ユニを家族にむかえようとする。黒猫のユニと死にたがりのフランシスカが生と死の時間を過ごす長編ファンタジー小説、現在連載中。

初頁　「ユニ新生」

ユニという名の少女は、いったいどうして暗闇の中を歩いているのか分からなかった。ただ前に向かって歩かなければならない。そんな思いだけがユニの胸に満ちるただ一つの思いだった。

前にも後ろにも天地にも果てしない闇が続いているだけ。周りを見てもユニ以外には誰もいない。それでも恐怖に身をすくませることもなく、ユニは何かに背中を押されるようにして闇の海を歩いて行く。いつからこうして歩いているのか、それさえもユニには分からなかった。

歩きに歩いて、ユニは暗黒の中に針の先ほどの光を見つけた。それまで冷たく引き締まっていた胸が温かく緩む。この感覚は……たしか安心感だったとユニは思い出す。ユニは光源に引き寄せられる蛾(が)のように、白い光に向かってふらふらと歩みよっていく。ユニが近づくにつれて小さな光はだんだん大きくなっていき、目の前が光でいっぱいになるほどに接近した時、それまで闇一色だった景色が一変した。

昼間でも薄暗い階段の影から、ユニが人知れず歩み出す。まずユニの目についたのは真紅の絨毯(じゅうたん)と、まぶしいほどに白い壁。見たことのない場所だが、それでも理解はできる。ここは人間の家。それも、相当の金持ちの家だ。

続いての感覚は、ユニの身体にまとわりつく生ぬるい空気。暑くも寒くもなかった奇妙な闇の中とは肌への刺激がまったく違う。ユニはすぐにこの空気の方が慣れ親しんでいることを思い出す。

腕をすばやく振ると空気の抵抗を肌に感じる。なかなか面白い。そうして少しだけ遊んでいると、ユニは自分が身体に何一つまとっていないことにようやく気づく。生まれたばかりのユニの肌は白く、きめ細やかでさらさらとしている。胸はほんのりと膨らんでいて、股にはなにもついていない。自分は女らしかった。

足を上げて指をじっくり見ていると、視界の端に何かが映った。なにやら黒くて長い。宙で揺れるそれに手で触れると、鋭い感覚が脳天を貫く。痛みではないが、身体中をいっせいになでられるような過激なくすぐったさ。わけも分からずにユニは手を離し、驚きながらにょろにょろしたものが何なのかを見極めようとする。くねるにょろにょろは自分の尻の上につながっている。これは尻尾(しっぽ)だ。自分の身体の一部なのだ。

自分には細かい毛で覆われた黒い尻尾がついている。それを当然のことのように受け入れて、ユニは顔をぺたぺたと触る。側頭部には耳がついていない。その代わりに、頭の上に二つの大きな耳がついている。穴に指を差し込むとごそごそというとんでもなく大きな音が頭の中に響くので、ユニはすぐに指を引き抜いた。これは危険な遊びだ。やりすぎると耳を痛めてしまう。

ユニは生まれ出た影から出て館の廊下をゆっくりと歩いていく。素足に触れる絨毯の柔らかさが新鮮だった。

額縁(がくぶち)に入った絵が飾られた壁や緑色の壺が置かれた机を眺めながら歩いて行くと、ユニは壁にはまった窓ガラスを見つけた。

窓を覗くと、灰色に曇った寒々しい空と、広がる芝(しば)と、色とりどりの花が植えられた花壇が目に入る。

ガラスにユニの顔が映っていた。肩にかかるほどの長さをした真っ黒な髪。陽光をはね返してうっすらと光る黒髪は癖がついたように先にウェーブがかかっている。ユニは髪の先をつまみ、さらさらとした手触りを確かめる。髪と同じように、ユニの瞳は黒かった。虹彩の中の黒を見つめていると、さっきまで歩いていた闇を思い出す。自分の身体の内側は暗黒の世界に通じているのだとユニは直感する。

「……誰か来る！」

廊下の先から届く小さな足音を拾い、ユニの大きな耳がぴくんと跳ねる。こうして言葉を口にするのは生まれて初めてだったが、どう

いうわけか話すことには何の支障もなかった。

「……裸の黒猫（くろねこ）……？　何だ、見ない顔だなあ。なんで黒猫がこの屋敷にいる？」

「わたしと同じしっぽ。耳もついてる」

ユニの前で立ち止まった女はユニよりもだいぶ背が高かったが、頭の黒髪も猫耳も黒い尻尾もユニといっしょだった。細い身体にぴったりと吸い付くような黒い長そでのシャツと紺色のズボンを着ていて、足には茶色の革靴をはいている。ユニと違って黒い髪は短く、あごにも届かない。凛々しくて、綺麗な顔だ。口に紫煙（しえん）が漂うタバコをくわえていた。

「見たことのない顔に、全裸の黒猫……。お前、もしかして生まれたばかりの黒猫？」

ユニはうなずけばいいのかそれとも首を横に振ればいいのか分からずにぼう然と女性の顔を見つめ返す。そんなユニに、若い女性はぼりぼりと頭をかく。

「まあ、いいや。生まれたばっかなのは見れば分かるしね。お前、名前はなんて言うの？」

「名前……」

そう問われてユニは初めて気がついた。頭の中をいくらさぐってみても自分について何も思い出せない。実感が伴わない知識の群れの中に、ユニという己の名前が燦然（さんぜん）と輝いているのだけが分かる。まるでその名前が自分の魂にしっかりと刻印（こくいん）されているようだった。

「……ユニ。わたしの名前は、ユニです」

「ユニね。あたしはノーラ。ま、よろしく」

ノーラという名前の女性がニッと笑い、ユニの左手を掴む。「こっちおいで」とぶっきらぼうに言って、裸のユニを引っぱっていく。

「あのっ。どこへ行くんですか？」

「ユニに服を着せてあげるんだよ。いつまでも裸のままじゃいられないだろう？」

そうだった。この世界では服を着るのが当たり前なのだ。誰に教えられたわけでもないのに、ユニはそのことを思い出す。それでも裸のままでも羞恥心（しゅうちしん）は覚えない。

「ユニ。あんた、生まれる前のことを何か覚えてる？」

「……いいえ。何も思い出せません」

「そうかあ。あたし達黒猫は、運が良ければ前世の記憶があるものなんだけどね」

あたし達黒猫。前世の記憶。ズボンの穴から生えているノーラの黒い尻尾を見ながら、ユニは頭にたくさんの疑問符を生じさせた。

「また街に黒猫が増えるとなると、お嬢（じょう）は喜ぶだろうけどベスの奴は怒るだろうなあ」

ノーラはそんなことをつぶやきながら、ドアを乱暴にノックする。
「ベス！　おーい、ベス！　ちょっと服を用意してくれ！」と大声でドアに向かって叫ぶ。ユニの優れた聴覚は、ドアの向こうの空間で何かが動くのを確かに聴き取った。

「ご用ですか、ノーラさん」

引かれたドアから顔を出したのはまたもや若い大人の女性だった。しかし、彼女の頭には耳はついていないし、尻尾も生えていない。あごの高さできっちりと切りそろえられた髪は明るい栗色で、目は青い。ユニやノーラとは似ているようで違う。ユニと違ってベスはこの世界に普遍的に存在する人間だ。

「ベス。この子、どうもこの家で生まれたらしい。何か服を用意してやってくれ」

「新生の黒猫、ですか」

それまで表情を消していたベスの顔に嫌悪の色がにじむ。ベスの冷たい目ににらまれて、ユニの尻尾はおびえて腰に巻き付いた。
ベスは黒いワンピースの上にフリルのついた白いエプロンを重ね着していて、黒いストッキングをはいた足に瀟洒（しょうしゃ）な黒い靴（くつ）をはいている。金持ちが雇う、家の雑事を片付けるメイドだ。

「冗談じゃありません。不吉な黒猫はあなた一人で十分ですよ、ノーラさん。目につくだけでも不快です。さっさと追い出して下さい」

「おいおい、生まれたばかりの赤んぼうにずいぶん冷たいじゃないか、ベス。それに使用人のお前が、旦那（だんな）のクロフォードとお嬢の許しもなく勝手に貴重な黒猫を捨てちまってもいいのか？」

ベスはかすかにため息をつくと、ユニとノーラを部屋の中に招き入れた。たたみかけの洗濯物が積まれた机のそばで待たされること十数分、ベスは湯が入ったたらいと白いタオル、それに黒い服を持ってユニ達の前に戻ってくる。

湯に浸し、軽くしぼったタオルでユニは全身を丁寧にふいてもらう。ベスはあいかわらずの恐ろしい無表情だったが、手際も力加減も絶妙だった。相当に手慣れているらしい。

肌をなでる温かで湿った感触。そして鼻をくすぐる心地良い花の香り。香油か何かが湯に混ぜてあるらしかった。生まれたてで何もかもが新鮮なユニにとっては、体に押しよせる膨大な情報に圧倒されてくらくらしてしまう。

両腕を上げてわきの下をふいてもらうユニを、ノーラは窓際によりかかりながらぼんやりと眺めている。懐かしいものでも見るような穏やかな目だった。

「お嬢様のお古(ふる)です。黒猫にはもったいないほどの上物ですが、それしかなかったので仕方ありません。ありがたく思って着て下さい」

「ど、どうもありがとうございます」

ユニはぺこぺこと頭を下げ、手渡された薄ピンクのパンティーをはき、黒いワンピースを被る。まるで予行練習を済ませた後のように、初めてでもてきぱきと着ることができた。

「よく似合うじゃないか。可愛い」

ノーラの感想にユニは首をかしげる。よく似合うのかそうでないのか、それさえもユニには判断できない。長い尻尾が服の下に押し込まれてしまって窮屈(きゅうくつ)な感じだ。それでも体を揺らすとワンピースの

端がふわりと舞い、ユニ自身も可愛いと思う。

「じゃあユニの身なりも整えたところで、お嬢に顔合わせさせるか」

「いけません。その前に旦那様にお伺いを立てなければ」

ユニの新生は予想外のことで、間に合わせの服は用意できても靴は無理だったらしい。ユニは裸足のままノーラの手に引っぱられ、華美な廊下を進み、書斎の前までやって来た。

重厚なドアをノックしてベスが先に中に入り、中で何やら話し合った後、外で待っていたユニとノーラを書斎の中へ呼び寄せた。

０２頁　「親の慈悲心、子ゆえの闇」

部屋に踏み入ったユニを見るやいなや、書斎の奥で黒檀（こくたん）の机に座っていた紳士が立ち上がる。そして、ゆっくりとユニの前に歩みよってきた。

「生まれたばかりの黒猫に会うことができるとは光栄だ。私はクロフォード＝ハミルトン。ベスの雇い主で、この家の主だ。ええと、君の名前は……」

「ユニ。ユニです」

クロフォードと名乗る男もまた、メイドのベスと同じように普通の人間だ。黒いスーツに身を包み、年の頃は４０歳前後だろう。きちんと整えられた金色の髪に豊かな知性をにじませる穏やかな灰色の目をしていて、全身から品が匂い立っているようだった。生まれたてのユニにも分かる。クロフォードという人間は金持ちで、上流階級の人間だ。

「ベスによれば、ユニはこの家で生まれたそうじゃないか。本当かね？」

「ど、どうもそうみたいなんです……」

「ああ、確かだよ、旦那。素っ裸で廊下をうろついているユニをあたしが見つけたんだ」

「……フランシスカは新しく生まれたユニに会おうとするのだろうなあ」

クロフォードはため息をつくと、整髪料で綺麗に固められた髪をがりがりとかきむしる。髪が無残に乱れていくのもお構いなしだ。

「ああっ、ユニっ！　どうしてよりにもよって我がハミルトン家で君がっ、黒猫が生まれてしまうっ！？　これでは娘がっ、私の愛しいフランシスカが消えてしまうっ！」

病的な発作（ほっさ）に見舞われでもしたかのように、クロフォードは「ぐああっ！」と叫び声を上げてごろごろと床の上をのたうち回る。

「だ、だいじょうぶですかっ！？　わたしのせいですかっ？　きっとそうですよねっ」

「ほっとけよユニ。澄ました旦那でも、お嬢のことになるといつもこうなんだから」

のんびりとタバコを吹かすノーラとおろおろするユニの足元でひとしきり暴れた後、クロフォードは息を切らしながら立ち上がる。暗い情念のオーラを身にまとって見つめてくるクロフォードは幽鬼のようで、ユニは恐ろしさに足がすくむ。

「今やフランシスカの望みはたった一つ。黒猫に会うことのみだ。できる限り娘の気持ちをくんでやりたいが、しかし、ユニを会わせるのは……」

「ユニを屋敷から追い出しても無駄だな。どうせ一時（いっとき）の時間稼ぎにしかならない。新生の黒猫は嫌でも目立つからすぐに街で噂になる。情報通のお嬢がそれを知るのに3日もかからないだろ。ユニを連れてこいってだだをこねるに決まってる」

「うむむ……」

クロフォードは書き物がたまった机に腰をかけて頭を抱え、やがて魂が抜け出るかのように大きなため息をついて顔を上げる。この短い時間で十年も年をとってしまったかのようにやつれた印象をユニは受けた。

「ノーラの言うとおりだ。仕方がないな。どうなるかは分からないが、これからユニを娘に会わせよう」

ふらつくクロフォードを先頭にしてユニとノーラが後ろに続く。書斎のドアを開けたところで、部屋の前に控えていたベスと出くわした。

「旦那様。まさか、そのちびの黒猫をお嬢様に？」

「ああ。今から会わせる。もう私がフランシスカにしてやれるのはそれぐらいだからな」

自嘲（じちょう）の薄笑いを浮かべるクロフォードに、ベスの表情が厳しくなる。

「旦那様。そのユニという黒猫がお嬢様を殺すかも知れないのですよ？　どうぞお考え直しを」

わけも分からずフランシスカの元へ連れて行かれようとしているユニは、殺すという言葉に驚いて耳をぴんと逆立てる。ユニには誰かを殺害する意思などない。不安になって隣のノーラに視線で問いかけるが、彼女は肩をすくめて見せるだけだ。

「……ここからは私とノーラとユニだけでいい。仕事に戻りたまえ」
深く頭を下げたまま畏(かしこ)まるベスの横を素通りし、クロフォードは廊下の先へ進んでいく。ノーラは当然のように、ユニはどこか申し訳ない気持ちでおずおずとベスの横を抜けてクロフォードについて行く。
ユニが振り返ると、ベスが氷のように極寒の目で自分をにらんでいるのが見えた。ユニはたまらずノーラの服を掴み、身体をすり寄せる。
廊下を歩き階段を上がる。重い沈黙と、クロフォードの哀愁を帯びた雰囲気がどうにもいたたまれない。まるで葬式に向かうかのような空気だ。
これから何が起こるのか、フランシスカという人物は一体何なのか、思えば思うほどユニの胸には不安がつのる。元気を失って頭の猫耳を垂れ下がらせていると、ユニは廊下の角で誰かがこちらを見ているのが目に入った。

「や、やあ、ダルジャンヌ」

「……」

曲がり角から半身を出してこちらを覗いている少女。ダルジャンヌという名前らしい彼女にクロフォードがあわてて挨拶しても、少女は無反応だ。口を開くことなく、ただじっとユニ達を見ているだけ。近寄りがたい異様な暗いオーラを放っている。
灰色の短髪に、たくさんの白いフリルがあしらわれた漆黒のゴシック調ドレス。脚をおおうニーソックスと靴まで黒い。何よりもユニの目を奪ったのは、彼女の背中から生えている一対の小さな羽と、その頭の上に浮かぶ光輪(こうりん)だった。ぼんやりと黄色く光る光輪はダルジャンヌの真っ黒な服のせいで闇夜に浮かぶ月のようだ。

何日も眠っていないかのような、あるいは誰一人信用していないような不安と不信に満ちた目でユニを見つめている。底知れない闇をたたえた赤紫色の瞳はダルジャンヌの内面を完全に隠しているが、ユニやノーラのような黒猫と同じように彼女が人間でないことだけはすぐに分かった。

「ユニ。ダルとあまり目を合わせるな。あいつ、色々やばいから」

小声でそう注意するノーラに、ユニは恐いもの見たさで後ろを振り返ってしまう。廊下の先へ進んでいくユニ達を、ダルジャンヌは壁に半身を隠したままの姿勢でずっと見ていた。それも、ユニだけを見つめている。ユニはびっくりして、ワンピースの下の尻尾がぴんと伸びてしまった。

ダルジャンヌがひそんでいた場所から十分に離れた時点で、ユニは思い切ってクロフォードに顔を向ける。

「ダルジャンヌさんって、何者なんですか？」

「フランシスカが趣味で館に住まわせている子だよ。普段は部屋にこもっているのに、今日はめずらしく部屋の外に出ていたな……」

「新しく生まれたユニの気配に誘われたんじゃない？」

「ユニ。ダルジャンヌの存在は屋敷の住人以外には誰にもしゃべってはいけないよ」

そうユニに念を押したきり、クロフォードもノーラも口をつぐんでしまう。ダルジャンヌのまとっていた雰囲気が伝染でもしたかのように、さきほどよりもいっそう三人の間の空気が重苦しくなる。

禁忌の少女ダルジャンヌ。その正体は不明であり、存在を口に出す

ことさえはばかられる。彼女はハミルトン家の抱えるタブー。ダルジャンヌの病んだ目を思い出してユニの背筋は凍えたが、クロフォードとの約束はちゃんと守ろうと心に誓った。

「ここが娘の部屋だ」

たどりついたドアの前でクロフォードは深呼吸をくり返す。娘の部屋に入るだけなのにどうしてそんなに緊張しているのか、ユニには理解できなかった。

「……フランシスカ……。私だ。ちょっといいかい？」

「……何か用？　お父様。用があるなら手短（てみじか）に話して」

ドアの向こうから届く女の子の声。その声は冷たく乾いていて、クロフォードへの興味の無さがありありとにじんでいる。愛情の反対は嫌悪ではなく、完全なる無関心だ。

「今日、この家で新しく黒猫が生まれたんだ。名前はユニ。ノーラといっしょにここにいるんだが、会ってみるかい？」

「すぐに通して。ありがとうお父様、好きよ」

フランシスカ嬢の感謝の言葉は歓喜に満ちていて、それを聞くユニの心まではずんでしまう。

娘の言葉に、クロフォードは嬉しさと悲しさを混ぜたような顔でたたずんでいる。娘と話せるのはありがたいが、黒猫を会わせてしまうことへの葛藤（かっとう）にさいなまれているらしい。

「どうしたの？　早くユニって子に会わせて」

石像のように固まっているクロフォードの代わりにノーラがドアノブを回し、それと同時にユニの手を引く。

「ユニとノーラだけでいいわ。お父様は入らないで」

フランシスカのドライな声に、クロフォードはドアを前で陸に打ち上げられた魚のようにぱくぱくと口を開いたり閉じたりしている。ノーラがさっさとドアを閉めてしまったので、クロフォードはフランシスカの視界からすぐに遮断された。

「初めまして、ユニ。まあ、小さくて可愛らしい黒猫。こっちに来てもらえるかしら。私は歩けないから」

「は、はいっ」

白くて清潔な壁に、曇り空の薄明かりが差す窓。何も無いがらんとした部屋の中に設えられたキングサイズのベッドの上に、フランシスカという名の少女が横たわっていた。

深窓の令嬢フランシスカ。さらさらとした美しい金の長髪に、灰色の瞳。年は１０代前半程度。よく整った顔をしているが、かなり痩せている。肌も病的に白い。何かの理由で健康でないことは一目で分かった。窓から見える空の雲を思わせる灰色のパジャマを着ていて、手足は枯れ木のように細い。

「この家で生まれたんですって？　すごいわ。運命的ね。ついに私の念願の黒猫が来てくれたのかしら」

「あのう、お聞きしたいんですが、黒猫って何なんですか？　わたし、本当に黒猫なんですか？」

03頁　「籠鳥雲を恋う」

自信なさげなユニの目を見て、ベッドから上半身を起こしたフランシスカはきょとんとする。その後に薄笑いを浮かべながら、ドアのそばに控えているノーラに目を向ける。

「ねぇノーラ。生まれたばかりの黒猫はそんなことも忘れているの？」

「前世の記憶がある奴はいいけど、それ以外の生まれたばっかの黒猫は阿呆（あほう）だよ。頭の中はほとんど白紙状態だ」

「そう。まあいいわ。私は黒猫については知り尽くしているの。だから黒猫のことを教えてあげる。
まず黒猫は私達人間とは違う。別の生き物よ。頭の耳とお尻の尻尾を見れば分かるでしょう？　あなたの頭の耳と尻尾が黒猫である証（あかし）」

ユニは反射的に頭に触れて猫耳を握る。こんな巨大でぴくぴく動く耳も、細かな毛で覆われた尻尾も、ベスやクロフォードやフランシスカにはついていない。それに、黒い髪や目もユニが見てきた人間達とは異質だ。

「黒猫がどうしてこの世に生まれてくるのかは誰にも分からない。仮説はいくつもあるけれど、どれも疑わしいものばかり。黒猫についてはっきり分かっていることは、人間を楽に死なせてくれるということ」

「楽に、死なせてくれる？」

「そう。人が頼めば、黒猫は死にたい人間を天に連れていってくれるの。いっさい苦しみが伴わない、慈悲深い死。死体も服も何も残らないの。黒猫はそういう能力をもっている。ユニにもその力があるわ。私がユニに死なせてと頼めばユニは私を殺せるはずよ」

ユニは不思議な気持ちで自分の小さな手を見つめる。この非力な手がどうやって人を殺すというのだろう。ハミルトン家に生まれる前もどこかで黒猫をやっていて、頼まれるがままにたくさんの人を天に連れて行っていたのだろうか。

「この街の名前はメメントモリ。ほんの少しの黒猫が住んでいる人の街よ。黒猫は天の使いと信じられているから人々に愛されているし、逆に畏(おそ)れられてもいる。人の死にまつわる存在だから恐がられても仕方がないけれど。私は黒猫って好きよ。可愛らしいし、能力も魅力的」

フランシスカはユニとノーラを見て軽く笑うが、少し話しただけでもう息が切れてきている。額にも汗が浮かび、見るからに辛そうだ。

「大丈夫ですか？　どこか具合が悪いんですか？」

「ああ、心配しなくても大丈夫よ。どうせそのうち死ぬから」

笑い飛ばすフランシスカの目に宿るのは、死への恐怖ではなく、純粋な諦観(ていかん)。彼女はもう己の死すべき運命を受け入れてしまっている。身近な死にすっかり憑(つ)かれてしまっている。

「生まれつき胸が悪くてね。小さなころからだんだん悪化して、いつ死んでもおかしくない状態なの。もう恐がるのにも、泣くのも飽きたの。死ぬのは恐くないわ。べつにいつこの世から消えても良い

の。黒猫に殺してほしい。それが私に残った、ただ一つの生きる理由よ」

理想の死に方を求めるために、今にも消えてしまいそうな命をつなぎ止めている。フランシスカがどうしてそんなことをするのか、生まれたてのユニには理解できない。それに、黒猫ならすぐそばにノーラがいる。ユニは首をひねって後ろのノーラを見ると、「ノーラはノーラでいいのだけれど」というフランシスカの言葉で顔の向きを元に戻す。

「私は黒猫が好きよ。だからノーラをこのハミルトン家に置いているの。黒猫は街の共有財産だから個人が独占するのはいけないことだけれど、お父様が何とかしてくれた。お父様は金持ちで、一応の名士だから」

「ま、ここは良い家で住みやすいし、食事も美味しいからあたしに不満はないけど」

「そうそう、ユニ、ダルジャンヌには会った？　背中に手のひら位の羽がついてて、頭に光るわっかが浮かんでいる女の子……」

ユニが恐る恐るうなずくと、フランシスカはけらけらと笑う。

「あの子も私のお気に入りなのよ。ほら、ダルジャンヌってけっこうイカれてるでしょう？　私と同じみたいで面白いのよ」

あのダルジャンヌをそばに置いて養って、いったい何が楽しいのかユニには分からない。対人経験がほぼゼロのユニでも、このフランシスカという少女が人間の平均的な価値観からいちぢるしく逸脱した精神の持ち主であることがうかがえる。

「ユニ。あなたに興味があるわ。新生の黒猫のあなたにね。このまま病気に殺されるのは御免(ごめん)だけれど、自分の意志で自分の生に幕を下ろせるのなら満足なのよ。でも、黒猫なら誰でもいいわけじゃない。私は黒猫に、私を殺す資格を求めるの」

「殺す、資格ですか……？」

「つまらない黒猫、何の美学も哲学ももっていないどうでもいい黒猫に命を差し出したいとは思わないの。だってそうでしょう。どうせ命を持って行かれるのなら、好ましい相手がいいじゃない。この街の黒猫は全滅。ノーラは惜しかったけれど、殺されたいと思う黒猫は一人もいなかった。だから、街に新しく生まれたユニに期待しているの」

真摯(しんし)な目で見つめられる。ユニは少し緊張し、それまで風に揺られるようにゆっくりと動いていた尻尾もぴんと下に向かって伸びてしまう。

こういう目にユニはおぼえがあった。前世の記憶は飛んでしまっているが、たしかに自分はたくさんのこういう目と向き合って生きていた。魂に深く刻まれた感覚は忘れたくても忘れられない。この世には生を謳歌(おうか)する人間がいるように、狂うことなく真剣に自分の死と向き合う人間もいるのだ。

「わたし、フランシスカさんに何かしてあげたいと思います。ベスさんに身体をふいてもらったし、こんな綺麗な服ももらったし。この黒い服って、フランシスカさんのものらしいですね」

「ふぅん……。上出来ね。ちゃんと自分というものを持っている。あなた、なかなか見どころがある黒猫だわ」

ユニのどこを気に入ったのか、フランシスカはにやにやと笑う。そして、手をぱんと打ち鳴らす。

「決めたわ。今日からユニはうちの子よ。ユニはもともとこの家で生まれたんだし、それがいいわ」

その時、部屋のドアが勢いよく開けられた。どうもドアの向こう側にはりついて聞き耳を立てていたらしいクロフォードが、フランシスカの白い城にあわてて踏み入る。

「フランシスカ！　ほ、本気なのかい？　黒猫のユニを迎えるというのは……」

「ええ。この子が気に入ったの。それよりノックもせずに勝手にレディーの部屋に押し入って不愉快よ、お父様」

汚物を見るかのようなフランシスカの目にクロフォードは一瞬ひるんだが、そらしかけた顔を正面に戻す。なにしろ今は非常事態だ。愛する娘に死をもたらしかねない黒猫が屋敷の住人となって、良い影響があろうはずもない。

「し、しかし、もうノーラもいるし、ダルジャンヌだっているじゃないか。友達は二人で十分だろう？　それに、ノーラに続いてまた街の黒猫を独り占めしたとなれば私への風当たりがいっそうきつく……」

「お父様。私はいつ死ぬか分からない。だから残されたわずかな時間を後悔しないように生きたいのだけれど、それでもユニを捨てるとおっしゃるの？」

後半の心にもない言い訳を一蹴され、もはやクロフォードは何も口に出せなくなった。

「ユニ。お父様はこころよく認めて下さったわ。今日からここがユニの家よ。あなたはとっても運が良いわ。普通なら街で生まれた黒猫は自分の力で生きていかなければならないのだから。生まれたばかりの黒猫は苦労するのが常なのよ」

「ただで置いてもらうなんて、そんなのいけません。何かお手伝いします。お掃除でも、ごみ出しでも、何でもします」

耳を逆立てて息巻くユニに、フランシスカはどこかあきれたような顔をする。何も分かっていないといいたげだった。

「そんなの、メイドのベスに任せればいいじゃない。特別で稀少な黒猫がわざわざやることじゃないわ。実際、ノーラもダルジャンヌも何もしていないし、あなたもわざわざ働くことなんてないわよ。ここに住んで、たまに私とお話してくれるだけでいいの」

「いえ、どうか働かせて下さい！」

「変な黒猫だなぁ。わけが分からない。自分から働きたがるなんて」

頭を下げるユニの後ろで、ノーラがとあくびを漏らしながらやる気のない声を出す。

「そこまで言うならベスの手伝いなんかしてみたらどうかしら？メイドの黒猫なんて可笑しいし、聞いたこともないけれど、見てみたい気もするし」

ユニの顔がぱあっと明るくなる。名前をもち、住み家を持ち、職を得る。これで自分は一人前だ。黒猫としては半人前以下なのかもしれないが……。

「ただし、ベスは大の黒猫嫌いだから覚悟が要るわ。それは憶えておいて」

ベスの攻撃的な視線と言葉を思い出し、ユニの耳がしょぼんと垂れ下がった。

「何度も言ったはずです。もっと丁寧に、隅々までみがくのです。指先に心をこめるのです。まったく、物覚えの悪い黒猫ですね」

「ご、ごめんなさい……」

いっそ眉の端をつり上げたり語気を荒げてくれれば分かりやすいのだが、ベスは表情を消したまま無情な言葉を淡々と投げつけるだけだ。心の内が読めない分、余計に恐い。

階段の手すりを濡れぞうきんでふいていたところをユニはベスに見つかり、仕事の雑さをとがめられていた。ユニは丁寧に頭を下げ、ベスにも自分の仕事があるので説教は長く続かなかった。最後にユニをひとにらみして、ベスは階段の踊り場から去っていく。

ベスの後ろ姿を見送りながら彼女は鋼鉄か何かで出来ているんじゃないかとユニは考える。人間でない黒猫のユニよりもよほど非人間的。あまりに隙がなさすぎる。てきぱきと完璧に仕事をこなしていく様は、まるでそのために生み出された専用道具のようだ。

０４頁　「それぞれの事情」

メメントモリの街にある豪邸のハミルトン家に生まれてから3日。本能とでも表現すべきなのか、人の世でちゃんと生きていくための常識や言語は知識として生まれもっていた。それでも知識はしょせん知識だ。数ある知識に生まれたばかりの身体や意識がついて行けず、ドジばかりをしてしまう。

またベスに怒られてユニは少し落ちこんだが、手を動かせばそれにつられて心も走り出すものだ。ユニは額に浮かぶ汗の玉を服の袖でぬぐい、黒く汚れたぞうきんを水を張ったおけですすぐ。

今のユニの服はフランシスカのお下がりでなく、ユニの身の丈に合わせて用意されたメイド服だった。黒いワンピースの上にエプロンドレスを重ね着し、お尻の尻尾も外に出せるように穴がついている。やはり長い尻尾を自由に動かせると調子がいい。しっかりとした作りの黒い靴ももらい、頭には猫耳の邪魔にならない程度のフリルがついたカチューシャをつけている。

ただの仕事着だが、その可愛らしいでたちをユニはとても気に入っていた。メイド見習いとして屋敷の掃除をする合間に窓ガラスを鏡代わりにし、頭のフリルや背中で結ばれたエプロンストラップの大きなリボンに見ほれてしまう。

「頑張るねぇ、ユニ。すぐに飽きて、投げ出すかと思ってたのにさ」

「ノーラさん」

階段の上にノーラがいた。手すりに胸と両腕を預け、火のついていないタバコを左手で器用にもてあそんでいる。尻尾もだらんと垂れ下がっていて、見るからにやる気がなさそうだ。

「変わった黒猫だよ、本当に。普通、あたし達黒猫はもっとさばさばしてるんだよ。無意味に人間には関わらない。それなのにお嬢のためにただ働きするなんて」

「だめですか？　こんな生き方じゃ、わたし黒猫失格ですか？」

「いいや。どう生きようが、その黒猫の自由だからね。ユニの好きなようにやったらいいさ」

ふふんと笑うノーラに、ユニも肩の力が抜けてしまう。朝から階段の手すりと格闘していた疲れもあって、ユニは階段の上に腰を下ろした。

「ノーラさん。わたし達黒猫って、何のためにいるんでしょう？」

「さあ。人間を楽に死なせる力をもってはいるけれど、そもそもその意味が解明されていないんだ。天に連れていった人間がどうなるのか、案内人の黒猫自身にも分からない。確実に天国へ行けると人間の間では信じられてはいるけれど、黒猫にも分からないんだ。昇天した人間の最後なんか、誰にも分からない」

「ノーラさんも、人間を天に送ったんですか？」

「うん。ここに住むことになる前は、それなりの数をこなしたよ」

ユニは不安な気持ちで上に立っているノーラを見上げるが、彼女はそれまで通りぼけっと向かいの壁を見ているだけだ。

「どうでした？　何か感じましたか……？　恐いとか、悲しいとか」

「いいや？　べつに普通だったよ。黒猫にとっては生きるための仕事だよ。楽しいも悲しいもないさ」

「生きるための仕事」

人を殺すことがどうして黒猫の仕事なのだろう。頭に浮かんだ疑問をユニが口に出すよりも先に、ノーラが話を続けた。

「黒猫の掟（おきて）に”人間が死ぬように自分から促してはいけない”というのがあってね。いくら仕事といっても、黒猫側から人を殺すように働きかけてはいけない決まりなんだ。お嬢が死にたがっていても、ユニの方からわたしの能力で死にませんか？なんて聞いちゃいけない。あたし達黒猫はあくまで人間の頼みを聞くだけさ。ちゃんと憶えておくんだよ」

ノーラは「邪魔したね」と言い残し、階段を上がっていってしまう。ユニは休憩を終え、手すりみがきを再開した。

黒猫は人を天に連れていく。だが黒猫の掟に従っている限り、黒猫の意思で人を殺すことはできない。だから黒猫は人間の街で暮らしていけるのだ。死なせてほしいと頼まない限り黒猫は何もせず、ただそこにいるだけの無害な存在なのだ。クロフォードとベスがユニの同居をしぶしぶ認めたのも黒猫の掟のためだろう。たしかにユニはフランシスカを死なせてしまう可能性があるが、最終的な決定権は人間のフランシスカが握っている。黒猫という死の爆弾は、人間が火種を与えない限り爆発することはない。

そんなことを考えながら手すりをみがきあげ、ユニは心地よい達成感を胸にクロフォードの書斎を目指す。

ドアをきちんとノックし、クロフォードの入室の許可をとってから中に入る。

「何か用事かい？　ユニ。困ったことがあったのかい」

「お部屋の掃除をしようと思いまして」

「そうか、掃除か……。うん、助かるよ……」

ほうきとちりとりを両手に現れたユニに、クロフォードはどこか困ったような苦笑いを浮かべる。

クロフォードは種種の書類が並べられた机と向かい合い、ペンを片手に書き物の最中だ。仕事中に部屋をうろうろされては大切な集中力を殺(そ)がれてしまうのだが、そんなことはユニは分かっていない。正しいメイドとは、雇い主に不自由を感じさせない仕事人。家の中に主人の仕事場があるのなら、主人が使っていない時にきちんと掃除と整頓を済ませるのが定石だ。その基本さえ見習いメイドのユニは知らなかった。

堂々と床の掃き掃除を始めたユニに、クロフォードはかすかにため息をついて椅子に深く背中を預けた。この際に手を休めることにしたらしい。

「クロフォードさん。フランシスカさんと上手くいっていないようですね」

「うん……？　う、うぅむ……」

「どうしてですか？」

人と接した経験が浅いユニには感情の機微(きび)がまだつかめない。他人が安易に触れてはいけない問題の領域にもあっさりと踏みこんでしまう。

「……娘がまだ小さい頃に妻に先立たれてね。私も仕事が忙しく、フランシスカの世話は使用人に任せきりだった。あの子は家族というものにほとんど触れていないんだよ。フランシスカが長く生きられないと知っていれば、仕事など放っておいてもっと構ってやるべきだった。全て、私が悪かった」

クロフォードは沈んだ表情で、組んだ両手の上にあごを乗せる。そんな彼に、ユニはフローリングを掃いていた手を止めて首をかしげる。尻尾もくねった形のままで固まっていた。自分は何かいけないことを訊(き)いてしまったのだろうか？　胸にわき上がる悪い予感に、ユニは今さらになって不安になってきた。

「ごめんなさい。わたし、また何かドジをやってしまったんでしょうか」

「いや。ユニはよくやってくれているよ。賓人(まれびと)の黒猫が自分から人の家に住んでくれるだけでもありがたいのに、その上ベスの手伝いまでしてくれている。君が生まれてから、フランシスカがよく笑うようになった」

クロフォードの遠い目は、別の部屋でベッドにとらわれているフランシスカに思いをはせているのかもしれない。同じ家に住む父と娘の間柄だというのに、二人の間の距離ははてしなく広い。

「フランシスカは私を嫌っている。無理もない。ほとんど関わっていないのだからね。いくら美しい服や宝石を買い与えても、余命を延ばすことはできない。フランシスカはもう楽に死なせてくれる黒猫しか求めていない。私は、どう娘と話せばいいのかが分からないのだ」

「付き合い方が分からないのはフランシスカさんも同じだと思いますよ。今度フランシスカさんにもっと話してみるようにお願いしてあげます」

「ほ、本当かっ！？　頼むっ、ぜひ頼むっ！」

クロフォードは紳士然とした態度を一変させ、ユニの前に飛び出してひざまずき、ユニの小さな手を掴む。ユニは驚いて、猫耳をぴんと逆立てた。

「ノーラはそんなことを口に出さなかった。いや、そもそも私とフランシスカの問題にまったく興味を示さなかった。君は良い黒猫だ。君を家に招き入れて良かった」

感動のあまり涙でぐしゃぐしゃの顔で見上げるクロフォードに、子どものユニはおろおろしてしまう。娘と話せるだけでどうしてこれほど喜ばしいのかうまく理解できなかった。

「君の手は温かいな、ユニ。黒猫の手はもっと冷たいと思っていたよ。人に死をもたらす存在などとは思えない」

「あはは。大丈夫ですよ。黒猫は人に頼まれない限り、誰も殺さないんです」

「失礼します。予定通り、黒猫のアルマが館にやって来ました」

ノックをしてそのまま書斎に入ってきたベスに、クロフォードは硬直した。なにしろ彼は少女のユニの前にひざまずき、その手を握って涙を流していたのだから。

クロフォードは「ぬあっ！」と気合いか悲鳴のような奇声を上げて

床の上を転がり、机の陰で顔をぬぐって立ち上がる。

「そうか。アルマが来たか。分かった。報告ご苦労」

きりっとした顔でそう返事するクロフォードにベスはまゆ一つ動かさずに頭を下げ、部屋を出るついでにユニの首をつかんで外まで引きずり出した。書斎の壁に立てかけてあったほうきとちりとりを見て、ここでユニが何をしていたのかを瞬時に読み取ったらしい。書斎から離れた場所まで引きずられ、クロフォードの仕事の邪魔をしたことと、書斎の管理は経験豊富なベスの仕事であり素人同然のユニには早すぎるとたっぷり説教された。

黒猫のアルマとは何者かを聞こうと思っていたのに、ベスのいじめに近い言葉を頭に打ち込まれ続けるうちに意識からアルマが飛んでしまっていた。

説教を終えて立ち去っていくベスを見送りながら廊下のかたすみでへこんでいると、ユニの優れた五感は何者かの気配を感じとった。

「……ッッ」

廊下の曲がり角にダルジャンヌがいた。前と同じように、半身を壁に隠したまま、じとっとした目でユニを見ている。三日前に目撃して以来ずっと部屋にこもっていたらしいが、部屋から出てきたのだ。あいかわらずの黒いドレスに背中の小さな羽。頭に浮かぶ満月のごとき光輪。黒猫のユニと同じように、ダルジャンヌも人間ではない。クロフォードもベスもダルジャンヌについてしゃべろうとしない。まるでそんな少女は館にいないとでもいいたげだ。

０５頁　「能ある黒猫は爪を隠す」

「……こんにちは。ダルジャンヌさん。わたし、黒猫のユニです。この家で生まれました。仲良くして下さいね」

ハミルトン家で暮らす以上、ダルジャンヌは家族同然。ユニは得体の知れないダルジャンヌを見つめながら笑顔で自己紹介したものの、何も反応が返ってこない。廊下の静寂が重苦しくてならなかった。

「……ダルジャンヌ……」

十数秒をおいて、ぼそりと己の名を口にするダルジャンヌ。どうもそれが彼女にとっての自己紹介らしい。

ノーラいわくダルジャンヌはいろいろやばい。フランシスカいわくダルジャンヌはけっこうイカれてる。具体的になにがやばくてどうイカれてるのかユニには分からなかったが、それでも彼女と親交を深めるために恐る恐る歩みよる。

ダルジャンヌの全身から発せられる暗黒のオーラがまるで物理的な障壁のようにユニの足取りを重くする。ダルジャンヌからユニに向かって強風が吹いているかのようだ。赤紫色の瞳が微動だにせずユニに向けられているのも心理的な抵抗を誘う。ものすごい女の子だった。心の壁が厚すぎる。

ユニは寿命を削られる思いでダルジャンヌの前までたどり着き、「よろしくね」と笑顔でダルジャンヌの左手を取って両手で握る。異様に体温が低い。明らかに黒猫や人間の体温以下。生命活動が停止した死体が動いているかのようだ。

ダルジャンヌはユニに握られた手をひたと見つめたきり、顔を上げようとしない。また何かドジを踏んでしまったかと思ったユニは急いで彼女の手を離す。すると今度はあの不眠と不信が積み重なった

かのようなくまが浮かんだ目で見つめられる。至近距離で見られるのはキツすぎる。

「じゃ、じゃあ、わたしは仕事があるから。また今度お話ししようね。さようなら」

尻尾を震わせながらにっこり笑い、ユニはそそくさと廊下の先へ歩いて行く。

メイドの心得(こころえ)についてベスからあれこれ指導された時、ダルジャンヌの部屋には絶対に入るなと強く警告されたことを思い出す。ダルジャンヌの部屋の掃除はベスがやるからユニは決して手を出すなということだ。

普段ダルジャンヌがこもっている、彼女だけ闇の城。いったい中がどうなっているのか、想像もつかない。そこに足を踏み入れる勇気はユニには無い。ダルジャンヌと向き合ってそれがよく分かった。

メイドの経験がまったく足りないユニにはクロフォードの書斎やダルジャンヌの部屋は難易度が高すぎる。それを胸に刻みこんだユニはぞうきんを取りにとぼとぼと長い廊下を進む。

階段の手すりみがいていた時のように濡れぞうきんと水おけを用意し、一生懸命窓ガラスをふいていると、ガラスの端に小さな人影が映っているのに気がついた。

「〜〜〜〜〜〜ッッッ」

ダルジャンヌだった。遠くからユニの背中を見ている。ユニの後をつけてきたのだ。ユニの尻尾がぞわぞわとした体感で逆立ち、長い髪も猫耳もそれにつられた。

ユニがそろそろと振り返ると、こっちを見つめていたダルジャンヌと視線が衝突する。彼女はつかみ所がない。性格も正体も追ってきた理由も不明で、謎である分恐怖を感じずにはいられない。

「こ、これでこの窓はピカピカね。さあ、次に行こう……！」

わざとらしく明るい声を出した後、ユニはぞうきんと水おけを両手に廊下を早足で進む。ダルジャンヌをまくように広い屋敷の中を行ったり来たりして次の窓をみがいていると、背後に暗い気配を感じとった。

振り返れば、また後ろにダルジャンヌ。完全に追いかけられている。まるで真昼の亡霊だ。人間はいるかどうかも分からない幽霊を恐れているらしいが、幽霊などよりよほど恐いのは身体をもった人間なのではないかと、この日のユニは直感する。なにしろ人間もダルジャンヌもちゃんとそこにいて、他人を物理的に殺傷する肉体を持ち、そのための意思をもつこともあるのだから。

ユニがどこへ移動しても、気がつけばいつの間にか背後にダルジャンヌがいる。何のつもりか距離を取りつつ聞いてみても彼女は何も答えない。ただじっと赤紫色の目でユニを見ているだけだ。

化け物が恐ろしいのは、その外見や能力のせいだけではない。言葉が通じず意思疎通ができないことが大きい。相手を理解できないことが恐怖心を増幅するのだ。

逃げるユニと影のように追いすがるダルジャンヌ。そんな不毛な鬼ごっこをくり返していると、ユニは廊下の向こうから歩いてくる人物とはちあわせした。

「初めて見る顔ですね。あなたがフランシスカの言っていた新生の黒猫ユニですか？」

「あなたも黒猫……？」

「ええ。アルマです。どうぞよろしく」

会釈(えしゃく)する黒猫に、ユニもあわてて頭を下げた。黒猫のアルマ。ユニには聞き覚えがある。さっきベスが口に出していた名だ。
アルマという名の黒猫はユニやノーラと同じように頭に大きな猫耳を生やし、腰の上から黒い尻尾をゆっくりと揺らしている。さらさらとした、背中にとどくほど長い黒髪。綺麗というよりも可愛らしい顔にかけた眼鏡。外見は子どものユニよりも少々年上のようだった。喪服か何かのような黒い長そでの上着とひざ丈の黒いスカートを着ている。

「私はフランシスカの友人で、たまに彼女の部屋にお邪魔させてもらっているんです。まあ、おしゃべりが主な目的です」

「ということは、今日はフランシスカさんとお話に来たのですか？」

「はい。彼女から貴女のことをいろいろ聞きました。この館で生まれたそうですね。私は街中で生まれたので街でお店を開いています」

「お店、ですか」

「自分の力で生きるのが好きなのです」

アルマはにっこり笑いながら、ユニの全身をなめるように見る。ユニの衣服はメイド服とはいえ、ユニ用に仕立てられた高級なものだ。それにひきかえアルマの服は安っぽい作りと言わざるを得ない。いわばユニは金持ちの家で何不自由なく養われている飼い猫で、アルマは外で自活していかなければならないノラ猫だった。

「ユニはメメントモリの街に出たことは？」

「いえ、一度もありません。出ない方がいいとみんなが言うので…

…」

ハミルトン家が新生の黒猫を独占していることは秘密にした方がいい。どうせいつかはばれることだが、それでもユニはなるべく家の中に居て人目を避けた方がいい。ユニはそうクロフォードやベスから何度も言われていた。

「たまには外の空気を吸ってみるのもいいものですよ。こんな派手（はで）な屋敷に引きこもっていたら、息が詰まってしまいます」

外の世界。ユニは窓ガラスを通してしか外を知らない。常に灰色の雲におおわれた空に、グレーの街並み。季節は夏で服が汗で湿る暑さだというのに、メメントモリの街はどこか寒々しい印象だった。

「外に出るときにはぜひ私のお店に寄って下さいね。同じ黒猫としてユニなら歓迎しますよ」

ユニの目を見て笑うアルマに、ユニはどこかふに落ちないものを覚えていた。アルマの物腰は柔らかく言葉づかいも丁寧なのに、なぜかかすかにざらりとした感じを受ける。頭での理解と身体での感覚が食い違っている。人間よりもはるかに優れたユニの第六感が、アルマが異質で危ないと警告しているようだ。

「ではまた会いましょう。ぜひお店に遊びに来て下さいね」

最後にもう一度念を押して、アルマは笑顔のまま廊下の先を歩いて行った。アルマの背中を見送りながら、そういえばダルジャンヌがいないとユニは気づいた。ハミルトン家の者ではない客が来ると隠れてしまうのかもしれない。

そんなことを考えていると、廊下の向こうから誰かがやって来た。

この先にはフランシスカの部屋しかない。どうも彼女はフランシスカの様子を見に来たらしい。

「ベスさん。わたし、さっきここでアルマという黒猫に会いました」

「そうですか」

ユニを見もせずになかば無視する形で横を素通りするベスに、ユニはあわてて後ろから声をかける。

「アルマさんって、フランシスカさんの友達みたいですね。わたし、驚いちゃいました」

「友達？　アレが？」

ベスは立ち止まり、つかつかとユニのすぐ前に歩みよる。魂まで凍りつくような冷たい目で見下ろされ、ユニの耳と尻尾がぴんと伸びる。

「アレはお嬢様の友達などではありません。お嬢様の命をつけ狙う、卑(いや)しい殺し屋です」

「ころ、しや……？」

「殺し屋といっても自殺代行業者ですが。本来、黒猫は自分から人間に死を決意させることは禁じ手のはずです。それなのにアレは友人をよそおってお嬢様と接触し、遠回しに自分の力で死ぬようにしつこく訴えかけている。お嬢様の命の莫大な価値を欲しているのです。今日の来訪は悪質な営業であり、非合法ギリギリです」

「そ、そんなに悪い黒猫には見えなかったような……」

「馬鹿ですね、あなたは。憶えておきなさい。裏表がない人間など一人もいません。黒猫も同じです」

この冷徹なベスにも、知られざる裏の顔があるのだろうか？　「お嬢様の具合が気にかかるので失礼します」と言ってフランシスカの白亜の城を目指して歩くベスを見送りながら、ユニはもやもやとしたものを胸に抱えていた。

その日の夜、フランシスカの容態（ようだい）が悪化した。高熱を出し、息は切れ切れで、ベッドの上でうなされている。

クロフォードはフランシスカの部屋の前の廊下を落ち着き無く行ったり来たりしている。ダルジャンヌは見かけない。部屋にこもっているらしい。ユニとノーラは部屋の前にたたずんだきり、看病にせわしなくかけまわるベスを見ていることしかできない。

「……まさか、昼間のアルマって黒猫がフランシスカさんの命を……」

０６頁　「深い川は静かに流れる」

「いや。あり得ないよ。時間をかけてじわじわと苦しめることなんかできない。黒猫が人間を殺すときは苦しむ間もなく一発だ。首をばっさり落とすみたいに」

ノーラは壁に背中を預け、のんびりタバコを吹かしている。ノーラは慌てず、騒がず、落ち着いている。どうもフランシスカの病弱ぶりには相当に慣れているらしい。

「おおかた、アルマの奴とたくさん話して疲れたんだろう。疲れが身体にはね返ってきたのさ」

「だ、大丈夫ですよね？　フランシスカさん、助かりますよね？」

「生き残るときは生き残る。死ぬときは死ぬ。ただそれだけさ。お嬢はいつ死んでもおかしくない身体だよ。今夜が最後って可能性も十分ある」

「……もしも最後だったら、ノーラさんはどうするんですか……？」

「死なせてほしいと頼まれればすぐに天に送ってやるさ。普通に死ぬのと違って痛みが無いから楽だろうし、この家には長く世話になったしね。せめてものお礼。まあ、お嬢の性格上、あたしに頼むのは９９％あり得ないけど。あの子は気に入らない黒猫に殺してもらうくらいなら、苦しんで死んだ方がましって考える人間なんだ」

死の苦痛よりも自らの信念に殉（じゅん）ずる。フランシスカとはまだたった３日の付き合いで話したことも数回程度だが、きっと彼女はノーラ

の言う通りにするだろうなとユニも感じていた。
部屋のドアが開き、暗い面持ちのベスが出てくる。

「……お嬢様が、ユニに来てほしいそうです」

ユニはとまどってベスやノーラやクロフォードに視線の先を往復させる。クロフォードは口を大きく開いたまま、彫像のように固まっていた。

「大丈夫です、旦那様。何度もお嬢様に確認しました。黒猫の力で死ぬつもりはないそうです。ユニの力が使われることはありません」

全身硬直から解けたクロフォードの横を通り、ユニは固い表情でフランシスカの部屋の入った。
フランシスカはいつものようにベッドに仰向けになり、赤い顔で目を閉じている。呼吸の間隔が異常に短い。

「ありがとう。ユニ。退屈だろうけど、ユニにそこにいてほしいの」

「は、はいっ」

フランシスカの声は細く、弱々しい。まるで消える寸前の蝋燭(ろうそく)の灯(ともしび)火だ。ユニはそわそわし、ベッドの横に立ったまま尻尾の先を痛いほどに握りしめる。
ベスはまくら元に置いた椅子に腰かけ、真剣な目でフランシスカの顔を見つめている。手に水で冷やしたタオルを持ち、フランシスカの顔の汗をぬぐっている。額にのせた濡れタオルを一定の時間で冷たいタオルに代え続けている。
こんなベスをユニは今まで見たことがない。ベスというメイドはいつも冷静沈着で、温かな血が通っていない鋼鉄で出来ているような

女のはず。それなのにこの必死な雰囲気は何なのだろう。ベスのこめかみから次々と汗が流れ、ほおを涙のようにつたい、あごからエプロンにしたたり落ちていく。死なせたくないという気持ちが鬼気迫る空気となって、ベスの全身から発せられている。
部屋の窓は全開になっていたが、今夜は熱帯夜とよべるほどに蒸し暑い。そのせいでフランシスカの寝間着は汗を吸って湿っていた。それに気づいていたベスは頃合いを見はからって部屋を出て、着替えとタオル、そして湯を張ったおけを用意して戻ってきた。

「お嬢様。身体をふいて、お召し物を代えましょう」

「ベス。ユニと二人きりにしてほしいわ」

「お、お嬢様？　まさか、黒猫の力を……」

「さあ。先のことは、分からないわ……」

意味深なことを言って薄く笑うフランシスカに、ベスは瞳を揺らす。そうして少しの間沈黙し、そっとフランシスカの手を握る。

「お嬢様。どうか生きて下さい。それがこのベスの唯一の願いです」

ベスは椅子から立ち上がり、深く一礼する。そしてフランシスカの望みの通り、静かに部屋から出て行った。
ユニは不安な思いでベスの背中を見送り、それまでベスが座っていた椅子に座る。椅子が温かい。ベスの体温が残っている。冷たい性格のベスにも、ちゃんと温かい血が通っている証拠だった。

「朝、目を覚ますと、私の世界がまわりだす。何かをしようと思って、思い通りにできる日もあるし、具合が悪くてできない日もある」

フランシスカはぼんやりと天井を見ながら、うわごとのようにそんなことを言っている。生まれたばかりのユニには、彼女が何を言っているのかさっぱり分からない。

「そして太陽が沈んで夜になる。眠くなって、私は目を閉じて眠るの。多分、死とは眠っている時のようなものだと思うの。意識が途切れて、暗闇の中に入って、もうそこから出て来られない。眠りは時間が経てば暗闇から目覚めるけれど、死はもう決して目覚めない。意識は消えて、身体は腐る。そして私は眠ったまま死ぬことになるかもしれない。生きたまま朝を迎えられたら、命に感謝する。そういうことを考えながら、私は毎日を過ごしてきたの」

フランシスカはそこまで途切れ途切れに話すと、ふっと小さく笑う。

「ごめんなさいね、ユニ。いつもは死など恐くはないのだけれど、体調が崩れるとどうにも弱気になってしまう。ただの独り言よ。気にしないで」

「……あの、わたしと二人になる前に、ベスさんに着替えをさせてもらった方がいいんじゃないでしょうか。ここにお湯が用意してありますし、フランシスカさん、かなり汗をかいていますし」

「何言ってるのよ。あなたがやるのよ、ユニ。身体をふいて、着替えさせて」

「ええっ！？」

おろおろと視線をさまよわせて耳をぴくぴくと動かすユニに、フランシスカは意地悪く笑う。

「さあ、脱がせて。早くしないと湯が冷めてしまうわ」
「でも、わたしそんなことやったことないですし！　フランシスカさんに何かしてしまったら大変だし！」
「大丈夫よ。壊れ物の皿じゃないんだから、そう簡単に人間は死なないわ」

フランシスカは目を閉じたまま、頑としてユニの抗議を聞き入れようとしない。観念したユニはフランシスカの服に恐る恐る手を伸ばす。
たどたどしい手つきで寝間着のボタンを外し、胸と腹をはだけさせた。夜空の月のように白い肌。病的な白さの皮膚にはっきりと浮かんだあばら骨。痩せてへこんだ腹と小ぶりな胸。それらを目の当たりにし、ユニは息を呑む。
病床の虜（とりこ）となっているフランシスカの身体は痩せすぎていて、容易に死を連想させる。いつ死んでもおかしくない身体というノーラの言葉がユニの脳裏に蘇る。ユニは呼吸を止めたまま、食い入るようにフランシスカの身体を見つめていた。

「なあに？　もしかして、恐いの？」
「……ごめんなさい」
「可笑しいわ。あなた、人間を死なせる黒猫でしょう？」
けらけらと笑うフランシスカの上着を引っぱるように脱がせ、彼女の上半身を裸にする。
ユニはベスが用意していたタオルを湯に浸し、力いっぱいしぼった。

そして温めたタオルをフランシスカの腹に乗せる。初めてで力加減が分からないので、できる限り優しく、ゆっくりとタオルで腹をこする。

「もっと強くしても良いわよ。それにそんなにゆっくりじゃ、いつまで経っても終わらないわ」

緊張しているユニはこくこくとうなずき、それまでよりもやや力をこめて腹とみぞおちをぬぐっていく。そしてタオルを湯ですすぎ、綺麗にする。

胸とわき腹、それに肩も丁寧にふいていく。指先に骨の感触を強く意識する。ユニは何度か己の全裸を鏡で見てみたが、年ごろの娘の身体はもっと丸みを帯びていて柔らかい。それなのに、フランシスカの身体は骨ばかりだ。寝たきりで運動もできず、食べるものも食べられなければこうなるだろう。生まれもった身体の欠陥が、フランシスカの身体をこうさせたのだ。優しく触れていてもふとした拍子に壊してしまうような危うさに、ユニの指はかすかに震えた。

首筋や両腕を綺麗にぬぐい、フランシスカの上半身を起こして片手で支え、背中をふく。ベスが危惧した通り、フランシスカの背中は汗まみれで放っておいたら体温の低下をまねくところだ。

開け放した窓から夏の夜のなまぬるい風が吹きこむ。部屋の中にはユニとフランシスカの静かな呼吸の音しかしない。ユニに背中を向けたままのフランシスカはさっきから黙っていて、何を考えているか分からずに不安を誘う。

「あんなベスさん、初めて見ました。意外な気持ちです。ベスさんは優しいんですね」

「この家はかなり広いのに、メイドはベス一人だけ。料理は雇ったコックに任せているけど、それでもベス一人には重荷よね。ユニも

メイドとして働いてるけど」

「わたしなんか、ベスさんに迷惑かけてばかりですよ」

「新しくメイドを雇っても、みんなやめちゃうの。私のせいでね」

フランシスカはユニに顔を見せず、「くくく」と小さな笑いをもらす。

「私はわがままでメイドにあれこれ文句をつけるし、黒猫を家に住まわせるって趣味も理解できないみたい。死にかけの私を気味悪がって、どのメイドもすぐに出て行くわ」

とうに背中をふいてしまっていたユニは、フランシスカの背中に両手を当てながら耳を澄ましていた。

「たった一人残ったメイド、それがベス。私がこうして今日まで生きてこられたのはベスのおかげといってもいいわね」

ベスは若い女性とは思えないほどに精神力が強い。まるで情を表さず、淡々と仕事をこなしていく。その姿はまさに鉄人といってもいいほどだが、ベスがハミルトン家のメイドを辞めない理由は忍耐力の強さだけではないようにユニは思っていた。その理由は、さっき必死にフランシスカを介抱していたベスの顔だ。

07頁　「ユニ黒」

「もしかして、ベスさんが黒猫を嫌うのは……」

「私に死んでほしくないんでしょ。黒猫がそばにいる限り、常に死の可能性がつきまとうから。ノーラを家に迎える時だって、ベスはすごく反対したもの」

「アルマって黒猫のこともひどい言いようでしたよ。あれはフランシスカさんの命を狙う殺し屋だって」

「殺し屋ねぇ」

苦しげに笑うフランシスカに新しい上着をどうにか着せ、そっとベッドに横たえた。

「下もお願い」とさりげなく言うフランシスカにうなずいて、ユニは彼女のズボンを脱がせる。腕は枯れ木のように細くてユニは驚いたが、あまりに細いももにユニは衝撃を受けた。まるで棒切れだ。もう歩けないというフランシスの言葉にも、この脚を見れば納得がいく。上半身と同じように、下半身も丁寧に温かいタオルでぬぐっていく。

「アルマはアルマで面白い黒猫よ。あの子と話していると良い暇つぶしになるから好き」

「……ベスさんの言っていたことって本当なんでしょうか？　フランシスカさんの命を狙っているって……」

「本当よ。私にはアルマの腹が読めているし、そのことにアルマの

方も気づいている。おたがいに腹のさぐり合いで、あのしらじらしい空気が癖になるのよ。命がけの遊びって面白いわ。ベスはやめろって何度も言うけれど」

フランシスカのももからすね、足の指まで丁寧にふいたユニは、用意してあった代えのズボンをはかせる。動けない病人に服を着させるのは初めてで、腰がベッドと密着している分上着を着せるよりも難しい。

「ああ、良い気持ち。黒猫にこんなことをさせるのは初めてよ。ユニは優しいわね。私の身体に触れる手が温かいわ」

どこかで聞いた言葉だと思い、ユニは念入りに頭の中を探ってみる。思いだした。昼間、クロフォードがユニの手を握ったときにも温かいと言ったのだ。

やはりクロフォードとフランシスカは親子だとユニは思う。上手く付き合えない二人でも、血の絆は思わぬ所で表現されるものだ。

「フランシスカさん。もっとクロフォードさんとお話してみてはどうでしょう？　今も部屋の向こうで心配していますし、フランシスカさんとどう話せばいいのか分からないと言っていましたし」

「お父様の話はやめて。イライラするから」

それまで気分良さそうに微笑していたフランシスカから急速に熱が失われていくのがユニには分かった。ユニははっとし、それまでリズムを取るように宙で揺らしていた尻尾を自分のももに巻き付ける。

「お父様に恨みがあるわけでも、憎んでいるわけでもない。どうでもいい。お父様への感情はそれだけよ」

ユニはうつむいたまま生まれもった様々な知識をひっくり返し、この気まずい雰囲気を改善するための考えをとっさに打ち立てた。

「フランシスカさん。それはあれですよ。子どもが親に逆らうという、反抗期ですよ」

「ユニ。知ったような口で私を分類してほしくないわ。私の考えは、私自らが考え出した結論なの」

「け、結論……？」

「私の病気は悪化するばかりでベッドから一歩も動けない。私はずっと立ち止まったまま。誰も彼もが私の前を歩いて通り過ぎていく。お父様もそのうちの一人に過ぎない。それだけのことよ」

これはそうとう根が深い問題だぞと、ユニは頭をかいた。クロフォードへのフランシスカの思いは、彼女が生まれ変わりでもしない限り変わることはないだろう。フランシスカの父親への考え方はすでに完結してしまっているからだ。

「ユニ。顔もふいて」

ユニはタオルをぬるくなった湯ですすぎ、よくしぼってフランシスカのほおに添えた。できる限り優しく、指先に心をこめて顔をぬぐっていく。

フランシスカがじっとこちらを見ているのに気づき、ユニは手を止めて彼女を見つめ返す。

フランシスカの灰色の目。それにユニの黒い瞳が吸い付けられるようだった。得体の知れない感情がふつふつとわき上がり、そのせい

でユニの胸がざわついた。
この気持ちは何なのだろう。友情？　愛情？　恋愛感情？　それとも今すぐ殺してあげたいという優しい気持ち？　胸に満ちる感情の正体は生まれたばかりで経験にとぼしいユニには分からない。とにかく強い執着心だ。あえて言うなら所有欲に近い気持ち。

「ふふ。ユニ、今、とても恐い顔をしていたわ。人でない黒猫の顔よ」

ユニははっと我に返り、それまで硬直していた尻尾が勢いよくうねる。そして困ったように首をかしげた。
普通の人間なら病魔に蝕まれ痩せ細ったフランシスカを哀れに思うだろう。その悲惨な境遇に胸を痛めるだろう。だが、黒猫のユニにはそういう気持ちがよく分からない。こうしてフランシスカに触れていてもそれほど痛ましいとは思えない。生まれつき優しさの上限が低いのだ。
それもまた黒猫の特性なのかとユニは自分の胸に手を当てる。エプロン越しに触れる胸はほのかに柔らかかったが、ユニの胸の内側には冷たい暗黒がつまっているのかも知れない。

「良いわ、ユニ。あなたのそんな顔が見たかった。だから家に招いたのよ」

息を荒げながらうっすらと笑うフランシスカに、ユニは何も言葉を返せなかった。ノーラに言わせればユニは変わった黒猫らしいが、それでもたしかに黒猫なのだ。姿型は人と似通っていても、やはり本質的な部分では人間と違っている。ユニは人のフランシスカとは別物なのだ。
いつかユニの手でフランシスカを天に送る日が訪れるのだろうか。
そんな暗鬱な思いで、フランシスカの首をぬぐう手の動きがにぶっ

た。

「！」

部屋のドアから視線を感じる。ユニの動物的な感覚器官は小さな異変を敏感に察知した。そのことをフランシスカに伝え、彼女からの頼みを聞いてユニは椅子から立ち上がった。

部屋を横切り、ドアを開ける。クロフォードがせきばらいをしながらちらちらとユニを見ている。こうやってごまかしているんだとユニは思った。

「クロフォードさん。フランシスカさんからの伝言です。もしも次に勝手に部屋の中をのぞいたら、舌を噛みちぎって死ぬそうです」

「なあっ……！？」

ユニの言葉の威力に圧（お）されるようにしてクロフォードがふらふらと後ずさり、背中を廊下の壁にはばまれて退路を失った。

愛しい一人娘が死の黒猫と二人きりでいたら不安になるのが親心だ。だが、そんなクロフォードの心配もフランシスカにとってはこの上なく不快らしい。

「ベスさん。フランシスカさんが呼んでいます」

それまで泰然（たいぜん）とドアの前に控えていたベスがうなずき、ユニと共に部屋に入る。

「ユニ。いろいろありがとう。気持ちよかったわ。最後に一つ、お願いがあるの」

そんな不吉なフランシスカの言葉に、ユニとベスはそろってベッドのそばで身動きを止めた。

「私のことはフランシスカと呼んでちょうだい。さん付けなんて他人行儀で嫌なのよ」

そして気力の糸がぷつんと切れたかのようにフランシスカは目を閉じた。かすかな寝息の音を聞き、ユニは安堵のため息をもらす。ベスはフランシスカの寝顔をのぞきこみ、続いて机の上に置かれた濡れタオルと丸められた寝間着を見た。

「お嬢様の着替えは、あなたが？」

「は、はい。フランシスカさん……フランシスカが、わたしにやってほしいと言うものですから」

フランシスカさんではなく、フランシスカ。頼まれた通りに呼び捨てにするユニにベスの目が険しくなったが、一瞬後には諦めたようなため息をついて元の無表情に戻る。

ベスは掛け布団をはだけてフランシスカの衣服をざっとチェックし、掛け違えたボタンをてきぱきと直す。ユニのミスについて、ベスは何一つ言わない。

メイドの達人のベスがいればもうユニの出る幕はない。そう思ってユニが猫耳を垂らしながらすごすごと部屋を出て行こうとすると、背後からベスの声がかかった。

「仕事を途中で投げ出してはなりません。ここでいっしょにお嬢様の看病をなさい」

ベスは元から置いてあった椅子に座り、ほんのわずかな変化も見逃

すまいとフランシスカの顔を凝視している。フランシスカは安らかな寝顔で、熱に苦しめられていた先ほどとはうって変わった様子だった。
ユニはあわてて部屋の中を見回し、壁際に置いてあった客用の椅子を胸に抱えて運び、ベスの向かい側に置いた。椅子に座り、ベスのようにフランシスカの顔をのぞく。
フランシスカに起きる気配はなく、気持ち良さそうに眠っている。ベスはフランシスカが峠を越したことを部屋の外でそわそわしているクロフォードに伝え、何ごとも無かったように椅子に座り直す。ベスとユニの間に会話はない。静かで緊張した空気が二人の間にいつまでも流れていた。それでもユニは、ほんの少しだけ自分のことを認めてくれたベスを前よりも好きになっていた。

それが好む好まざるに関わらず、何かの仕事や義務や目標があるからこそ人は時間に押しつぶされずに済む。屋敷の掃除という役目はユニに暇を許さない。
どこを見ても仕事が次々と見つかる。いつの間にか廊下の隅にわたぼこりができているし、花壇の手入れも手間暇がかかる。黒猫に生まれながらも誰一人死なせていないユニには、ベスの手伝い仕事が良い暇つぶしになっていた。
ユニは階段の掃き掃除を終えてひと息つくと、フランシスカの部屋へ行ってみようと思った。たまに彼女の部屋を訪れることがハミルトン家に住むための条件だったし、フランシスカがまた病気に苦しんでいないかどうかが気がかりだった。

08頁 「Où est ma chatte? ―ウ・エ・マ・シャット?

フランシスカの部屋まで歩き、ドアをノックしユニだと告げる。ドアの向こうから届くフランシスカの許しを得てユニは中に入った。

「ようこそ、ユニ。ゆっくりしていって」

フランシスカはいつも通りにベッドの上に足を伸ばしていたが、上体を起こしてダルジャンヌと向き合っていた。思いがけないダルジャンヌとの遭遇にユニは息を呑む。

「……」

ダルジャンヌはベッドのそばの椅子にひざを抱えた姿勢で座っていて、部屋にやってきたユニをじっと見つめている。あいかわらず、何を考えているのかまるで分からない。

「ほら、ダル。貴女の番よ。早くして」

フランシスカにせかされてダルジャンヌはのろのろと机の上に視線を落とす。フランシスカとダルジャンヌの間には丸テーブルが設置されていて、テーブルの上には駒が並んだチェス盤が置かれていた。ダルジャンヌはしばし赤紫色の目を盤上にくぎ付けにし、ルークの黒い駒を三マス分移動させてフランシスカ側の白いポーンを殺った。そうしてダルジャンヌは真っ黒なスカートの中に左手を突っこみ、猿か何かのようにすねをぼりぼりとかく。

「よお、ユニ」

「ノーラさん！？」

ふと気づけば、部屋の端の窓の下にノーラがいた。ノーラは壁に背中を預け、フランシスカとダルジャンヌの対局をぼんやりと見守っている。

「どうしてみんな集まっているんですか？　今日は何かの集会ですか？」

「いいや。お嬢の部屋はまぁなんて言うか、一種のサロンだからな」

「ユニ。こっちへおいでなさい」

フランシスカがベッドの端をぽんぽんと叩き、ユニを手招きする。特に断る理由もなかったユニは、誘われたとおりにフランシスカの隣に腰を下ろす。

嫌でもすぐそばのダルジャンヌを意識してしまう。ユニは気づかれないようにダルジャンヌに目を向けると、彼女がユニを見つめていたせいで視線がぶつかり合う。ユニはあわてて目をそらし、盤上の攻防に視線を移した。

「みんなが私の部屋に集まるのは初めてね」

フランシスカはそんなことをつぶやきながら、クイーンの駒でダルジャンヌのビショップを蹴散らす。兵の損失に痛みを感じているのかいないのか、ダルジャンヌは病んだ目で戦局を見すえながら頭をかく。

「ユニももっと私の部屋でのんびりすればいいわ。もともと、掃除をする義務なんてないのよ」

「でも、ただで置いてもらうのはいけないことだと思いますし」

「だそうよ？　ノーラには耳に痛いんじゃなくて？」

「べーつにぃ。働かないで済むならそれに越したことはないさ。働かずに優雅気ままに暮らすこと、それは人間と黒猫の夢だからねー」

静かな部屋の中に、二人が駒を動かす硬質な音が響く。二人が何をやっているのか、ユニにはよく分からない。盤上の六種類二色の駒を交互に動かし、自分の駒を敵から逃がし、相手の駒を殺している。

「……ダルジャンヌ、強いんですか？」

フランシスカに身を寄せて小声で問うと、フランシスカは盤上を見つめたまま真剣な声で応える。

「この子の強さは日によってころころ変わるから、真の強さは分からないわ」

フランシスカの声と表情は固く、今の彼女にはあまり余裕がないことを物語っている。殺された駒が盤の横に置かれているのだが、死んだ駒の数はフランシスカの方がダルジャンヌのそれよりも多い。つまり、フランシスカの方が多くの兵を失っていて、追いつめられている。

フランシスカが常に盤上を見つめているのに対し、ダルジャンヌには集中力がうかがえない。フランシスカが自軍の駒を進めているときは部屋の向かい側を見つめていたり、そばに座っているユニに目を向けたりしている。それでもなお懸命に頑張っているフランシスカを追いこんでいるのだからユニには不思議だった。

ダルジャンヌが頭を上下に揺らせるたびに、彼女の頭上に浮かぶ光輪が頭と並行に宙をすべる。光輪はぼんやりと黄色く光っていて、ユニからすれば奇妙でならない。どんな力が働いて浮いて光っているのか、ソレはダルジャンヌの身体の一部なのか、全ては謎だった。ゴシック調の黒いドレスの背から生えた羽も作り物ではない。ダルジャンヌが腕を動かすたびにかすかに羽が揺らめいていた。明らかに独自の力で羽が動いている。

ルビーを思わせる、ダルジャンヌの赤紫色の瞳。死人のように白い肌。曇り空を思わせる灰色の髪。頭の光輪に背中の小さな羽。どれもこれもフランシスカやベスのような人間の身体とは一線を画している。髪や目が黒くて猫耳と尻尾が生えている、人ならざる黒猫よりも異様だ。

多くの駒を殺られて逃げの一手になっているフランシスカ。兵を犠牲にしながらキングの駒を盤の端へ逃がしているが、そこへダルジャンヌのナイトの駒が白のビショップを跳び越えて奇襲をかける。それでフランシスカのキングが殺された。

「ああ、チェックメートね。今日のダルは強かったわ」

王を詰まれ、フランシスカの敗北が決まる。フランシスカの強ばっていた表情が緩み、ふぅと小さなため息をついて笑う。

「勝った」

いきなりダルジャンヌがユニに顔を向け、そんなことを口走る。自慢しているのか褒めてほしいのか、その完璧な無表情からは内心がまるでうかがえない。

「す、すごいなあ、ダルジャンヌは」

尻尾を硬直させながらあいまいな笑顔を浮かべるユニにもダルジャンヌは無表情を崩さない。何を考えているのかは不明だが、彼女がユニを気にかけていることだけは確からしい。

「勝負もついたところで、お茶でも飲みたいところね。せっかくこうしてみんなが集まっているのだし」

チェスに負けようと悔しがる様子もなく、フランシスカはユニを見て「お茶会をしましょう」と微笑む。

「でも、わたし、お掃除の途中ですし」

「真面目な奴だなあ。いいじゃない、たまには身体を休めれば。お前、黒猫のくせに少し働き過ぎだ」

「ね？　ノーラもそう言っているのだし、そうしましょう、ユニ」

フランシスカとノーラの二人に押し切られる形でユニはうなずき、ベスにフランシスカの決定を伝えるために部屋を出て行った。
それから一時間あまりをかけて臨時のお茶会の準備が整えられた。
それまで庭仕事をしていたベスがフランシスカの部屋へおもむき、他の部屋から移動させてきたテーブルの位置を調整する。純白のテーブルクロスを用意し、それをてきぱきとテーブルに被せ、ユニは不器用ながらベスの仕事を手伝った。
ベスの準備と並行して住み込みのコックが厨房でクッキーとケーキを焼き、湯を沸かす。そしてそれらをベスとユニがフランシスカの部屋へ運んでいく。
部屋に満ちていく香しい紅茶の匂いと、甘いお菓子の薫り。ユニは思いがけない労働に額に汗を浮かべていたが、目の前に次々と並べられていくごちそうに腹が鳴ってしかたがなかった。

特に挨拶らしいものもなく、静かにお茶会が始まった。ベスが物言わぬ影のようにフランシスカの横に控え、テーブルの上のケーキやスコーンを小皿にとってフランシスカに渡す。フランシスカはベッドに腰をかけたまま、そばのテーブルの上に置かれたティーカップを取って軽く揺らし、その薫りを楽しみつつこくこくとゆっくりと飲んでいく。

お茶会といえば貴人達の集い。お茶とお菓子を楽しみながら笑顔で話を交わすものだが、ハミルトン家のお茶会は慣例を逸脱していた。参加者はそれぞれ好き勝手に飲み食いしているだけで、誰も何も話さないのだ。

フランシスカは独りで内面世界に浸っているし、ノーラは壁によりかかったまま本を読みつつ皿の上の菓子を手づかみで口に運んでいる。ダルジャンヌは壁際にひざを抱えて座っていて、紅茶が入ったカップを両手で大事に持っている。暗い目をしたままぶつぶつと小声で独り言をつぶやいている。そのせいでユニは彼女に話しかけることも近寄ることもできなかった。ベスは病弱なフランシスカの要求に瞬時に応える機械か何かのようで、無駄口はいっさいたたかない。

何もしない時間がゆったりと流れていく。ユニはテーブルの前の椅子に座って紅茶をすすり、たまにケーキをフォークで切って口に運ぶ。甘さが口いっぱいに広がって思わずほおが緩んでしまう。この異端のメンバーの中では比較的まともにお茶会を楽しんでいた。

何かの仕事に没頭していれば暇を感じなくなる。メイド見習いとして働いてきたユニにとって忙しさは一種の快感だったのだが、こうして何もしない時間というものには慣れていなかった。

何か、何かしなければ。ユニはそう思ってそわそわと尻尾を揺らめかせるものの、飲んで食べる以外にやることがない。誰にも強要されていないのに、お茶会を楽しまなければならない空気に呑まれていた。掃除仕事に戻りますと言って席を立とうものなら、今の穏やかな雰囲気をぶち壊してしまうのが分かっていた。

ユニは大きくため息をつく。いら立ちや不満によるものではなく、胸の内に溜まったはやる気持ちを吐き出すためだ。ガス抜きをして気を落ち着けて、改めて周りを見る。

誰も言葉を交わさないが、少なくともダルジャンヌ以外は楽しんでいるように映った。今は肩ひじを張らずにのんびりしていい。誰かの目を気にする必要がない。それが許されている。

何もしない時間もいいものだと、ユニは素直にそう思う。ただ急ぐばかりが正しい生き方ではなく、時には立ち止まって周りの景色に心を和ませるのも大切だ。そう思うと、カップから立ち上る紅茶の薫りにさえ世界の真理の一つが秘められているような気がした。

09頁　「自由論」

「どこか、遠くへ行ってみたいわ」

「……ああ、行ってみたいな。無理だけど」

窓からのぞく曇り空を眺めながらぼんやりと言うフランシスカに、ノーラが本に目を落としたままそぞろに応える。

「樹と花。川に鳥に虫。澄んだ空気と風。お店と民家、それに私の知らない街の人達。そういったものを見て感じてみたいわ。この街の外には、どんな世界が広がっているのかしら」

わざわざフランシスカにたずねなくてもユニには察することができた。フランシスカは重病のためにずっとベッドに縛られていて、外に出られない。だから彼女の世界はこの白亜の部屋と、窓からのぞく曇った空だけなのだ。

部屋の誰も何も言わない。ユニがさり気なく周囲の気配をさぐってみても誰にも目立った変化はないように思われた。変化の無さを薄情だと感じるのは、この場の誰よりもユニの神経が繊細だからか、それともフランシスカの言葉に皆が慣れてしまっているからか。

「……ノーラさんは、この街の外へ出たことはあるんですか？」

「ねーよ」

では黒猫の中でも情に厚いらしい自分が頑張らなくては。ユニはそっと笑みを浮かべ、フランシスカを見つめる。

「フランシスカ。今度わたしが街の外へ出て、そこで見聞きしたことを教えてあげますよ」

「何言ってる。黒猫は生まれた街から出られないんだよ」

「……え？」

きょとんとするユニに、ノーラが手元の本から顔を上げてこちらを見た。ほんの少しだけ表情が険しい。

「黒猫は街から出られないんだ。天の意思か何か知らないけど、出ようとしてもどういうわけか身体が動かなくなる。あたしもユニも、一生この街の外へ出られない」

「ありがとう、ユニ。気持ちだけ受け取っておくわ」

微笑むフランシスカに、ユニは猫耳を垂れさせてうなずく。それほど街の外を探検したいとは思っていなかったけれど、実は大きく自由を制限されている身だと知って落ちこんでしまう。

外に出たいけど無理だとノーラが先ほど言ったのは、フランシスカへのいやみではなく黒猫であるノーラ自身のことだったのだ。

このハミルトン家に生まれてから、今まで何一つ不自由せずに暮らしてきた。振る舞われる料理は美味しいし、フランシスカから与えられた個室とベッドは広く、温かい。何も不足を感じずにベスの手伝いに明け暮れていたが、屋敷の外はどんな世界なのだろう。すぐそばに広がるメメントモリの街はどんな所なのか。そんな疑問に、ユニはお尻の黒い尻尾をせわしなく揺らせた。

「黒猫が好きなのは、外に出られない所が私と同じだから。ある意味でノーラもユニも私の同類ね」

フランシスカは心底楽しげに笑う。一生街に束縛されると知って落ちこんでいるユニにもお構いなしだ。
街から出ることを許されず、死にたい人間を優しく殺してあげる黒猫。黒猫はいったい何のためにいるのだろう。このところ頭の外へ放り出していた疑問が戻ってきて、ユニはうつむいたままカップの底を見つめていた。

「ベスはこの街で生まれ育った人間だし、この中で街の外を知っているのはダルだけね」

フランシスカの視線を受けて、ダルジャンヌがのろのろとうなずく。それまで部屋の片隅で阿片中毒者のように何かをつぶやいていた彼女を、ユニはふたたび意識する。慣れとは恐るべきもので、屋敷のどこかでダルジャンヌを見かけ、背後霊のように追いかけられるたびにユニは彼女への耐性をつけてしまっていた。今の今まで異常なダルジャンヌを空気のように当たり前のものとして感じていたのだ。

「きっと外では男と女が恋の喜び謳歌(おうか)をしているのでしょうね」

「恋？」

聞き慣れないフレーズに、ユニが耳をぴんと立てる。

「私は恋も知らずに、この狭苦しい部屋の中でひっそりと朽(く)ちて死んでいくのだわ。処女で未婚で子どもも生まないまま……」

「お嬢様。レディーがはしたないですよ」

「こんなこと、本気で言っていると思うの？　ベス。ただの冗談よ。

私からすれば恋愛なんか糞食らえよ。恋に堕ちた人間は熱に浮かされて正気を失っているのよ。恋は理性の墓場ね」

「ノーラさんは、恋というものをしたことはありますか？」

「ねーよ。黒猫は恋なんてしない。一人で生まれて、一人で消えていく。ユニには母親も父親もいないでしょ」

ユニは「うぅむ」とうなり、両腕を組む。また一つ発覚した恋をしないという不自由に、どうにも気分がしぼんでしまう。
ユニにとっての母親は、いわば影。一片の光も差さない闇の子宮から生み出され、気づけば裸でハミルトン家に立っていた。ノーラの言うとおり、黒猫のユニの誕生には恋も愛もまったく関係ない。

「黒猫は恋をしない。そこも私と同類ね。だから黒猫って好きよ、ユニ」

「はあ」

返事ともため息ともつかない声をフランシスカへ返し、ユニは窓の外の曇り空を見つめた。
この街の空は昼も夜も常に曇っている。夕方に紅い夕陽が差すだけだ。ユニは生まれてからずっと屋敷にこもっていて、まだ外に出たことがなかった。今までそれほど外に興味を抱かなかったし、ハミルトン家が新生の黒猫を独占していることを世間から隠すためだ。
だが、いつまでも屋敷にこもっていてもユニの世界は閉じたままで、変化が訪れない。ユニの胸にはまだ見たことのない人間や恋というもの、それにメメントモリの街への興味がめばえていた。

「わたし、ちょっと外へ出てみようと思うんです」

ユニの言葉に、部屋の空気が瞬間的に緊張するのが肌へ伝わってきた。だめかなと思い恐る恐るそれぞれの顔をうかがうが、怒ったような顔の者は一人もいない。

「そうね。そろそろユニは外へ出てもいい頃でしょう」

「ま、ほどほどに冒険してくるんだね」

「外が気に入れば、そのまま帰ってこなくても結構ですよ」

ベスの辛辣（しんらつ）な意見が耳に痛い。ベスにとってはフランシスカを殺す可能性がある黒猫が消えるとなれば願ったり叶ったりだろう。だがフランシスカとノーラはユニの意思を尊重してくれている。ダルジャンヌは死んだような目でユニを見ているだけで、どう思っているのかあいかわらず読めなかった。

初めての外出用に仕立ててもらった洋服。ひかえめでありながら確実に品と愛らしさを演出するレースとフリルの組み合わせ。ユニは新品の黒のワンピースをまとい、何度も姿見の前で自分のいでたちを確認する。ちゃんと尻尾が出せるように専用の穴も開いている。ひざ丈のスカートがターンステップにつられてふわふわと舞う。まるでお姫様だ。ユニはそれを見て微笑み、鏡の前でつたないポーズを取ってみる。

そうして満足した後、ユニは書斎で仕事中のクロフォードに外出の挨拶をしに行った。

「ユニがこの家に住んでいることは内緒だよ。それに、ダルジャンヌのことも秘密だ」

そう何度も念を押され、「気をつけて行ってきなさい」と優しく笑いかけられる。ユニも笑顔で返事をした。
ベスとノーラに玄関まで見送られ、ユニはいよいよ外の世界を前にして胸を高鳴らせる。

「いいですか、ユニ。間抜けなあなたに多くを期待できないことは分かっていますが、それでもハミルトン家の名誉をおとしめるような真似だけは許しませんよ」

「はい……」

ベスの冷たい目に見下ろされ、ユニは宙でくねっていた尻尾を萎えさせる。正午前で汗ばむほどに気温が上がっているのに、ベスの周りだけ真冬のように冷え冷えとしている。

「ま、気張(きば)らず適当に楽しんできな」

ノーラは火のついたタバコをくわえたまま腕を組み、淡い笑みを浮かべている。そんな先輩黒猫のノーラにユニの緊張が解きほぐれていくようだった。

「ノーラさん。わたし、頑張ってアルマに会いに行ってきますね」

「アルマねぇ」

ノーラが目を閉じ、ぼりぼりと頭をかく。
アルマ。フランシスカと交流をもつ黒猫。ベスいわくお嬢様の命をつけ狙う欲深な殺し屋。アルマはユニにぜひお店に遊びに来てほしいと言ってくれた。ならば彼女の示した友情に誠意をもって応えな

くては。

「あいつは腹の底が読めないところがある。あんまり信用しちゃいけないよ」

そんな意味深な忠告にユニは首をかしげ、ぴくんと猫耳を震わせる。アルマの正体が分からない。ユニに向けた穏和な態度は嘘なのだろうか。ユニの優れた直感力はアルマの中のざらついたものを訴えていたが、その違和感には何となくというあいまいな根拠しかない。ベスの評価やノーラの否定的な言葉が正しいのかどうかはユニがアルマに会って直接確かめるしかなかった。

ユニ達が立つ正門からはフランシスカの部屋の窓は見えない。ベッドの上から身動きがとれない彼女の見送りは期待できないが、それでも新調してもらった服に着替える前には「楽しんできなさい」と心温まる言葉をかけてもらった。

ダルジャンヌの姿は見えない。それでも彼女特有の暗く湿った視線と気配をひしひしと感じる。屋敷の中からとどく黒いオーラがユニの全身をねっとりと包んでいるようで、ユニは身震いし尻尾を硬直させる。

「イ、イッテキマスっ！」

ユニはベスとノーラに勢いよく頭を下げ、固い足取りで門の外へ歩み出た。

石畳の長い一本道を抜けるとすぐに大通りへ出る。目の前の広々とした空間にユニは解放感と心細さを同時に覚えていた。

１０頁　「幼年期の終わり」

ベスの庭仕事を手伝ったり気晴らしに庭を散策したりしていたから家の外に出るのは初めてではない。しかし、その限定された風景と現在の自由な場所は情報量が圧倒的に違う。
肌をなで髪を揺らせる風。そこに含まれる様々な匂い。大量の足音とそれに等しい数の呼吸音。熱を帯びた空気と湿気。目の前に立ち並ぶくすんだ色の建物の群れ。何もかもがハミルトン家にいたときと違う。ユニの鋭敏な感覚器官は周囲の情報をあますところなく精細に取り込み、それまで閉じていた感覚が次々に開発される。急速に世界が広がっていくめまぐるしさにユニはたじろいでしまう。
空を見上げればいつも通りの曇り空。この街の空はいつでも曇っている。灰色の雲の向こう側に何があるのかをユニは知らない。
道をたくさんの人間が行き交っている。当然、誰一人としてユニは知らない。フランシスカやベスのように猫耳も尻尾もついていない。髪も目の色も黒でなく、金色や茶色が主だ。貴人であるクロフォードの服と違い、彼らの服の形と色は地味で質素な印象だった。
往来の真ん中に突っ立っているユニにたくさんの視線が向けられている。そのことに気づいたユニは目立つのを避け、人の流れに乗って大通りの先を目指して歩く。
向かい側から歩いてくる人間と、ユニの横を並んで歩く人間がユニを見ている。かなりの数だ。彼らの目に嫌悪の色はなく、見慣れない珍しいものに目を見張っているようだ。人の群の中で真っ黒な黒猫はやはり異質であり、相当に人目を引く存在らしい。有名人になったようでユニの頬が緩む。世界の支配者にでもなった気分だった。

「（淑（しと）やかに。お上品に）」

ベスに言われたことを思い出し、ユニは目を閉じ小さな胸を張って

道を行く。そのうちにユニはかぐわしい薫りに包まれて目を開けた。ユニは市場の中にいた。道の左右に色とりどりの食べ物を並べた出店が並んでいる。
食欲をそそる干し肉に新鮮な魚。みずみずしい果物に焼いたばかりのパン。そして鮮やかな花々と苗が生えた植木鉢。ユニは都に上ってきたばかりの田舎者のようにきょろきょろとしながら市場通りを進む。
腹を鳴らしながら果物屋をのぞいていると、そこの女主人がユニを見つめてくる。

「見ない顔の黒猫だねぇ。仮装ってわけでもなさそうだし……」

「わたし、最近生まれた黒猫なんです」

ユニの頭の猫耳と揺れる尻尾を見つめる中年の女主人に、ユニはもじもじと指と指を組み合わせる。

「へえー！　見ない黒猫だと思ったらどおりで。じゃああいさつ代わりに持ってきなよ」

女主人は豪快に笑い、台に並べてあった赤い林檎（りんご）を三つ、ユニに手渡す。

「わたし、お金持ってないんです」

「いいっていいって。これはお供（そな）えみたいなものなんだからさ。気にせず取っておいておくれよ」

「黒猫が、わたしが恐くないんですか？　黒猫は人を死なせるみたいですよ」

「そりゃあ中には黒猫を恐がる人もいるさ。でもたいていの人間は街の黒猫を守り神みたいに思ってるよ」

「守り神、かあ」

思わぬ好評にユニは嬉しくなって尻尾を激しく揺らせる。

「それに黒猫の力を当てにするようになったらお終いだよ。黒猫が街にいるからあたし達は頑張らなきゃって思うのさ」

「はぁ？」

意味が分からず耳を垂れさせるユニに女主人は大笑いする。ユニは林檎の礼を言って屋台を離れた。

市場を進むたびに屋台の人間に「もしかして新しい黒猫かい？」と声をかけられ、頼んでもないのに何かしらの食べ物をもらってしまう。最初にもらった林檎をかじっている最中だったのに、またたく間に荷物が増えていく。市場を抜けるころには、両手が干し肉や野菜や果物でいっぱいになってしまっていた。

黒猫は人々に愛されているらしい。ベスにさんざん拒絶されていただけに黒猫の自分に自信がもてなかったのだが、両手を埋める贈り物を見るとユニは意外な思いだった。

両腕に抱えた食べ物に視界をふさがれながらよたよたと歩いていると、ユニはいつのまにか広場に来ていた。周りを見れば人間達が立ち話をしていたり、タバコを吹かしていたり、井戸で水をくんだりしている。

「はーー……。いい場所だなぁ」

広場は憩(いこ)いの場。人々が絶え間なく行き交う大通りよりも、時間の流れが穏やかでゆっくりなように感じる。
ユニが広場のすみにたたずみ心を和ませていると、視界の端に人間の頭が入った。四人の小さい人間で、それは大人に対し子どもという種類だ。四人の子どもは店の前に並べられた酒樽(さかだる)に半身を隠しながら遠巻きにユニの様子をうかがっていたが、やがてユニに駆け寄ってきた。

「黒猫だー！」

「黒猫がいる！」

「しっぽがついてる！　頭に耳も！」

ユニの生まれもった知識と照らし合わせれば、おそらく彼らは五歳前後。男の子三人と女の子一人に取り囲まれ、いっせいに見上げられ、ユニはどうしていいのか分からずに尻尾を腰に巻き付けてしまう。
生きてきた年数なら生まれたばかりのユニよりも彼らの方が上だろう。外見も精神年齢もユニの方が大人に近いが、ユニは目の前の子どもをどう扱えばいいのかとほうに暮れた。
ユニが接してきた人間達とは違い、子ども達の振る舞いにはつかみ所がない。一言で言えば行動原理が混沌(カオス)。大人と同じ人間とは思えず、小動物か妖精のようだとユニは感じていた。謎のダルジャンヌに近いものを感じる。
男の子の一人が腕の中の食べ物に目を向けているのに気づき、ユニは名案を思いついた。その場にしゃがみ、男の子と目線の高さを合わせる。

「ほら。どれでも好きなのをあげますよ」

とりあえず笑って見せるユニに、男の子はおずおずとオレンジを手に取った。

「ほかのみんなも、どうぞ。早い者勝ちですよ」

ユニの掛け声に、両手をふさいでいた食べ物がみるみる減っていく。ユニとしては重くて困っていた荷物が減って助かるところだ。その場でユニからもらったパンや肉を食べ始めた子ども達に、ユニも石畳の上に座りこんで残りのチーズを食べ始める。子ども達はユニに習い、ユニを囲むようにして座りこんだ。

「ねえねえ、黒猫のお姉ちゃん。黒猫って、ほんとうに人を殺すの？」

「黒猫って、人間を食べる？」

「食べません。それに黒猫は死にたい人しか殺しません。自分からは死なせちゃいけない決まりなんです」

「お姉ちゃん、名前は？」

「ユニです」

「ユニ！　黒猫のユニー！」

何が楽しいのかきゃあきゃあとさわぐ子ども達にぽかんとしつつ、ユニはチーズの欠片を口に放りこんで立ち上がる。

「ユニはどこに住んでるの？　その服、きれいね」

小さな女の子に無垢な目を向けられ、ユニは口ごもる。新生の黒猫であるユニがハミルトン家に独占されていることはできる限り隠さなければならない。すでにノーラがフランシスカに囲まれているから、二人もの黒猫を独占しているとなればクロフォードへの非難がわき起こるのは必至だ。

「ええと……。あ、あっちの方です……」

ユニは適当な方向を指差して女の子の顔色をうかがうが、彼女は「ふーん」とつぶやいたきり手元のパンにかじりつく。ユニの所在を気にしているのかどうでもいいのか、いまいち分からない。うかつに街中をうろついていてもまたたくさんの食べ物をもらったり、見知らぬ人間にからまれかねない。ここはさっさと目的地のアルマ宅を目指すのが得策だろう。

「ちょっとお聞きしたいのですが、アルマという黒猫の家を知りませんか？」

「知ってる！　おれ、見に行ったことがある！　黒猫がいた！」

「アルマの家は恐いところだから行っちゃダメだってお母さんが言ってた」

「恐いところ、ですか」

「恐い場所だー！　行くと死んじゃうー！」

小躍(こおど)りするようにユニの周りではしゃぐ男の子達にため息をついていると、パンをほおばっている女の子が顔を上げてユニを見た。

「アルマの家の場所はね……」

言葉がたどたどしくて決して分かりやすい説明ではなかったが、ここからアルマの家までの道のりを教えてもらう。ユニが気まぐれに与えた食べ物は子ども達の機嫌を取ることに一役買ったようだった。

「しっぽー！」

「！！？」

女の子の知る道順とユニの理解が食い違っていないか確認をしていると、何の前ぶれもなしにユニの尻尾が男の子の一人につかまれた。凄まじい感覚が尻尾から全身をめぐり脳天を突き上げる。身体中をたくさんのブラシでなでさすられるようなくすぐったさともどかしさ。生まれて初めての強烈な感触だった。

「あはははは。にょろにょろしてる。へびみたい」

「や、めてぇ……！　触っちゃ、だめ……っ！」

一瞬で顔が上気し、脚から力が抜ける。ユニの懸命の抗議にも男の子達はおかまいなしだ。二人同時に尻尾をつかみ、なでたり引っぱったりをくり返す。完全におもちゃ扱いだった。

ユニはついに足を支えられなくなり、へなへなと四つんばいになる。頭の中で大きな音が鳴り響いているかように思考が白く塗りつぶされる。そのせいで動くこともまともに声を出すこともできない。

正体不明の圧倒的感覚に押しつぶされ、呼吸が乱れて涙と汗がにじむ。その状態はユニの尻尾で遊ぶ男の子たちが飽きるまで続いたのである。

11頁　「猫をかぶった黒猫」

「ううっ……。とんでもない目に遭った」

女の子に教えてもらった道をたどりながら、ユニは得体の知れない感覚の余韻（よいん）に身体をぶるっと震わせた。

まだ身体の芯が熱く、じんわりと痺れている。あの強烈な体感は一体何だったのか？　ユニは尻尾に手を伸ばそうとして途中で腕を止めた。今はそんないかがわしい探求にふけっている場合ではない。早くアルマの家を目指さなくては。

女の子の説明不足に加えてユニが街に不慣れなこともあり、なかなか目的地を見つけられない。観光者か何かのようにきょろきょろと見回しながら街中を歩いていると、たびたび往来の人達と視線がぶつかり合う。やはり新生の黒猫ということでユニは相当に目立っているようだ。

「あ、恋人同士」

ユニの向かいから歩いてくる若い男女に目を奪われ、ユニは民家の前で立ち止まった。カップルはユニを気にすることもなく、道の向こうの広場へと歩いて行ってしまう。

恋。人間が相手の人間へ抱く特別な気持ち。ユニは恋をしたことはなかったが知識として恋のことを知っていた。

人はなぜ恋をするのか？　ユニが目の前で行き交う男女に目を凝らしても何も胸に変化を覚えない。誰にも恋や愛を感じない。この異様な不感症と心の安定感は一生モノかもしれないと感じる。

もしも恋が化学反応のようなもので、特定の誰かと出逢った時に反応が起こり劇的な変化がおとずれるものだとしたら、ユニは誰とも何とも反応しない。ユニの心はまるで金や白金のように極めて安定

的で、酸素や水や化学物質が溶けた水溶液に浸食されない。
ノーラは黒猫は恋をしないといった。恋をしないということは果たして心の平穏か、それとも華を失った絶望の道か。ユニは気になって民家の軒先にたたずんだまま尻尾をふらふらと揺らす。
持病で苦しむフランシスカを介抱した時に抱いた感情。あれはおそらく恋などではない。もっと正体が分からず、暗く冷たく、何かまがまがしいものだ。
恋について、ユニはユニなりに仮説を立ててみることにした。恋の実感も経験もないので足りない部分は思考の労働と想像で補うしかない。
フランシスカは恋愛など糞食らえと暴言を吐いていた。だがユニには彼女の言葉が正しいとはどうにも思えない。人通りでたまに見かける恋人達は皆幸せそうだし、生きる喜びを噛みしめているように見える。恋愛の結果によっては糞食らえな最後になるのかも知れないが、それでも恋をし合っている時は少なくとも幸福な状態にあるようだ。
フランシスカは寝たきりの生活が長い。そのせいで少々歪んでいるところがある。それも当然だ。ひなたでのびのびとまっすぐに育った花と、日陰でうじうじと育った花では大きさも葉の形も違う。だから彼女の極端な意見を鵜呑みにするわけにはいかない。フランシスカはかなりの異端であり、あくまで少数派なのだ。
道行く恋人達は手を繋いでいたり、腕を組んでいたりする。どうしてそんなにベタベタするのかユニには分からない。この汗が噴き出す暑さで触れ合ったら余計に暑くなるだろうに。
そうまでして触れあい、繋がり合う利点は何なのか？　そこに何かのたしかな理由はあるのか？　ユニはあごに左手を添え尻尾を揺らし、行き交う人達の注目も気にせずに恋人の観察を続ける。
そしてユニは閃(ひらめ)いた。触れ合うこと、誰かと深い関係をもつこと自体が人の心を癒すのではないだろうか？　良い気分を生み出すのではないか？　楽しげに微笑む合う恋人同士を見ているとユニにはそ

うとしか思えない。
フランシスカはベッドの上に縛られたまま目の前を通り過ぎていく人達を見送ることしかできない。だから彼女は誰ともつながり合えず、寂しいはずだ。ならば寂しさの反動から、誰かと繋がる喜びを全否定してもおかしくはない。
こんな寓話をユニは知っている。高い木の枝に下がったブドウを食べようとしてキツネが何度もジャンプをするが、高みにあるブドウには決して届かない。キツネはくやしまぎれに「このブドウはすっぱくてまずいに違いない」と決めつけてその場を去ってしまう。フランシスカはブドウという恋に届かない、ひねくれたキツネではないだろうか……。
恋とは誰かと繋がりをもとうとする気持ち。ユニは以上の考察からそう仮説を打ち立てた。世界の秘密の一つに触れたような気がしてユニの胸がはずむ。ユニは淡い笑みを浮かべつつ、ふたたび人の流れへと歩み出した。
そうしていくらか道をさまよい、ユニはとうとうアルマの家を見つけ出した。「アルマ黒猫事務所」という立て看板が立っていて、そこらの家よりも一回り大きい家だ。外観は目立たないが、家の大きさがアルマの財力を物語っている。
ユニは緊張に胸を高鳴らせながらドアをノックする。ドアが開き、隙間からアルマの笑顔がのぞく。

「まあ、来てくれたんですね、ユニ。今はお客様が見えているので、こちらで少しだけ待っていて下さい」

愛想の良い空気に、ユニはこわばっていた尻尾がやわらかくなる。
ユニと似たような黒服姿のアルマに導かれ、本棚が壁に並ぶ小綺麗な応接室へ通される。
そこには先客の人間がいて、ユニは声に出さずに驚いた。てっきり別室へ案内されると思っていたからだ。ユニは部屋のすみに置いて

あった小さな椅子に座るように言われ、その通りにする。
長机をはさみ、ソファーが二つ設置されている。どんよりと暗い目をした初老の男の向かい側にアルマが座り、彼ににっこりと笑いかける。

「お待たせしました。そちらは同僚（どうりょう）の黒猫ユニです。どうぞお見知りおきを」

「この事務所にはあなた以外にも黒猫が……？」

「ええ。二人の黒猫による、お客様の要求にかなったサービスを自由に提供するというのが我が事務所のモットーなのです。このような黒猫の事務所は街に二つとありません」

ユニは「おやおや？」と思い、尻尾を丸めた。ユニがアルマの同僚？　そんな話は聞いていない。ユニは不思議に思いつつも眼前のなりゆきをおとなしく見守った。
うなだれたままぼそぼそと話す男には見るからに生気がない。彼の身の上話を聞くうちに、どうやら彼は事業に失敗し、わざわざ他の街から黒猫に殺してもらいにやってきた人間らしいことをユニは理解した。
初めて見る黒猫の仕事現場。ユニは肩を張り、アルマの話を食い入るように聴き入った。

「全財産の３０％相当が仕事を請け負う対価となります」

「しかし、家族にもできる限り遺産を残しておきたいのだが……」

「お客様の街の黒猫達の平均的な値段からすれば格安のはずです」

常に柔和な笑顔を絶やさずに男をなだめすかすアルマ。あの世に金は持っていけないとはいえ迷惑をかけた妻や子どもに少しでも財産を残したいという男を巧みに誘導し、代金を少しずつ割引き、時には慰め、時には脅迫的な言葉をささやき、だんだん依頼人をその気にさせていく。
説得話の中に何度もユニという名前が使われ、アルマとユニの二人で安らかな死を贈ってきたと情感をこめて語られる。もちろんそんな話はでたらめだ。しかし嘘だとは分からない男はアルマの話を信じ込み、たびたびユニの方へうつろな目を向けてくる。

「それではまた後日、確認をしましょう」

一通りの話をまとめたアルマはその日の商談を終え、最後まで笑顔のまま男を送り出す。彼女の後ろ姿をユニは口を半開きにしたまま眺めていた。
黒猫としては誰一人として死なせていないユニにはアルマがどれほどの腕か分からない。それでも今の人間はアルマに死なせてもらうことになるだろうと確信していた。もう彼には生きようとする気概がなく、完全に心が折れてしまっている。しかもアルマの話が上手く、彼女の口車に乗せられてしまっている。近いうちに彼はアルマの手で地上を去るだろう。
アルマは表へ出て看板を屋内へしまい、玄関のドアにクローズドと書かれたプレートを下げた。そしてユニの前へ戻ってくると後ろ手でドアの鍵をかける。

「あ、あの……アルマさん……？」

「ああ、気にしないで下さい。今日はもう店じまいです。ユニとじっくりお話をしたいので」

アルマはユニを連れて応接室へ戻り、ソファに座って待っているように指示。ユニが言われた通りにしていると、アルマがトレイにティーカップを二つ載せて戻ってくる。
アルマと向き合って座り、二人で紅茶をすする。ハミルトン家で振る舞われる最高級の茶葉から淹れたお茶にはかなわないが、それでもまずまずの味だ。歩き回ってのどが渇いていたので飲み物はありがたかった。
何かと良くない評判がつきまとうアルマだが、実際に会いに来てみればこうしてお茶をごちそうしてくれている。ユニはほっとしつつアルマの紅茶を飲みほした。

「ユニ。私といっしょにお店をやってみませんか？」

「？」

アルマはやわらかな笑みを口元にたたえたまま、手の中でカップを揺らせている。彼女が何を言い、何を考えているのかユニにはさっぱり分からなかった。

「ユニは小さくて可愛らしいから、きっとお客さんに人気が出ると思います。ユニも働いて自立できますし、この事務所もユニのおかげで今まで以上に繁盛（はんじょう）する。おたがいにとって大きな得になるはずです。いえ、私よりもユニにとってのメリットの方が大きいほどです。なにしろユニは街に生まれたばかりで実績も信用も何も築いていないのに、いきなりこの事務所のバックアップを得られるわけですから」

12頁　「筆舌に尽くしがたい体験」

「でも、いきなりで、わたしどうお答えすればいいのか分かりません……」

下を向いて耳を垂れさせるユニに、アルマは優しく笑いかける。さっきの自殺願望に憑かれた男へ向けた営業用の笑顔とまったく同じ顔だった。

「ユニ。黒猫は人々のために働き、自立するのが基本です。当たり前と言い換えてもいいでしょう。ユニやノーラのように何もせず人間に養ってもらうことなど異例であり、黒猫の尊厳を地におとしめる愚行でしょう。どの黒猫もみんな自分の力で生きているのですよ」

知らなかった。自分とノーラは黒猫の中でも他に類を見ないなまけ者だったのだ。ユニはアルマの言葉に胸が締め付けられるような思いがし、大先輩の黒猫と目が合わせられずに空のカップの底を見つめ続ける。

「しかし、ユニには力がある。私が力添えをすれば十分にやっていける。さっきの商談でユニの名前を使わせてもらったのは、ユニの力が有効であることを証明してみせるためですよ。お客さん、ユニのことをとても気に入っていましたよ。私としてもぜひ事務所にユニが欲しい。なにしろユニには可愛らしさも才能もある。私のところでいっしょに働きましょう。黒猫としてちゃんと自立する、またとないチャンスです」

アルマは服のポケットから折りたたんだ紙を取り出し、それをテーブルの上に広げた。細々とした文字がたくさんつづられている。ど

うも紅茶を淹れに行った時に持ってきていたらしい。紙の上に血のように赤いインクが詰まったペンを添えた。

「さあユニ。悩む必要はありません。この契約書にサインを。そうすればあなたは今日から私の仲間であり、本当の同僚です。あなたの自立と自由はすぐ手の届くところにあるのです」

ユニは契約書を見つめたまま固まっている。そんなユニに、アルマは邪悪な本心を隠したまま陽光のように慈悲深い笑みを注いでいる。まずは相手の欠点と問題を次々と指摘し、不安をあおる。どうしようとおろおろさせる。それまで安定していた自我を揺さぶるのだ。このおどしの内容は本当でも嘘でもかまわない。相手が不安になればそれでいいのだから。

そしてそれまでの手厳しい態度と口調をころっと変え、優しく接する。こうして相手からの信頼を得るのだ。「こんな良い方法がありますよ」といって解決方法を提示し、どうすればいいのか分からずに不安になっていた相手と契約を取り付ける。

これは悪質な宗教勧誘や顧客収集に用いられる詐欺（さぎ）の常套手段（じょうとうしゅだん）だ。いかにも古い手だが、相手の心理を巧みに利用した効果的な方法であるために今日まで根強く残っている。

「アルマ。わたしはハミルトンの家で生まれました。わたしの家はフランシスカの所で、フランシスカがわたしの主人です」

「ふぅん。そうですか」

汗を流しながら何とか喉から本音をしぼり出したユニにも、アルマは不敵な笑みを崩さない。それまで左手に持っていたカップを机の上へ置き、なぜか顔に掛けていた眼鏡を外す。

アルマが裸眼になった。ただそれだけなのに彼女から受ける印象が

がらりと変わる。不穏な気配がアルマの全身から発せられていて、ユニの直感が危険だと警報を鳴らしている。
アルマは机に眼鏡を置くと同時、何の前ぶれなくユニの尻尾をつかみあげた。鋭い衝撃の針が脳に突き刺さり、一瞬で視界が白濁する。アルマはユニの尻尾をつかむのみならず力をこめてねじり上げ、ユニを激痛の中へ封じこめる。
呼吸を止めて身体を丸めるユニの腹をアルマが蹴り上げ、ソファーから床へ倒れさせると、尻尾を握りしめたままユニの顔をぐりぐりと踏みつける。

「ア、アルマ……？　何をするんですか……」

「いいからさっさと書類にサインをしろよ。手間取らせるな、メスガキ」

頭の上からとどく淡々とした声にはいっさいの熱がこもっておらず、氷塊からふわふわと落ちてくる冷気のようだった。いったい何が起こっているのか、アルマが何を言っているのか、尻尾から全身へ伝う痛みのせいで頭がまともに働こうとしない。

「前から欲しかったんだよな、小さくて従順な犬がさ。お前、生まれたばかりだろう？　まだ余計な色に染まってない。しつけがいがありそうだ」

「い、犬……？　わたしは黒猫……猫ですが……」

「頭の出来がなってねえな。犬は奴隷だ。消えて無くなるまで奉仕し、私のために働くのさ」

アルマはユニの顔の前に契約書とペンを落とす。顔を踏みつけてい

たアルマの足がどけられたので、ユニは契約書を見つめる。頭が割れるように痛むので書類が二重三重にブレて映る。契約内容などまともに読めなかった。

「早くサインしろ。名前を書け。そうすりゃすぐに放してやる」

嘘。サインをしたところでこの尻尾の痛みからは解放されてもさらに重い枷(かせ)を背負うことになるだけ。

顔を近づけて凝視すれば、明らかに普通の紙ではない。妖気とでも呼ぶべき異様な力がにじみ出している。おそらくはサインした者の心を呪術的な力で縛る仕掛けが施されている。サインしたら最後、本当にアルマの犬であり奴隷にされてしまう。

「どうしてこんなひどいことをするんです！　わたしも、アルマも、同じ黒猫でしょ！？」

「同じ？　笑わせんな。私はお前みたいなただの黒猫とは違うんだ。前世の記憶を三代も引き継いでる。普通の黒猫の三倍以上は長生きしてるんだよ」

アルマはいら立ちまぎれにユニの背中を踏みつける。みしみしときしむ背骨にユニは目を白黒させた。

たしかにアルマは普通の黒猫とは一線を画している。ユニやノーラとはまるで別物の凶暴性と残忍性。力もユニとは段違いで、背中の重量感は巨大な岩のようだ。アルマに踏まれたまま身動きがとれない。

「黒猫が記憶を引き継ぐ方法。その条件を、お前知ってるか？」

額に脂汗を浮かべながら首を横に振るユニに、アルマは歪んだ冷た

い笑みを浮かべる。

「黒猫が前世の記憶を維持するにはな、人間を殺しまくることだ。たくさん死なせれば私達黒猫は長生きできる。生まれ変わっても前世の記憶と経験と人格を持ち越せる。私が思うに、たくさん人間を殺した黒猫はそれだけ優秀ってことだ。だから記憶の引き継ぎが許される。次の代でも貴重な経験を生かし、もっと多くの人間を殺すためにな」

「記憶を継ぐために人間を殺す……？　そんな自分勝手な理由で大勢の人間を殺すなんて！」

「人間なんて黒猫への供物（くもつ）にすぎない。人間の命が黒猫の糧（かて）になるのさ。お前もそう思うだろ？　んん？」

強制的に同意を求め、暗い目で顔をのぞきこむアルマにユニは押し黙る。黒猫にとっての人間。その意味をユニはまだ真剣に考えたことがなかった。

黒猫は人間にどう接すればいいのだろう。アルマの言うように人間の命を食らって記憶の寿命を延ばせばいいのか。それとも何か別の道が……？　深く考えようとしても尻尾を握られているせいで思考が乱れて白熱し、ある程度以上の考えがまとまらない。

「お前と二人で店をやれば確実に客が増える。二人でやってる黒猫事務所なんて他に無いからな。宣伝効果抜群だ。どんどん殺せるぞ。儲かるし、来世にも確実に記憶を持っていける。お前にもちゃんと殺す分を分けてやる。だから早く署名しろ」

「どうして、なんでそんなに長生きしたいの……？　フランシスカみたいに、もう生きたくない人間だっているのに」

「あのイカれた女といっしょにするな。私は死ぬのが恐い。恐いんだ」

急にアルマの声色が変わった。空いている左腕を自身の胸に回し、極寒の吹雪の中で身震いするようにかき抱く。かすかに指先が震えている。

「死ねば何もかも終わりだ。お前もたくさん人間を死なせれば分かる。死にたくなったら終わりだ。もうその人間は救えない。死ぬことでしか救われない。私は嫌だ。消えたくない。もっともっと美味いものを食べたいし、知らない本も読みたいし、綺麗なものを見たいんだ。消えたくない。死にたくない」

恐ろしい何かに追い立てられているかのようにアルマは顔を強ばらせ、尻尾を握る手と背中を踏みつける足にいっそう力をこめる。ユニはか細い悲鳴で苦痛を訴えるが、妄執（もうしゅう）にとらわれたアルマにはとどかない。

「下らない理想はさっさと捨てろ。私もずっと昔は死ぬべきでない人を助けようと努力もした。でもフランシスカはダメだ。もうあいつは死ぬしかない。あいつは死に取り憑かれているからな。フランシスカは救えない。お前が考えているほどこの世は甘くないってことだ」

アルマだって最初からこんなに酷い黒猫ではなかっただろう。だが彼女は黒猫として転生をくり返し変わってしまった。人間を殺し続けるうちに魂は歪み、初めの理想は腐敗し、生に執着するただの外道に成り果ててしまったのだ。

ユニは首をひねり、アルマを見上げる。どこか悲しい顔をしている

ようにユニには映った。いっさいの熱と情愛を失った死人の顔のよう。ユニをいたぶり、奴隷として屈服させることへの暗い喜びしか顔に浮かんでいない。彼女は自分だけの異質な世界に閉じこもる、孤独な女王だ。

他人とつながりを求める心の正体。それをユニはすでに知っていた。アルマがここまでユニにこだわるのは、きっと――。

「アルマ。わたし、ついに見破(みやぶ)りました。アルマはわたしに恋をしていますね……？」

「あ？」

「人間は一人になりたくないから恋をするのです。寂しいから、恋をして誰かとつながりを持とうとします。アルマがわたしを手に入れようとするのはわたしに恋い焦がれているからですよ！　そんなに寂しいなら恋人になってあげますから、もう放して下さい！」

13頁　「やはり野におけ蓮華草」

アルマはぽかんとした顔でユニを見下ろし、しばらくして何かが壊れたようにゲラゲラと笑い出した。

「最初から笑わせてくれるじゃないか。いいぞユニ、その調子だ。もっと私を笑わせろ。もっと愉(たの)しませろ。お前は犬だけじゃなく、道化としての素質もある。将来有望だな」

ひとしきり笑った後、アルマはユニのほおを入念に踏みにじる。あまりの痛みにユニは涙をにじませた。

「どうしてこの私がお前のようなチビガキに恋しなければならない？　うぬぼれるなよ、世間知らずの馬鹿猫が。ああ、たしかにお前の身体に興味がある。ユニを欲しいと思ってる」

ユニの心臓がはね上がり、瞬時に顔が赤く染まる。このままアルマに自由を奪われ、いいようにもてあそばれてしまうのか。まだ子どもの自分が、同性の黒猫に。あらぬ妄想がユニの脳裏をかけめぐり、尻尾をつかまれる痛みと踏まれる苦しみが別の危険な感覚へと変わっていくようだ。

「欲しいのは私のために働くその身体と、黒猫の能力だけだ。お前の頭の中はまったくもってどうでもいい。お前からどれだけしぼり取れるか。私の興味はただそれだけだ。よーく覚えておけ」

どうやらまたしてもユニの考えはまとはずれだったようだ。いくらか心を尽くしてもらえる慰み者どころか、アルマにとってはユニなど近いうちに食卓に並べられる家畜か、油をしぼれるだけしぼって

捨てられる菜種(なたね)くらいの価値しかないらしい。

「そろそろサインをしろ。暇じゃないんだ。これからお前を使うための準備が山ほどあるんだからな。……ん？」

アルマの猫耳がぴくんと動き、玄関の方へすばやく顔を向ける。ユニもアルマに数瞬遅れて屋外の足音を聴き取った。

「おーい、アルマ。ユニが来てない？　帰りが遅いから様子を見に来たんだけどさ」

鍵がかかったドアを何度もノックし、ドアの向こうから大声を出すノーラ。思わぬ救世主の登場にユニは顔を上げて「助けて！」と叫ぼうとする。

だが声を出す寸前でアルマがユニの頭を思いきり踏みつけ、顔面を床へ押しつける。後頭部に巨漢が立っているような重量感。ユニは口をまったく動かせない。

アルマはまずユニの口を左手でおおい、顔がつぶれるかと思うほどの力をこめて声を封じる。これは無言の脅迫だ。もしも声を出せば殺すというアルマの意思表示。

次にアルマは右腕一本でユニの胸を抱きかかえ、小さな手荷物でも運ぶように軽々とドアの前まで連れていく。

「お待たせしました。すみません。風邪のせいで身体が重くて。うつるといけないので、このままでお話させてください」

ユニの口を封じたまま、アルマは穏やかな声でドアの向こうのノーラへ声をかける。風邪というのも、捕まえているユニの姿を見せないため嘘だ。

「風邪？　だいじょうぶ？　具合が悪いの？」

「ええ、少し。せっかく来てもらったユニには悪いのですが、早めに帰ってもらいました」

帰ったなんて大嘘。わたしはここでアルマの奴隷にされそうになっている。ユニは懸命にもがくが、力の差がありすぎる。万力にでもはさまれたようにびくともしない。

ノーラの少しの沈黙が永遠のように長く感じられる。動くな、邪魔をするなとアルマに至近距離でにらまれ、ユニは強い恐怖心に縛られて何もできなくなる。闇夜のように真っ黒なアルマの瞳。黒猫の目がこれほど恐いとはユニは今まで知らなかった。

「……じゃあもうユニは出て行ったんだ。出かける前に教会へ礼拝に行きたいとか何とか言ってたけど、ユニはそんなこと言ってなかった？」

「ああ、言っていましたよ。ユニは教会へ向かいました。ユニに教会への道順を聞かれたのでちゃんと教えましたよ」

「分かった。教会の方へ行ってみる。風邪、早く治しなよ」

「ありがとうございます。それではまた」

ノーラの足音が遠ざかる。アルマにだまされ、ユニの最後の希望が行ってしまう。ユニは身体から力が抜けて抵抗する気力さえ失ってしまう。

ユニは応接室まで引きずられ、乱暴に床に投げ出された。ユニの顔のすぐ前にはまがまがしい力を放つ契約書と赤いインクのペンが置かれたままだ。

「ぐずぐずしてられねぇな。また邪魔が入りかねない。おい、さっさとペンを持て」

ユニが無言で首を横に振ると、アルマはユニの背中に馬乗りになった。そしてペンを拾い、ユニの右手を力づくでこじ開けてペンを持たせた。ペンを持ったユニの右手をつかんで握りしめ、強制的にペンをにぎらせる。

そのままペンの先を契約書の署名欄へと近づけていく。ユニの意思に関係なくユニの手で名前をつづらせるつもりだ。

ユニにはもうどうすることもできない。背中のアルマをはねのけるほどの力はないし、右手は彼女の剛力で完全に操られてしまっている。

「驚いた。お前の正体がそんなにヤバかったとはね」

「っ！？」

階段から届く声にアルマが反射的に顔を上げる。ユニもつられて声の方を見れば、そこには手すりに寄りかかるノーラが立っていた。あっけにとられるアルマを見てノーラはにやりと笑い、階段からひらりと一階へ舞い降りる。

「……なぜだ？　どうしてまだユニがいると分かった？」

「ひっかけだよ。ユニは教会へ行くなんて言っていない。なのにお前はあたしの話に乗って嘘をついた。明らかに怪しい。前からお前はどこかおかしいと感じていたんだ。立ち去ったふりをして、こっそり屋根を伝って二階の窓からお邪魔したのさ」

人間離れした黒猫の身体能力なら民家の屋根へ登り二階の窓からアルマの事務所へ侵入することも朝飯前だ。慎重に気配を殺して動けば黒猫の優れた感覚器官をだますこともできる。

「ノーラさんっ！　助けて下さい！　わたし、わたしっ、アルマの奴隷にされそうなんですよ！」

「はいはい。さあ、アルマ。うちのユニを返してもらおうか」

「……条件がある。今日ここで見たことをすべて忘れること。誰にも何も話さないこと。この条件が守れれば、こいつは無傷で返してやる」

「わかったわかった。黒猫は生まれた街を離れられない。お前の本性をバラしたら街の誰からも信用されなくなって商売がパーだもんな。こっちもヤバい事にわざわざ首を突っこもうなんて思ってないよ」

いつでも絞め殺せるように人質のユニの首に手を添えたままのアルマとノーラの無言のにらみ合いが続く。ノーラが条件を守る保証はない。だがアルマは秘密をしゃべらないという約束を信用するしかない弱い立場だった。アルマは最後にいまいましげに舌打ちし、ユニの背中からどいた。

「ノーラさぁんっ！」

ようやく解放されたユニが泣きじゃくりながらノーラの胸に飛びこむ。そんなユニを抱きとめたノーラは妹分の頭を軽くぽんぽんと叩き、安堵のため息をつく。

「さっさと帰れ。仕事の邪魔だ」

ノーラはテーブルに置いたままになっていた眼鏡をつかみ、玄関のドアの鍵を外す。
がくがくとひざを笑わせているユニの手を引き、ノーラが部屋を横切って玄関をくぐろうとする。

「ユニ」

眼鏡をかけたアルマに声を掛けられてユニがびくんと震える。恐る恐る顔を向けると、彼女はにこにこと穏やかに笑っていた。

「今日は残念な結果となりましたが、気が向いたらいつでも働きに来て下さいね。もちろん遊びに来てくれるだけでも嬉しいです。歓迎しますよ」

邪気をうかがわせないほがらかなアルマの笑み。そんな彼女にユニは開いた口がふさがらない。
眼鏡をかけるか外すかで人格が豹変する。おそらくそれがアルマの特徴。今のアルマは知的で大人しい黒猫のお嬢さんに化けている。もしくはそういう風に自分を強制的に変えている。眼鏡が化けるきっかけなのだ。アルマの凶悪な本性は世間で受け入れられる類のものではない。だから常識の基準に合わせて人格を大人しいものへ切り替えているらしい。
優しい笑顔で手を振るアルマに見送られ、ユニとノーラは恐怖の黒猫事務所をあとにした。

「ま、これで勉強になっただろ。他人をほいほい信じちゃだめだってことだ」

「……」

まだ恐怖と苦痛が身体の中から抜けない。勝手に涙がにじみ出してしまう。ユニはノーラと手を繋ぎながらとぼとぼとハミルトン家を目指して歩いてた。

ベスも言っていた。人には必ず裏表がある。無垢な信頼は愚かしいと。ベスはアルマの裏の顔をちゃんと見抜いていたわけだ。まさかあれほどの危険人物とは思っていないだろうが……。

「ノーラさん。人を信じることは馬鹿らしいことですか？　人を信じちゃいけませんか？」

「……どうだろ。よく分からん。世間には人をだまして食ってやろうって奴が大勢いる。そういう奴らの餌食（えじき）にならないように信じることと信じないことを使い分けるのが大切……だと思う。何もかも全部信じること。あらゆるものをいっさい信じないこと。そのどちらかを選ぶと間違いなく不幸になる。完全主義はとんでもなく大変だからな」

「ノーラさん。わたし、黒猫が恐くなりました。アルマって、どうしてあんな性格なんですか？」

「黒猫の間じゃアルマが前世の記憶持ちってのは有名な話だけど、正直あたしもびっくりしたよ。欲にかられると黒猫もああなっちまうのかねぇ」

「ま、ユニが無事で良かったよ」と笑って頭をなでるノーラに、ユニは再び泣きついてしまう。二人組の黒猫。手を繋いで歩き、しかもその片方は新生の黒猫。ユニとノーラはすれちがう人達の視線をいっせいに集めていたが、そんなことは二人ともおかまいなしだ。

黒猫アルマ。人の命を吸い続け三代にわたり記憶を積み重ねる存在。彼女は人の命を安らかに葬る黒猫というよりも、まるで悪魔か死神のよう。アルマは黒猫の暗部の象徴としてユニの胸に深く、強烈に刻みこまれたのである。

１４頁　「七度尋ねて人を疑え」

ユニがハミルトンの家に新生してから早二ヶ月。初めはつたなかったメイド仕事もそれなりにこなせるようになっていた。ベスからの文句も少しずつ減ってきているのがその証拠だ。
あいかわず今日もメメントモリの街の空は灰色の雲で覆われている。ユニは廊下の端にたまったわたぼこりをほうきで掃いていると、視界の端をなにかがちらりと横切った。

「……？」

手を止めて廊下の向こうに目を凝らしても……おかしなものは何も見当たらない。大きい窓と、壁に掛けられた風景画と赤い絨毯がいつもの通りにそこにあるだけだ。

「またダルジャンヌ、かな？」

ユニが考えうる限り、ダルジャンヌという可能性が一番濃厚だった。彼女がユニに何を期待しているのか知れないが、気がつけば背後にいるというのが日常だったからだ。
だいぶ慣れたとはいえいまだに気味が悪い。ダルジャンヌの正体がまったく分からないというのもユニの恐怖心に拍車（はくしゃ）をかけていた。
感覚を研ぎ澄まして周囲の気配をさぐるが、ダルジャンヌのそれはうかがえない。彼女を意識するあまり、少し神経過敏になっているのかもしれない。ユニは気を取り直し、気分転換に汗とほこりで汚れたメイド服を着替えることにした。
廊下を進み、階段を上がり、ユニの個室の前にたどり着く。エプロンのポケットから真鍮製の鍵を取り出し、施錠を外す。
自分の部屋に踏み入ってドアを閉めると独特の安心感が胸に満ちる。

ここはユニの城だ。城に住む女王であるユニの勝手な振る舞いに文句をつける者は誰もいない。ユニはベッドに腰かけ、「んふーっ」と心地よいため息をつく。
ここはもともと来客用の宿泊部屋だったがフランシスカの好意でユニに与えられた。小さなユニではもてあますほどの広い部屋に美しい内装。窓はもちろんのこと、暖炉や豪華なソファー、燭台まで完備されている。ユニにはベッド一つあれば十分なのでそれらのオプションを使うことはなかったが、部屋の中にあるだけで贅沢な気持ちになれるから気に入っていた。
しばしベッドに座って立ち仕事の疲れを癒したユニは着ているものを脱いでベッドの上へ並べる。エプロンドレスに黒いワンピース、薄い桃色のシャツ。これらは後でユニ自身が手洗いするのだ。自分で洗って庭に干し、ちゃんと管理していると服にも愛着が湧いてくる。
パンツ一枚になったユニはクローゼットの前まで歩き、中に吊してある予備のメイド服を取りだそうとした。

「……あれれ！？」

そこにあるはずのメイド服が、ない。フランシスカのお下がりのワンピースや外出用に仕立ててもらったフリル付きの黒服はちゃんとある。それなのにメイド服だけがこつぜんと消えている。動揺でユニの猫耳がぴくぴくと震え、尻尾が宙でせわしなくうねる。

「まさか、盗まれた……！？」

ユニは息を止め、不審者の気配をさぐる。すぐ近くに泥棒が潜んでいるかもしれない。だがおかしな雰囲気はなにも感じ取れない。黒猫ユニの五感は野生の動物並に鋭いので部屋の中にユニ以外誰もいないのは確かだ。

窓は必要なとき以外には開けず、常に鍵がかかっている状態だ。今ももちろん鍵がかかっている。部屋の出入り口のドアもユニが出ている時は鍵をかけている。さっきもちゃんと鍵がかかっていた。つまりユニの部屋は密室。密室の中からユニのメイド服が消えた。明らかにおかしい。常識の領域を超える事件の発生だった。
ユニも人間を死なせる人外の黒猫であるというのに服を盗んだ得体の知れない相手が恐かった。ユニはいてもたってもいられず、汗をたっぷり吸った服を着直す気持ち悪さも意に介さずに脱いだメイド服をふたたびまとい、部屋を飛び出した。
広い屋敷の中を駆け回り、二階テラスでぼんやりとタバコを吹かしていたノーラを見つけて事情を一方的に話す。混乱していたせいで舌がもつれ、頭が論理的に働かず、説明の順序も滅茶苦茶だった。

「そりゃ、どっかの変態野郎がユニの服を盗(と)ったのかもなあ」

「そんな！　わたし、黒猫ですよ！？　人間じゃないんですよっ！？」

「黒猫だからこそだよ。ほら、黒猫って人間に人気があるだろ？あれは人間を天に送る特別な者、って理由だけじゃない。どうも人間からするとあたし達の頭の耳と尻尾が可愛く映るらしいんだよ。黒猫マニアって人種がいて、黒猫の持ち物を熱心に集めているらしい」

「黒猫マニアっ！？」

ぞわぞわとしたおぞましい感覚が足元から背中を這い上がり、尻尾の毛がいっせいに逆立った。盗まれたユニのメイド服は今どこでどんな状態にあるのか、想像するだに恐ろしい。金庫かガラスのケースにでも大事に保管されているのならまだいい。だが競売(きょうばい)にかけら

れたり、何かの変態的な目的に使われていたとなると……。
ユニの身体を包む悪寒は自分の感情によるものだけではない。不穏な黒い気配に振り向いてみれば、そこにはダルジャンヌの姿があった。いつものように柱に半身を隠し、じっとユニを見つめている。
ユニとダルジャンヌの視線が正面衝突する。ダルジャンヌの視線が透明な蜘蛛の糸のようにユニの身体を縛り、まったく身動きがとれない。冷や汗がこめかみを伝い、指先が冷え、口の中がからからに渇く。
そばにノーラがいたせいか、ダルジャンヌは早々に消えた。ユニを包んでいた暗く湿ったオーラが立ち消え、ようやくユニは自由になる。

「怪しい……。怪しすぎる……！」

「あいつが怪しいのは今に始まったことじゃないけどな」

「一番怪しいのは、ダルジャンヌ……」

ユニはあごに手を添えたままテラスを離れ、しばらく廊下のかたすみで悩んだ末にフランシスカの部屋へと向かった。

「……というわけで、仕事着が無くなってしまったんです。ごめんなさい、フランシスカ」

「そう。残念ね。ユニのメイド姿はとても可愛かったから気に入っていたのだけれど」

フランシスカはベッドに座ったまま深々とため息をつく。そんな彼女にユニはうなだれたまま申し訳なさをアピールすることしかできない。

実際、フランシスカの期待を裏切ってしまってユニの胸は罪悪感でいっぱいだった。メイド服はユニの背丈に合わせて仕立ててもらったオートクチュールで、作業着ながらも質の高い布が使われた逸品。しかもフランシスカじきじきに贈ってもらったものだ。その価値はユニには想像もつかない。
フランシスカが盗んだという可能性は無い。彼女は病気でベッドから動けないし、そもそもフランシスカを疑ってはならない。ユニがこうしてハミルトン家で不自由なく暮らしていけるのは彼女の好意によるものだからだ。そんなフランシスカを容疑者に挙げるなどもってのほかだった。

「フランシスカ。正直に話すと、ダルジャンヌが怪しいと思っているんです。あの人、いつもわたしをつけ回しているし、何考えてるのか分かりませんし」

「たしかにあの子ならやりかねないわね。何を考えているのか分からないし」

「フランシスカ。ダルジャンヌって……”何”なんですか？」

頭の光輪。背中に生えた小さな羽。赤紫色の瞳。異様に低い体温。身にまとう暗黒の空気。どれをとっても普通の人間とはかけ離れている。彼女は人間でも黒猫でもない何か別の生き物だ。そもそもあの体温では肉体的に生きているのかどうかも疑わしい。
ユニの質問にフランシスカは「さあ？」と応えて肩をすくめる。

「あの子のことは私もよく分からないわ。ダルはろくに口を開こうとしないしね」

「じゃあどうしてダルジャンヌを家に住まわせているんです？」

「変わっているからよ。ほら、赤い薔薇の群れの中になぜか一輪だけ青い色の薔薇が混じっていたら欲しくなる。貴重で珍しいものを自分だけのものにしたくなる。それと似たようなもの。私、奇形が好きなの」

結局何もダルジャンヌについてつかめなかったユニはすごすごとフランシスカの部屋を後にする。
次は誰に聞き込みをしようか。そんなことを考えながら廊下を歩いていると、ユニはある見知った顔とはちあわせになった。

「ああ、ユニですか。これはどうも」

「アルマ……！！」

記憶に灼きつけられた地獄の痛みと恐怖。それはまるで焼き印のようにユニの中へ深々と刻まれ、いまだに幻覚の苦痛と熱さが身体から離れずにいた。
ユニはにこやかに笑うアルマからよろよろとあとずさり、背中を壁にべったりとつけた。何も無い広々とした場所に放り出されてしまったごきぶりのように壁をつたって逃げるユニ。そんなユニに、アルマは捕食者の大蜘蛛さながらに追いすがって廊下のすみへ囲い込む。

「そんなに恐がらないで下さいよ、ユニ。私とあなたの仲じゃありませんか」

ユニに顔を寄せて微笑むアルマは偽りの姿。顔にかかった眼鏡を外せば悪鬼羅刹の本性がさらけ出す。
アルマの真の姿を知るだけに、ある仮説がユニの頭に一瞬で構築さ

れた。ユニはそれまで横にそらしていた目をアルマの正面へ向け、ごくりとつばを飲む。そうして気持ちを落ち着け、おずおずと口を開いた。

「わたしのメイド服が部屋から消えました。まさか、アルマのしわざですか？」

「は？」

「まずわたしの服を盗み、服を返して欲しければアルマの事務所で働くように脅迫するつもりでしょう。服が無くなった時にちょうどアルマが屋敷にいるなんてできすぎています！」

「……ユニ。詳しい事情は知りませんが、そう簡単に人を疑ってはいけませんよ。誰かを疑うというのは多大なリスクを伴います。もしも推理が間違っていた場合、疑われた者は大変心を害します。それまでの信頼関係が崩壊する事も珍しくない。これは親切心からの忠告ですが、声を出して疑うのなら確度が８０％以上になってからにしたほうがいいですよ」

15頁　「幽霊の正体見たり枯れ尾花」

ユニの両肩を痛いほどにつかみ、笑顔を突きつけながら話すアルマにユニは息を呑むことしかできない。アルマの忠告は善意にかこつけた警告だ。その証拠にアルマの尻尾がびくびくと震えている。爆発寸前の怒りを眼鏡の圧力でどうにか抑えている状態だ。彼女が眼鏡を外して本性をむき出しにしないのはここが営業先のハミルトン家だからだろう。

「あ、影猫（かげねこ）」

「？」

アルマの視線の先を追いかけるが、そこにはもう何もいない。見慣れた長い廊下と赤い絨毯が続いているだけだ。

「嫌な季節になりましたねえ。影猫を見るとどうにも気が滅入（めい）る」

アルマはユニを放し、軽く服をはたいて衣服の乱れを整える。

「ではユニ。今日はこのへんで失礼しますよ。ぜひまた事務所に遊びにきて下さいね」

最後に作り物の笑顔をユニに向けて、アルマはフランシスカの部屋の方へ歩いて行った。「いいかげん、そろそろフランシスカには死んでほしいところですね」と愚痴（ぐち）をつぶやきながら。

とりあえずメイド服を盗んだ犯人はアルマではないらしい。よくよく考えてみればユニの服を盗んで脅迫するというのも無理がある。もしもメイド服を盾に脅迫されたとしてもユニは応じない。またフ

ランシスカに新しい服をもらえばいいだけだからだ。ただの服に人質としての価値などないことはアルマの方も承知しているはず。そもそも黒猫は幽霊でも気体でもないのだから密室に侵入できない。ユニは己の考えの浅さに頭をかきながら、次の聞き込み先へ向かった。ユニの足取りは重い。怒られるのが目に見えているからだ。ユニは庭の花壇に水をやっていたベスを見つけ、服が消えたことを恐る恐る相談する。ユニの思っていた通り、返ってきたものは冷徹な叱責(しっせき)だった。

「お嬢様からの贈り物を無くすとは、いったいどこまで愚鈍(ぐどん)で恥知らずなのですか、あなたは」

「ううっ……」

少ない言葉数で効果的にユニの心を切り刻み、深くえぐるかのようなベス。まるで熟達した武術家のような打ち込みだ。殴る先が肉体か、心かの違いしかない。

ユニの耳がこの上なく垂れ下がり、尻尾が力なくぶら下がる頃になって、ようやくベスの説教は幕を下ろした。ユニは全身がだるくなり、ひどく消耗してしまった。精神的なダメージは肉体へも大きく影響するのだ。

容疑者としてはベスもかなり有力だった。なにしろ彼女はメイド長だ。ユニの部屋の合い鍵を持っているのだから、密室へもたやすく入り込める。黒猫の持ち物は黒猫マニアに高く売れるらしい。ならばユニのメイド服を盗み、街のマニアへ売れば多額の金が転がり込むはずだ。

だがユニはその考えを口に出すことができない。なにしろベスが恐かったし、彼女が犯人と確信するには動機が不十分だと思ったからだ。アルマいわく、疑わしさが８０％を超えない限り声を出して疑ってはいけない。

ベスはハミルトン家に使える忠実なメイド。家の体裁を重視し、いつ死ぬとも知れないフランシスカを心から気づかっている。まだたった二ヶ月の付き合いだが、ベスの性格の特徴はユニもつかんでいた。メイドの鏡であり鉄人であるベスがクロフォードとフランシスカの信頼を裏切り、ただの金欲しさに不義(ふぎ)を働くとはどうしても考えにくい。ベスはシロだろう。

「ベスさん。わたしはダルジャンヌが怪しいと思っているんです。ダルジャンヌのことを教えて下さい」

「ダルジャンヌ、ですか」

ダルジャンヌ。疑わしさは９０％以上。彼女ならこうして口に出して疑っても仕方がない。それほどにダルジャンヌは不審すぎる。

「ダルジャンヌのことはほとんど何も知りません。彼女の行動は少々常軌を逸しています。だから悪い噂が立たないように外の者にダルジャンヌの存在を明かすことは禁じられています。ダルジャンヌ自身は屋敷にこもったまま一歩も外へ出ないので問題はありませんが、くれぐれも彼女については極秘にしておくように」

「ダルジャンヌって、黒猫みたいに人間以外の種族なんですか？」

「知りません。私の知る限り、この街の人間以外の存在は黒猫だけです」

またしてもダルジャンヌについて手がかりらしい手がかりは得られない。ユニはベスに一礼し、次なる聞き込み先へ向かう。

書斎を訪ね、仕事の手を休めていたクロフォードにメイド服消失事件を話す。

クロフォードは男性だ。あまり考えたくないが、劣情から少女のユニの服を手に入れたいと考えることもあるかもしれない。表面上は落ち着いた紳士だが、彼は娘のフランシスカのことになると豹変する。人は見かけによらず、裏の顔をもっているものだ。

「残念だが、人を使ってなくしものを探すことはできないねえ。ユニを家に住まわせていることが街に知られては困るからね」

まだ街でハミルトン家が新生の黒猫ユニを独占しているという噂は出てはいないらしい。クロフォードの情報隠蔽は上手くいっているようだ。

ということは外部犯という可能性はほぼ消えた。存在をほとんど隠されているユニの部屋に忍びこみ服を盗むなど、街の人間には不可能に近い。外部犯でない以上、ユニの服を盗んだのは内部犯ということになる。犯人はハミルトン家に住む誰かだ。

「服が無くなったのならまたフランシスカに買ってもらうといい。今度はもっと良い服を用意しよう。……ん？　フランシスカ……？」

それまで机に両ひじをのせてくつろいでいたクロフォードは急に椅子を立ち上がり、そわそわと部屋の中を歩き回る。

「いや、まさかそんな……。ははは……あの可愛い子がそんなことをするはずない。わが子を信じろ……疑わずに信じるのだ、私よ」

「フランシスカが盗んだと思ってるんですか？　それは違いますよ。フランシスカはベッドから一歩も動けないんですから」

何かの可能性に思い至ったらしいクロフォードはぶつぶつと独り言を言いながら書斎の中をぐるぐると歩きづける。ユニの言葉も、も

はや意識を別の宇宙へ飛ばしてしまっている彼にはとどかない。
ユニは第一容疑者のダルジャンヌについて聞こうと思っていたのだが、ベスもまったく知らなかったのだからクロフォードも似たようなものだろう。ユニはため息をついてクロフォードの書斎をあとにした。
あと残るのはダルジャンヌだけ。こうなったら最も怪しい本人に直接問いつめるしか……。ユニがそう思いながら廊下のT字路に差しかかると、彼女の目の前を何かが横切った。
それは厚みがまったくない薄っぺらな影。地べたを這う影が起き上がったようだった。色は暗く、向こう側の景色がうすく透けて見えている。ほんのり青みを帯びていて、大きさはユニの腰丈ほど。人型だが頭に二つの耳と、腰に長い尻尾がついている。
影はユニの前を横切り、止まることなく廊下の先へと走って消えた。ユニは呼吸を停止させたまま目を何度もこすり、曲がり角に半身を隠したままそろそろと影が走っていった先をのぞく。だが影はもういない。
真昼の亡霊をついに目撃。こんな時はとりあえず同族で先輩の黒猫ノーラだ。ユニは半狂乱になりながら屋敷中を駆け回り、厨房で氷砂糖を食べていたノーラにタックルした。そしてたった今見たモノの特徴を話す。あふれる感情のせいでまったく話が論理的でない。思考の速度に口がついていかないのがもどかしかった。

「ああー、それは影猫だよ、影猫」

「カゲネコ……？」

「今ぐらいの時期になると街に出てくるんだよ、影猫が。黒猫にも人間にも見える影だ。本当かどうか知らないけど、この世に生まれる前の黒猫の姿だって言われてるよ」

影猫。それはさっきアルマがつぶやいた名前。アルマはユニと同じように屋敷の中に出現した影猫を見たのだ。死を恐れ生にしがみつくアルマからすれば影猫は縁起の良いモノではないだろう。影猫は黒猫の死の象徴だからだ。

「影猫にとくに害はない。どこからともなく街にやってきて無邪気に遊ぶだけさ。そうやって次に生まれる街を見定めているのかもね」

「次に生まれる場所……」

「影猫は人の持ち物を欲しがる習性がある。特に黒猫の所有物を好む。人間達は影猫に持ち物をあげると幸運が訪れると思ってる。ユニも影猫にねだられたら何かあげるといいよ」

影猫。ハミルトン家の住人でも街の人間でもない、予測外の容疑者。ユニがあごに手を添えて頭をひねっていると、視界の端を一人の影猫が走り抜けた。ユニはあわててノーラに礼を言い、廊下の先へ駆けていく影猫のあとを追う。

奇妙な動きをしている。スキップでもするように一歩の歩幅が異様に広い。人間も黒猫も平等に受けている重力をまぬがれているのか、一歩踏み出すごとに遠くまでふわりと跳んでいく。明らかにこの世のモノではない。

かつてはユニもあんな風にふわふわと街の中を跳んでいたのだろうか。すばやい影猫にも野生動物級の脚力で難なくついていくユニは不思議な気持ちで胸がいっぱいだった。生まれる前の記憶は無い。どこかの街で黒猫をやっていたのだろうが、あまり人を殺さなかったのか前世の記憶は引き継げなかった。前世の黒猫として働き、力尽きて消滅し、ユニとして生まれ変わる前に亡霊のような影猫として遊んでいたのだろうか？

追跡していた影猫が閉じていたドアをすり抜けた。本当に幽霊のよ

うだ。影猫を追うのに夢中になっていたユニはそこがどこかも確認せずにドアを開けて中へ入る。

16頁　「強制エンジェルズシェア」

部屋の中央にたたずんでいたダルジャンヌがのろのろと振り返り、押し入ってきたユニを見る。彼女の身体には大量の影猫が群がっていて、黒いどろを全身にまとっているようだった。青い輪郭の尻尾がうねうねと何本も触手のようにうごめいている。

「ぅぎゃあああああぁぁぁ！！」

それはまったく不意打ちの生理的恐怖。今日は何を着ようかしらとクローゼットの服を手に取っていたら、服の裏に小さなカマドウマがびっしりとくっついていたかのような身の毛がよだつおぞましさ。ユニの絶叫にもダルジャンヌと影猫達はまるで動じない。かと思いきや、単にダルジャンヌの反応が鈍いだけだったらしい。影猫の闇をまといながら部屋のすみまで歩き、ひざを抱えて座ったままぶるぶると震えている。ユニが恐いのか、どこか別の精神世界へ意識を旅立たせているのかはユニには区別がつかない。

ここはダルジャンヌの部屋だ。この禁断の部屋の掃除はベテランメイドのベスに一任されているため、ユニが入るのは初めてだった。カーテンが閉め切られ昼間なのに薄暗い。ゴミが床中に散乱していて足の踏み場もない。物盗りにさんざん物色された後か、さもなくば戦火に蹂躙（じゅうりん）された廃墟のような汚い部屋だ。無尽蔵に暗黒オーラを発するダルジャンヌが四六時中こもっているせいで部屋に異常な瘴気（しょうき）が充満している。そのせいでユニは息が詰まりそうだった。灰色に荒廃したダルジャンヌの城の中で、窓辺に置かれた小さな植木鉢……食虫植物のハエトリソウの緑色が唯一の色彩だった。

「……ッッッ」

思いがけず人外魔境へ踏みこんでしまったユニは金縛りにあったように動けずにいたが、次に目の前で起こったことに呼吸を止めて見入ってしまう。
ダルジャンヌにまとわりついていた影猫達が離れ、彼女を取り囲む。それまでひざに顔をうずめていたダルジャンヌも、ゆっくりと頭を上げた。
影猫達が舞う。ダルジャンヌの頭上を跳び、目の前をとことこと歩き、身体に手で触れ、背中におぶさる。じゃれついているのだ。
ダルジャンヌはくまが浮かんだ赤紫の目でぼんやりと宙空を見たまま、影猫達をさせるがままにしている。薄暗い部屋の中でダルジャンヌの周りだけがうっすらと青く光っている。彼女の黒いゴシックドレスと頭の黄色い光輪と影猫達の闇と青い光。不気味で、それでいて美しい。
一人の影猫がダルジャンヌを離れ、ユニに向かって歩みよる。とまどうユニの右手をつかみ、ダルジャンヌの方へくいくいと引っぱる。熱くも寒くもない小さな手。厚みがなく、紙のようだ。ユニは影猫に手を引かれるまま、ダルジャンヌの前までやってきた。どうも座るようにせがんでいるらしく、ユニは仕方なくダルジャンヌの前へ正座する。
ダルジャンヌと至近距離で見つめあう。紫水晶（アメジスト）のような瞳だ。ハの字型に下がった眉毛は不信と不安の証。やはり彼女は誰一人として信用していないらしい。恐らく、この世界自体を信じていない。自分自身さえも。

「……ん？」

ダルジャンヌに群がっていた影猫がユニの頭に手を伸ばし、リボンのついたカチューシャを弱々しく引っぱっている。

「……そうか。これが欲しいんだね、君は」

影猫は他人の持ち物……特に黒猫の所有物を欲しがる。ノーラの言葉を思いだし、ユニは微笑みながらカチューシャを取り外した。

「プレゼントです。もしも黒猫になって生まれるのなら、あなたの生きる道に天の祝福がありますように」

ユニが両手で差しだした髪留めを影猫が両腕で抱える。のっぺりとした平面の影なのにユニには喜んでいるように映った。

ようやく謎が解けた。ユニのメイド服はハミルトン家の誰かに盗まれたのではなく、影猫達にもっていかれたのだ。影猫は壁をすり抜ける。閉ざされた密室へも自由自在に入り込める。服をとられたからといって恨んだり悔やんでも仕方がない。雨が降ったからと天空の雲に悪態をつくのと同じようなものだ。

「疑ってごめんなさい。ダルジャンヌ」

ユニはダルジャンヌの手をとった。白骨のように白く、か細く、優美な指。和解を求めて笑顔を向けるユニにもダルジャンヌはそれまで通りの暗い目を向けるだけだ。

ダルジャンヌの背に生える小さな羽が一度だけはばたいた。すると新たな影猫がユニのエプロンドレスをねだる。仕方なくユニが大事なエプロンを手渡すと、またダルジャンヌの羽が一はばたき。今度は別の影猫がユニの右脚のニーソックスを引っぱってくる。それを献上すると次はユニの右足のくつが狙われる。

そんな調子でユニはあっという間に裸にむかれてしまった。最後の砦（とりで）のパンティーさえも持って行かれ、身体には何一つまとっていない。人間よりも動物に近いらしい黒猫は人前で裸になってもあまり羞恥心を感じない。それでもこのままダルジャンヌと影猫の巣にとどまっていると髪の毛や尻尾の毛までむしられそうなので、ユニは

そそくさと部屋から出て行った。
何もかも失った。無償の愛は子どものユニにはまだ早い。達成感と解放感と空しさが胸に入り混じっている。

「ああ……」

廊下の真ん中に全裸でへたりこみ、感情の終着点の絶望感に両手で顔を覆っていると、ノーラの掛け声でユニは正気を取り戻した。

「どうした？　なんだか前にも見たような光景だけど」

「実は……」

ユニが生まれた時と同じように裸でノーラと話す。影猫に服をすべてもっていかれてしまったこと。そしてメイド服が消失した事件の真相。

「というわけで、わたしの服は影猫達がもっていったというわけですよ」

「うん？　んんーー……」

「服を着てきます……。裸だとベスさんに怒られますし」

ため息をついて足早に廊下を進んでいくユニには「変だなあ。影猫は勝手に持ち物を盗ったりしないはずなんだけど……」というノーラのつぶやきは届かなかった。

その日の夜、フランシスカの部屋をダルジャンヌが訪れた。思って

もみなかった来訪にフランシスカは目を丸くする。

「どうしたの？　ダル。何か用事かしら」

「……」

ダルジャンヌが羽を軽くはばたかせると、背後からわらわらと影猫達がわいて出た。それぞれフリルがあしらわれたエプロンドレスやら黒地のワンピースやらピンク色のパンティーを抱えている。影猫達はフランシスカのベッドの上にメイド服一式を置いていくと、ダルジャンヌの影に吸い込まれるようにして消えた。

「まあ！　また影猫を使ってユニの服をとってきてくれたのね！？　さすがだわ、ダル」

無言で見つめるダルジャンヌにフランシスカは窓辺に置いてある植木鉢を指差す。ダルジャンヌはふらふらと窓辺へと歩み寄り、ある植物が植えられた植木鉢を両手で抱える。

「次回の分のお礼だけれど、今回の分に回すことにするわ。またお願いね、ダル」

ダルジャンヌは食虫植物のモウセンゴケの鉢を大事そうに持ったままフランシスカの部屋から出て行った。

「うふふふふ。またユニの服が手に入ってしまったわ」

フランシスカが上機嫌で掛け布団をはだけると、そこにはユニの部屋から消えたメイド服が置いてあった。新たに入手したメイド服はユニがダルジャンヌの部屋でむしり取られたものだ。

ユニの推理は真相までたどり着けなかった。その敗因は先入観と人を信じすぎたことにある。
たしかにフランシスカは病気でベッドから動けない。だからフランシスカが服を盗めるはずがないと思いこんだことが間違いの元だった。フランシスカ自身が動けなくとも、別の動ける誰か……たとえばダルジャンヌに依頼すればいいのだ。
そして恩人のフランシスカが勝手に服をとるはずがないと頭から信頼したことも間違いだった。黒猫に熱を上げる黒猫マニアは街のサブカルチャー一派だけでなく、ハミルトン家の中にもいるのだ。まさに灯台もと暗しである。
人間の綺麗な面ばかりを見たいと思う心が目を曇らせる。目に映る現実を歪めてしまう。ユニが思っているよりもずっと人間は汚れている。フランシスカも例外ではなく、彼女のひねくれ具合はユニの想像の遙か上をいく。今回、唯一真相をかぎとったのはフランシスカをよく知る父親のクロフォードだけだ。

「ああ、ユニの薫りがする。いいわ」

フランシスカは「くくく」と小さく笑い、新しく手に入ったユニの服に顔をうずめ、すぅすぅと深呼吸をくり返す。

「困っていたユニはとても可愛かったわ。またやろうかしら……」

後日、ユニには失われたメイド服の代わりに特注品の華やかなドレスがフランシスカから贈られた。何も知らないユニはどこかおかしいと思いつつも、たくさんのフリルとレースが編みこまれた青いドレスを律儀に着てメイド仕事に励んだのである。

太陽が南の空の頂点にとどくよりも少し前。ノーラは玄関へ向かっ

て廊下を進んでいた。
昼近くまで寝ていたので眠りすぎで軽い頭痛がする。まだ昼食をとっていないので今日は街で何かを食べるつもりだった。

「あ、おはようございます、ノーラさん」

「ん」

濡れぞうきんで窓をみがいていたユニにどこへ行くのかと尋ねられ、
「街だよ、ちょっと散歩」とノーラはぼんやり応える。意識にまとわりつく眠気のせいでまだ頭がはっきりしない。

「気をつけていって下さいね」

「うん、行ってきます」

額に浮かぶ玉の汗をドレスのそででぬぐうユニにノーラは一言いってあげたい気持ちになったが、やめておいた。

17頁　「華胥の国に遊ぶ」

ユニの作業着はフランシスカから新たに贈られた青いドレス。上流階級の人間が集う舞踏会に着ていってもさまになるほどの豪華絢爛な代物(しろもの)で、どうにもおかしいとノーラは思っていた。
メイド服の代わりにはどう考えても不自然だし、フランシスカにユニがもてあそばれているように思われる。実はユニのメイド服も影猫ではなく何らかの方法でフランシスカが盗ったのではないかとひそかに疑っていた。
「暑いし、動きづらいだろ……」と常々思っていたが、ユニはフランシスカに無垢な信頼を寄せている。そんなユニの純情可憐をぶち壊すのはノーラの趣味ではなかったので、胸に思うところがあっても黙っていたのだ。
暑そうにふぅふぅと息をもらすユニに笑顔で見送られ、ノーラは頭をかきながら表へ出た。
あくびをもらしながら石畳を歩いていると、洗濯物を大きなバスケットに入れ一つずつ物干し竿へ吊しているベスを見つけた。ノーラはベスに歩み寄り、「よお」と声を掛けつつ手を上げる。

「ベス。あたし、街へ散歩に行ってくるから」

「暇なんですね。間抜けなユニでさえ働いているというのに。無職は気楽でいいですね」

「うるせーやい」

この堅物(かたぶつ)、どうにかならんのか。日ごろからノーラがよく思うことの一つだ。
少しだけ気持ちがざらついたノーラは眠気覚ましに一発かましてや

ろうとベスの背後へ忍び寄る。

「そんなにツンツンするなよぉ。あたし、さみしいんだよ。構ってくれないとおっぱいもんじゃうぞ」

驚かせてやろうとベスの背中から抱きつき、両手でベスの胸をもみしだく。「何だよ、あたしより大きいじゃん」とぼやきつつ、ベスの肩にあごを乗せて甘えてみる。黒猫の容姿は可愛らしい。いかにベスでも少しは心動かされるかと踏んだのだが……。

「気が済みましたか？　済んだのなら離れて下さい。仕事の邪魔です」

胸を掴まれてもベスは顔色一つ変えず、背後のノーラへ氷の眼差しを向けている。

「おいおい、ちょっとは抵抗しなよ。そんなにぼさっとしていると、夜道で下衆野郎に犯されても知らないぞ」

「ご心配なく。もしも襲われたら、急所を外して刺しますから」

ふと気つけば、ノーラの腹に抜き身のナイフが突きつけられている。急所は外すと言いながら明らかに刺されれば死に至る部位。いったいいつ抜いたのか黒猫のノーラにも感じ取れなかった。ベスの放つ冷え冷えとした気配にノーラの猫耳と尻尾がぴんと逆立った。

「じょ、冗談だって！　可愛い冗談ってやつだよ！」

ノーラは全身に走る悪寒で目をぱっちり覚まし、あわててハミルトン家の門を飛び出した。

黒猫は人目を引く。名前も知らない人間達と何人かの顔見知りに次々とあいさつを受け、適当に返事をする。たまに黒猫に恨みをもつ人間に敵意のこもった視線を向けられることもあるが、それは見て見ぬふり。いちいちぶつかっていたらこちらの身が持たない。とりあえず何か腹に入れよう。そう考えていたノーラは市場へ出向き、なじみの魚屋へ顔を出す。黒猫の常連ということで大幅に値引きしてもらえるからノーラはここが気に入っていた。

「ノーラ。ユニって黒猫を知らないか？」

「……さあね……」

ほとんどただ同然で売ってもらった生魚を頭からかじっていたノーラは魚屋の親父から目をそらす。黒猫に流れる猫の血だろうか。たまに血なまぐさい魚を遠慮無しに食べたくなるのだ。

「たまに市場に出てくるんだよ、良い服を着た小さな黒猫がさあ。ユニって名前で、最近生まれたらしい」

「へえ……」

店をはしごしてもそこかしこでユニの名前を聞く。名前はユニ。新生の黒猫。ごくまれに街に姿を見せる。どこに住んでいるのかは明かそうとしない。通称、幻の黒猫。ほとんど都市伝説あつかいだった。

ユニはハミルトンの家を出てはいけないことになっているが、厳しい規則というわけではない。どうもユニはベスやノーラの目を盗んでちょくちょく街へ出ているようだ。

いろいろ飲み食いをして腹がふくれたノーラは眠気を覚え、復活したあくびをかみ殺しながらのんびりと道を行く。すると若い女の子

に名を呼ばれ、大通りの端に立ち止まった。

「ノーラさん。やっぱり私の気持ちは変わりません。この命、黒猫のノーラさんに差し上げます」

「あー？」

尻尾を蛇のようにうねらせながら頭をぼりぼりとかくノーラに、娘は真摯な目を向けてくる。

「ごめん、あんた、誰だっけ？」

あくびをしながら問うノーラに傷ついた顔をしながら、娘は己の名前と前に死なせて欲しいと頼んで断られたことを熱心に説明した。言われてみれば、そんなことがあったようななかったような。眠気が邪魔してまとも記憶が掘り起こせない。

ノーラには人間の女が次々とたかってくる。短い黒髪と凛々しい顔立ち。すらりとした男性的な長身。そしてそれらを裏切るかのような可愛らしい猫耳と尻尾。ファン達に言わせればその二律背反がたまらない魅力らしかった。

「悪いけど死なせるわけにはいかないよ。あんた、本気で死にたそうには見えないし」

「いいえ、私は本気ですとも！」

「単に熱に浮かされてるだけでしょ」とつぶやきながら頭をかくノーラにも娘は一歩も退こうとしない。本気でノーラに惚れている様子だった。恋愛感情が理解できないノーラにとってはいい迷惑である。

「……あっ！　黒猫のユニだっ！」

往来を指差し大げさに叫ぶノーラにも、娘の視線は微動だにしない。ノーラの顔にくぎ付けのままだ。ユニは珍しい黒猫という評判だから彼女の気をそらせると思って嘘をついたというのに。

人々の流れを指差したままノーラの頬が赤く染まる。もはや作戦でも何でもなく、ノーラは娘に背を向けて逃げ出した。ノーラの名を呼びながら娘が追いすがる。

ある程度娘と距離をとったところでノーラは地面を蹴り、街路樹の太い幹へ跳び移り、そこからさらに民家の屋根へと一跳びする。

「ノーラさん！　ノーラさぁん！」

遅れて追いついてきた娘がノーラの消えた辺りを見回している。そんな彼女を屋根の上からのぞき見ながら、「探してる探してる」とノーラは忍び笑う。

「あの子が諦めるまでここで寝るかあ」

ノーラは屋根の上に大の字になり、灰色の空をあおぐ。夏の盛りが過ぎ、ほどほどに過ごしやすい気候になった。髪を揺らすそよ風が心地良い。娘の呼び声が遠ざかっていく。

時間が流れ、風物詩の影猫もほとんど見かけなくなった。去り際を見誤ったはぐれ影猫がたまに視界の端を横切るくらいだ。そんなことをうつらうつらと考えながら、ノーラは猫のように昼寝した。

二時間後に夢も見ずに起き上がり、小腹が空いたなと思いながら地面へ飛び降りる。難なく着地し、気まぐれにいつもの遊び場へ出向く。

「おお？　ノーラじゃねえか。しばらくぶりだな」

「今日の賞品はなにさ？」

「上物の酒一本と金貨五枚」

道の端に勝手に並べられた机と椅子。そこに集う街の荒くれ者達。今日も今日とて酒臭い男たちががん首そろえてはしゃいでいる。薄汚れた机の上には未開封の高級酒のボトルと美しい金色の硬貨。それと使い古されたトランプカードの山。

ああ、酒が飲みたい。どうせ飲むなら勝利の美酒だ。飲まず、打たずして何が人生か。ノーラはにやにやと笑いながら賭博（とばく）の席につく。掛け金を机に出そうとしてズボンのポケットをまさぐるが、何も指に引っかからない。不安な予感でノーラの胸が冷えていく。よく考えてみれば、市場でたくさん食べ物を買ったせいで持ってきた金を全部使ってしまったのだった。

「あぁん？　なんだノーラ、席についておきながら降りんのかよ？」

「……いいや。あたしが賭けるのは、この服さ！」

どよめくギャラリーにノーラの気分が高揚する。注目。危険。先が見えないスリル。そう、この気持ちの熱が生きていることの証だ。生きていることを実感するにはただ呼吸をくり返し心臓を動かすだけでは役不足。精神的な高まりが不可欠なのだ。

「これはクロフォードの旦那が名のある仕立て屋に作らせた服だ。上下を合わせれば賞品の酒や金貨くらいは軽く上回る。さあ、あたしを裸にひんむいてみなよ」

「ぐはははは！　そいつは面白れえや！」

盛り場の大将と向き合い、ギャンブルを開始。黒猫で博徒のノーラ。ここではそれなりに知られた名だ。意地でも負けられない。だがノーラの意気込みにツキがついてこない。ノーラは負け続け、早々に上着をもっていかれてしまう。

上半身を裸にしたノーラに観衆がものすごい勢いで増えていく。細身に浮かぶ形の良い小ぶりな胸に男共の熱い視線が注がれ、すぐそばで火事でも起こっているような異様な熱気だ。

普段は危険を避けて足早に通り過ぎる堅気（かたぎ）の人間達まで勝負の行方を見守っている。少年少女が上半分裸のノーラに見入り、若い娘同士が手を組み合ってきゃあきゃあと黄色い声を上げている。

黒猫のノーラは群衆の前で裸になろうがあまり羞恥心を覚えない。胸をさらそうが痛くもかゆくもない。男達や、凛々しいノーラに見惚れる女達にいくら注目されても別にいい。見られたからといって別に減るものでもない。

しかし、このまま服をもっていかれるのはさすがにまずかった。高い服をギャンブルに賭けてスッてしまったなどとベスに知られたらまたこっぴどくしかられるに決まっているからだ。

まったくツイていない。ついにズボンまで持っていかれ、残すはパンティー一枚だ。パンティーまでもっていかれたら賭ける品を失ってギャンブルへの参加資格をなくし、もう服は取り戻せなくなる。

18頁　「黒猫に小判」

いよいよ背水の陣。緊張で頭の耳は立ちっぱなしだ。尻尾も嫌な具合に宙で固まったまま。ほとんど裸のかっこうで冷や汗を流しつつ勝負するノーラに異常な期待が集中していた。なにしろあと一敗で全裸だ。ギャラリーは青天井で増加し、視線の群れが針のような鋭さでノーラの全身へ突き刺さる。

負けろ。負けろ。負けろ。口に出さなくてもみんながそう願っているのがノーラにはよく分かる。黒猫は第六感も優れているのだ。相手が何を考えているのか、少し見てみれば直感的に分かる。対戦相手の大将など直感を働かせるまでもない。先ほどからノーラの全身を舐め回すように見つつ、卑しい笑いが止まらない。

誰の応援も得られないというのは辛い。孤立無援であり孤軍奮闘。だがそれでも、観衆が何を言い何を思っていてもつまるところ関係がない。勝負は結局、ノーラが一人で戦うものだからだ。勝負はもともと個人の戦いであるから周囲の視線や声などただの雑音。大事なのはノーラが何を思い、何をするかだ。

乾坤一擲（けんこんいってき）の大博打。外せば負ける運命のカードドロー。やってきたカードにノーラは我が目を疑った。いままでバラバラだった手札が見事に強い役をなす。

ノーラのつかんだ役で大将を負かし、まずは奪われていたズボンを取りかえす。全裸を待ち望んでいたギャラリー達からのブーイングが飛ぶがノーラは鼻で笑って挑発的に尻尾を揺らす。

それまでそっぽを向いていた勝利の女神がついにノーラに降臨した。ノーラはバカヅキ続きで大将を圧倒し、上着を奪い返し、続いて賞品の美酒と金貨に手を伸ばす。

窮地からの逆転にギャラリーはわきにわき、大将が敗北のうめき声を上げて机につっぷすと同時に大歓声が通りを包む。

「ひゃっはー！　酒だーっ！」

ノーラは上半身を裸にしたまま、勝ち取った酒瓶を掴み上げて観衆達に見せつける。割れんばかりの拍手喝采を受けると共に栓のコルクを抜いて中身をラッパ飲みする。そして残りを打ち負かした大将のグラスや遊び仲間のコップに注ぎ、その場の大勢で上級酒を堪能（たんのう）。負けてしぼんでいた大将も酒の味に目を見開き、ノーラと肩を組んでギャンブルを賛歌する。

酒が尽きて狂乱の空気も落ち着き始めた頃、ノーラは上着を着て気ままに賭場を後にする。新たに生まれたノーラのファンの女の子達に惜しまれもしたが、いつまでも後ろ髪を引かれるのは無粋（ぶすい）というもの。

やはり勝利の美酒の味は格別。それによって得られる酔いも別格。ノーラは良い気分で尻尾をくねくねと揺らしつつ、酔いの勢いでアルマの奴を冷やかしてやろうと思いつき、市場へ寄る。賞金の金貨で適当な酒のボトルを買い、ふらふらとした足取りでアルマの事務所へ向かう。

「よーう！　アルマ―っ！」

事務所のドアを蹴破るようにして玄関へ立ち入るノーラ。突然の来訪者に驚いて駆け寄ってきたアルマはノーラの赤らんだ顔と右手の酒瓶を見て露骨に嫌そうな顔をした。

「アルマ、酒飲もうよ酒！」

「いえ、仕事がたまっているので遠慮しておきますよ……」

「ふーん？　お前の秘密、ばらしちゃおっかなーっ？」

「……どうぞ、中へ」

日も暮れかけて客も来そうにない。加えてアルマの極悪非道な正体を公言されては信用が失墜するのは必至。アルマはしぶしぶ酔ったノーラを応接室へ案内する。

たがいに向かい合ってソファーに座り、アルマが用意したコップにノーラが持ちこんだ酒を注ぐ。コップを打ち鳴らし、ノーラはあおるように、アルマはちびちび酒を飲んでいく。

「あ、美味しいですね、このお酒」

両手で丁寧にコップを持ち、微笑みながらそんなことを言うアルマにノーラはどうにもいらついた。眼鏡をかけて上品に振る舞うアルマはそのすべてがいつわり。こうしてアルマと酒を飲んでいても、中身が何も無いからっぽの言葉をかけられているようだった。

「アルマ。眼鏡、外したら？」

「……」

「隠さなくていいって。どうせお前の正体は分かってるんだからさ」

「……まあ、ノーラがそう言うのなら」

アルマが眼鏡を外し、テーブルの上へ静かに置く。そのとたん、部屋の空気の質が変わった。硬質で無機質だった応接室の雰囲気が生々しい血肉の気配を帯び始める。

眼鏡を外したアルマはふぅと小さく息をつき、ブーツをはいた両足をテーブルに叩きつけるように載せた。そのまま脚を組み、両手で大事に持っていたコップを片手でおもちゃのように揺らす。

「糞まずい酒だ。本当にこの街の酒は飲めたもんじゃねえ。どろ水も同然だ」

「……あたしはこの街が好きだよ」

「はっ。お前はこのシケた街しか知らないからそんなことが言えんだよ。前の街の方がよっぽどマシだった」

アルマは酔うための嫌な義務とでも言いたげな顔でコップを傾け、空いている手で側頭部の長髪をさらさらとかき上げる。黒い滝のようにきらびやかな髪だった。

こうして面と向かい合っていても信じがたいほどの変わりぶりだ。普段の印象はそつのない優等生。腹の中で何を考えているのかはいまいち読み取れないが街の黒猫達の中でも影が薄い方だ。それは人目をあざむくための擬態であり、一般的に穏和な気質の黒猫とはまるで別物のまがまがしい本性を内側に秘めている。本当のアルマはただの黒猫というよりも化猫に近いのかもしれない。

「どうなの？　二度目、三度目の人生って。アルマは生まれる前の記憶を引き継いでいるんでしょ？」

「だんだん味が薄くなる。目に映る色も、感じる密度も薄くなってくる。それが気に食わねえ」

「ふぅん」

「黒猫は生まれる街を選べない。生まれた街を出ることもできない。まったく不便な身体だな、黒猫ってやつは」

「街の外に出たいと思うことはあるよ、あたしも。思ったところでどうにもならないけどさ」

「それに黒猫の最後に老衰はない。事故に遭うか、誰かに殺されるか、ある日突然ふっと消えちまうのが死因の全てだ。身体は健康でまだまだ若いってのにいきなり煙みたいに消える。それが一番気に入らねえ。突然死が恐いだろ？　ええ？　人殺しをサボってるノーラさんよ」

「べつに、あんまり」

「ああ？」

ノーラはコップに酒をついで一口飲んだ後、うつむいて揺らめく酒の水面を見つめた。

「あたしは流れのままに生きて、流れるままに終わりたいと思ってる。次の人生とか、記憶の引き継ぎとか、あんまり興味ないよ」

「お前もそうとう変な奴だな。お前を気に入るフランシスカの気持ちが分かるよ」

ノーラは軽く笑ってアルマのコップに酒をついでやった。

「うちのユニはそっとしておいてやってよ。あの子、生まれたばっかりでまだ世慣れしてないんだからさ」

「知るかよ。黒猫を従える黒猫なんて良いじゃないか。箔（はく）がつくってもんだ。三代記憶を引き継いでる私にふさわしい」

「地位とか、見かけの華やかさよりも、もっと大切なことがあるんじゃない？　あたしは今日、楽しかったよ。屋根の上で昼寝したり、博打で負けて裸になりかけたりで褒められたものじゃなかったけど、それでもあたしは楽しかった」

「前世の記憶も忘れてるような平（ひら）の黒猫が私に説教しようってのか？」

「そうにらまないでよ。あたしがそう思ってるってだけで、べつにアルマの考えをとやかくいうつもりはないさ。過度な干渉はしない主義だからね」

「だったら黙ってろ。私のやり方にも口出しするな」

敵意を超えて殺意すらにじんだ目を向けられてノーラは肩をすくめる。黒猫としての人生を三回も積み重ねると、年を食った老人のように考え方が固定されてしまうらしい。風のように自由なノーラからすればアルマの生き方はぎすぎすしすぎているように思われるのだが、もうアルマは何を言っても生き方を変えはしないだろう。ノーラは変えたいとは思わなかったし、変えようとも思わなかった。

「アルマみたいな考えのしっかりした黒猫をうちのお嬢が欲しがらないのが不思議だよ」

「あの女には前に誘われたことがある。冗談じゃねえ。誰が人間の飼い猫になるかってんだよ。
早くあの女を黒猫の力で殺さないと病気でくたばっちまう。そうなったら今までの苦労がパーだ。おいノーラ、お前からもフランシスカのバカを説得してみろよ」

「言っても無駄だよ。お嬢は気に入らない黒猫には決して命を預けないんだから」

舌打ちし酒をあおるアルマをしり目に、ノーラは無表情のままコップの中の酒を見つめていた。

そう。アルマの言うとおり、フランシスカにはもう時間がない。黒猫として幾多(いくた)の人間を葬ってきたノーラは死の気配に敏感だった。日々フランシスカにまとわりつく死の匂いが濃くなっていく。もう、すぐそこまで死が歩みよってきている。壊れかかった身体が永遠に停止するのはそれほど先ではない。

そのことをフランシスカには伝えていないが、きっとフランシスカも分かっているはずだ。死を間近(まぢか)にひかえてフランシスカは結論を出したのだろうか。メメントモリの街の黒猫に命を与えるか、それとも自然に命を枯らせるか。

フランシスカが死んだら――自分は泣きはしないだろう。彼女の喪失に強く心を痛めることもないだろう。黒猫の死生観は人間のそれとは似て非なるものだ。よく言えば冷静で達観的。悪く言えば無情で残酷。

19頁　「朝霧の黒猫」

ただ、がっかりするという予感はある。人間の中でもフランシスカは好ましい人間だからだ。死ねばもう二度とその人間とは話せないし、会うこともできない。あの不思議なフランシスカともう話をできないのは残念だという感情を味わうに違いない。

それにフランシスカが死ねばもう黒猫のノーラは用無しだ。ハミルトンの屋敷を出て行かざるを得ない。美味い食事と寝心地の良いベッドには未練（みれん）があるし、次の住み家を探すのも骨が折れそうだ。しかも今の何不自由ない快適な生活から数段質が落ちるのは確実……。

ぽつぽつと言葉を交わすうちに酒が切れ、夜も遅くなってきたところでノーラは席を立った。適当にアルマに挨拶をして玄関へ向かおうとすると、背後から呼び止められた。

「こいつをお前のところのユニに持っていけ」

放り投げられた小さな袋に無言で見入るノーラ。アルマは酔って赤らんだ顔でテーブルに腰を掛けている。

「市場で聞き込んだらユニの奴はこの菓子が好物らしい。市場に来てはこっそり買って帰るようだ。だから同じものを買って待っているのに、あのガキ……いっこうに事務所に来やしねえ」

「そりゃああの子はアルマを恐がってるからねぇ」

「そいつを渡せばちっとは心証は良くなるかもしれない。忘れずにちゃんと渡しとけよ」

「あれだけやって、まだユニを狙ってるのか……」

あきれた笑いをもらしつつノーラはお菓子の入った袋を抱えてアルマ事務所をあとにする。

一般に、酔っぱらいに対する真面目な人間の対応は手厳しい。見ようによっては低俗な娯楽に貴重な金と時間を費やした者へ嫌悪を超えた憎悪さえ抱くふしがある。

施錠された門をどかどかと無遠慮にノックするノーラを出迎えたベスはノーラの赤い顔を見てあからさまに表情を歪める。生ゴミに大量にわいて出たウジ虫でも見るかのような軽蔑と悪意に満ちた目。

酔いに任せて陽気に礼を言うノーラに一言も返事せず、さっさと仕事の持ち場へ戻って行ってしまう。ノーラは玄関に独り残されたまま、しょぼんと耳と尻尾を垂れさせる。

アルコールは感覚をにぶくする。眠くなったノーラは夕飯はやめにして眠ろうと思いつつ自分の部屋へ向かっていると、廊下に飾られた壷を磨いていたユニの姿を見かけた。

ノーラが街で飲み食いし、屋根の上で昼寝をし、ギャンブルで大勝して酒を飲んでいた時もユニはこつこつと屋敷の掃除を続けていたのだ。ノーラはやれやれと思いつつユニに歩みよる。

「お帰りなさい。ノーラさん」

「うん。ただいま」

拭き掃除の手を止めわざわざノーラに向き直るユニ。そんな彼女をノーラは可愛く思う。酔って感情のたがが緩んでいるせいで、抱きしめて頭をなでてやりたいとさえ思った。

「あ、お酒の匂い。ノーラさん、お酒飲んできたんですね？」

「ん？　ああ」

「美味しかったですか？」

「うん。まあ、そこそこ」

「それは良かったですね。わたしも今度飲んでみようかなあ」

「ユニにはまだ早いよ」

嫌みでも何でもなく、ただノーラの幸せを喜ぶことができる特殊な感性。ノーラが知る黒猫達とは何かが違うユニの心。やはりユニはその他大勢の黒猫とはずれている。その差異はユニに幸福と災いを共にもたらすだろう。少数派というのは主流である多数派に迎合（げいごう）しない分、いつも苦労を強いられるものだからだ。

「そうだ。これ、ユニにおみやげ」

「こ、これは……」

手渡された袋を開けて中身をのぞくユニにノーラはにやにやと笑う。好物の菓子と同じものを渡されれば裏のメッセージは読み取れるはずだった。

「ユニ。お前、ちょくちょく街へ出て買い食いしてるそうじゃないか」

「な、なんでそれを知ってるんです！」

「それに買ったのはあたしじゃない。アルマの奴だよ。アルマからユニへのプレゼント」

「ええっ！？」

お気に入りのお菓子がつまった袋を両手で持ち目を丸くするユニに、ノーラはついにこらえきれなくなって吹き出した。

朝霧（あさぎり）が漂うメメントモリの街。まだ眠りに落ちている街の中をユニは独りでゆったりと歩いていた。

人々でにぎわう街は活気があって良い。最近ユニが発見したことの一つだった。

ひんやりとした冷たい空気に鳥の鳴き声。太陽が昇るとともにだんだん明度を上げていく街並み。それらがユニは好きだった。ユニは外行き用の黒いワンピースをまとい、上機嫌で尻尾を揺らせながら散歩を続ける。

そのうちにユニは裏路地へと続くわき道へ差しかかり、興味にかられてそこへ踏み入った。

いつも通っている華やかな表通りとは明らかに違う負の空気。堆積するゴミと独特の臭気。奇妙な異世界にでも迷いこんでしまったようだ。ユニは心細い思いで道を進む。

そしてユニは建物の壁に背中を預けて倒れている少女を見つけた。ユニと同年代の女の子で、泥（どろ）にまみれたぼろぼろの服をまとっている。かたわらに置かれたバスケットは空で、彼女の周りにはマッチの燃えかすが大量に散らばっていた。

息はしているが、もう先は長くなさそうだ。命の火が消えかかっている。少女の虚ろな目には生きる意思も希望もまるでない。

ユニは彼女の前にしゃがみ、そのみすぼらしい姿をまじまじと見つめる。豪邸に住み、次々と美しい服を買い与えられ、豪華な食事を

与えられているユニの生活とは何もかもが違う。こういう貧しい世界があることをユニは生まれもった知識で知っていた。だが目にするのはこれが初めてだった。
この人間社会は不平等だった。隠しようも揺るがしようもない真理だった。金持ちが贅沢に忙しい一方で、幼い命が道具のように消費され使い潰される現実がある。

「くろ……ねこ……？」

「初めまして。ユニです」

のろのろと顔を上げる少女にユニは落ち着いて頭を下げる。少女は疲れたように笑って「アン」と短く自身の名を告げる。

「私の最後は黒猫に殺されるってわけか。あんた達黒猫は死にそうな人間をかぎつけることもできるの？」

「いいえ？　たまたま通りかかっただけですよ」

「……どっちでもいいわ。もういい。殺して。こんな人生、もうたくさんよ」

「生きていればいいこともある。みんなそう言っていますけど」

「そんなの嘘よ。ただの迷信。ただの気休め。私の生活にいいことなんて一つもなかった。これからもきっとそう。だから死にたい。良い事が一つもないなら無理に命を保とうとは思えない。売り物のマッチも、ぜーんぶ燃やしちゃったしね。もう私は終わりよ」

それはささやかな反乱だったのだろう。自分から搾取し続ける大人

への嫌がらせ。アンという名の少女ができる、針でつつく程度の精一杯の抵抗。

「でも、人間には恋愛があるでしょ？　恋愛をすると人間は幸せになれるみたいですよ」

怒りと憎悪が入り混じった目で見つめられて、ユニの尻尾が思わず腹に巻き付いた。心を傷つけるのは人の心だ。それと同じように黒猫の心も人間の心で痛めつけることができる。

誰かに愛されることなどあり得ないとアンの目が語っていた。恋愛など生きるのに必死の彼女の生活では夢のまた夢。金持ちの王子様にみそめられる逆転の灰かぶり物語など起こりうるはずもないという心の声がユニに伝わってくる。

アンがせき込み、その茶色い上着に血が飛ぶ。どうも胸を酷く病んでいるらしい。餓えと病が同時にアンの身体を蝕んでいて、しかも絶望が精神をずたずたに引き裂いていた。たしかにアンの言うとおり、アンはもう終わりだ。

恋をすれば救われると口では言ったものの納得できないのはアンだけでなくユニも同じだった。なにしろ黒猫は恋をしない。恋の素晴らしさを実感できないのだから話に説得力を持たせようもなかった。今にも死にそうで黒猫のユニに助けを求めるアン。そんなアンを前にしてユニの胸が得体の知れない感情にざわついた。快と不快のどちらかと問われれば間違いなく快。異様な期待感と好奇心で胸がはずむ。自然に口が緩み、笑みを形づくってしまう。気を抜けばよだれを垂らしてしまいそうだ。

ユニと向き合うアンの顔がひきつった。それだけ今のユニは恐ろしい顔をしているということだろう。きっと全身から黒くてまがまがしい気配を発しているはずだ。おびえるアンにユニは傷ついた思いをする。

きっとこの感覚は黒猫として生まれもった本能だ。ユニの中に生ま

れつき組みこまれた人の死を求める気持ちに身を任せれば、黒猫の能力で抵抗なく葬ることができるだろう。重態だったフランシスカの身体をふいていた時に味わった黒い思いの先へ、ユニはついに踏みこもうとしていた。

「……前に聞いたことがあるよ。黒猫は人間の命を糧にして生きている。若い人間を死なせれば使われるはずだった残りの命を自分の財産にできる。年老いた人間は命が残り少ないから得られる財産も少なくなるみたい。ねえ、そうなんでしょ？」

「初耳です。驚きました」

「……変な黒猫。私の命に価値なんてないけれど、あんたにあげる。さあ、早く持っていってよ。もう楽にして」

アンは「へへへ」とかすかに疲れた笑いをもらし、うなだれたまま静かに最後の時を待っている。

アンをハミルトン家に連れていって治療し、館の住人にするか？

そんな考えがユニの頭をよぎったがすぐに無理だと思い直した。ユニがすでにハミルトン家のやっかいになっているのだから、やっかい者のユニが黒猫でもない居候（いそうろう）を連れこむことなどできない。

20頁　「生かすべきか死なすべきか、それが問題だ」

アンを連れ帰って介抱し、いくらかご馳走(ちそう)を与えて数日後に追い出したところで……それが何になる？　ただのユニの自己満足に等しい。それどころか贅沢を知ってしまったアンは己の貧しい日常とのギャップによりいっそう絶望を深めるだけだろう。死がいくらか先に延びるだけでアンの死の結末は変えようもない。

親切にはコツがあるとノーラに聞いたことがある。困っている誰かに親切をするときは最後まで面倒を見るか、もしくは一切関わらずに見て見ぬふりをすること。中途半端な人助けは双方にとって不幸を招くだけらしい。

ならば黒猫のユニにできる最大限の親切は最後まで面倒を見てあげること。アンの命が尽きる最後の最後まで。

「じつはわたし、人間を天に送るのは初めてなんです。上手くできるかどうか分かりませんが、せいいっぱいがんばります」

はらはらしながらしゃべるユニにアンは力なくうなずいた。上手かろうが下手だろうが黒猫の力で楽に死ねれば満足なようだった。

死にたい人間と黒猫の合意が発生し、ユニの能力が解き放たれる。楽に死なせるといってもどうやって……と思っていたユニの手に何かが浮かび上がった。

半透明だったモノが次第に濃くなり実体へ変化する。ユニは呼吸を止めて手の中に召喚されるモノに見入った。

それは銀色をした巨大なスプーン。長さはユニの身の丈とほぼ同じで、頭の部分のしゃくしは人が座れるほどの大きさをしている。金属製でしっかりとした造りなのに羽のように軽い。ユニの細腕でも十分に振り回すことができる。すべすべとして、熱くも冷たくもない不思議な触り心地だった。

こうして黒猫のスプーンに触れるのは初めてだが、それでもよく手になじむ。金属のスプーンが手の一部のようだった。前世の記憶は引き継げずに忘れてしまっているが、ユニは前もどこかで黒猫をしていたのだ。巨大なスプーンを何度も振るい、数知れぬ人間を天に送っていたのだろう。

スプーンを召喚したユニはそれまでとは違っていた。目に映るモノが違う。目の前に倒れているアンの身体を包む空気の色が違って見えた。青色のもやがアンの身体の周りをゆっくりとうずまいている。おそらくはそれがアンの言うところの黒猫の糧だ。ユニの直感もそうだと訴えかけている。死ぬまでに使うはずだった残りの寿命。残存生命力。幸福をもたらす運気。うずまくもやの表現方法は様々だが一目で分かる大きな力だ。それを自分のものにしてしまえばたしかに黒猫の生命は潤うだろう。

スプーンの柄を両手で持ったままたたずむユニにアンが力のない目を向ける。死の恐怖を問題にしないほどの深い絶望と終末への切望。それがアンの目ににじんでいた。ユニの持つスプーンで花でも摘(つ)むように首を刎(は)ねられるか、それともスプーンを使って頭から丸呑みにされるか。どんな悪い想像がアンの頭に浮かんでいるのか、その暗い目からは分からない。

どうやってスプーンを使うべきかすでにユニは分かっている。ノーラにもアルマにも教わっていないが、何もできない新生児が手足を動かすように、呼吸をするように、当たり前にこなすことができる。ためらわずにばっさり殺せ。胸の奥底からそんな声が届くようだった。まるで地獄の谷底から響く不気味な風音のよう。その声も人の命を刈り取る黒猫の特質だろう。だがユニは黒猫の声には従わずに、ある思いつきを実行することに決めた。

アンの頭上にスプーンの先をかざし、紅茶に入れたミルクをかき混ぜるようにゆっくりと円を描いて回す。するとアンのまとう青いもやがスプーンにからめ取られていく。ここまでは普通の黒猫のやり方。ここから先はユニの考え出したオリジナルだった。

ユニはスプーンを自分の肩に立てかけたまましゃがみ、地面に散らばっているマッチの燃えかすの山から未使用のものを見つけ出す。そしてそれを箱の側面にこすりつけて小さな火を起こした。
ユニの手の中で暖かいマッチの火が揺れている。その火にユニもアンも無言で見入った。ユニはにこっと笑い、スプーンを傾けてもやのかたまりとマッチの火を合わせた。
ユニとアンを包む火の境界線。目を焼くようなまばゆさにアンは固く目を閉じた。
次の瞬間、アンが目を開けるとそこは――きらびやかな宮廷の中だった。絢爛豪華な服に身を包んだ貴族達が数人ごとに集まって談笑し、テーブルに並べられた見たこともない料理と美酒に舌鼓（したづつみ）を打つ。状況がつかめずにしばしぼう然としていたアンは己の薄汚い身なりに思い至りあたふたと顔を赤らめた。しかし、どういうわけかアンは周りに勝るとも劣らない……それどころか周り以上の美しいドレスをまとっていた。まるで王族の姫君のような姿だ。
アンの存在について誰も何も言わない。光が射さない貧民窟（ひんみんくつ）のかたすみで最低の暮らしを続けたアンが貴族の社交界に自然に溶けこんでいた。
アンは恐る恐るテーブルの前へと歩み寄り、一面に広がる輝くばかりの料理に目を落とす。アンが何も言っていないのにその場に控えていた給仕に肉料理を皿によそってもらい、うやうやしく手渡された銀のフォークで口にそろそろと運ぶ。とろけるような舌触りと口から全身に満ちる強烈な幸福感。アンが餓えをしのぐために食べてきたしなびた野菜屑の数々とは天と地の差だ。
続いてワイングラスに果実酒を注いでもらい、ちびちびとなめるように飲んでみる。こちらも驚くほどに美味い。慣れないアルコールの薫りに子どものアンはとまどったが、まるで快感が水となって具現化したかのような代物だ。果物の香りとのど越しの良さにつられてアンは三杯もグラスの中身を飲みほし、ほろ酔いのまま足取りも軽く人の輪の中へ進んでいく。

ダンスパーティーが始まったようだ。立派な衣装に身を包んだ音楽隊による管弦楽が耳に心地良い。二人一組で手を繋ぎ優雅に踊る男女の群れにアンがおどおどしていると、次々とダンスを申し込まれる。

下民のアンとはまったく別の種族かと見紛うほどに造りの違う姿形をした美男子達に囲まれて顔を真っ赤にしていると、ある一人の少年と目があった。アンと同じくらいの年ごろをした黒髪の男の子で、耳にとどくほどに髪が長く少女のような美しい中性的な顔をしている。夜空のような黒いタキシード姿で、首元のささやかな蝶ネクタイが微笑ましい。

アンは少年の申し込みを受け、手を繋いでワルツを踊る。社交の経験など皆無のアンはダンスなど踊れるはずもなかったが、美少年の優しいリードで上手に舞うことができた。

周囲の視線がアンと黒髪の少年に集まる。ずっとアンに向けられてきた軽蔑の目でなく、羨望（せんぼう）と祝福の眼差しだった。間違いなくアンがこの場の中心であり主役の姫。想像だにしなかった幸福に、アンは名も知らない少年と手を繋いだまま涙をこぼす。

曲が終わり小休止がはさまれる。酔ってしまったアンは少年に礼を言って頭を下げ、ほてった身体を冷ますためにテラスへ出た。夜空にまたたく星々が美しい。生まれてから今日までで最高の気分だった。

背後からの足音に振り返れば、先ほど自分と踊ってくれた黒髪の男の子が立っている。アンは軽く笑って向き直った。

「あんた、ユニって黒猫でしょ？」

「あっ……。バレてました？」

照れ笑いを浮かべて頭をかく少年の頭に猫の耳が生え、腰から長い尻尾がにょろりと生えてくる。見ようによっては黒いタキシード姿

も執事の仕事着と見れなくもない。

「何となく分かってたよ。男に化けたあんたのことも、このお城も。全部幻なんでしょ？」

「……」

「私が死ぬ前に、気を利かせて良い夢を見せてくれたんでしょ？——ありがとう。こんなに素敵な思い、一生できなかっただろうから」

「死にたく、なくなりましたか？」

ドレス姿のアンは悲しく笑った後で首を横に振った。そんなアンにユニも偽らずにからくりを明かすことに決めた。

ユニが右手を前に出すと闇の中からマッチが浮かび上がる。すでに火は消えかかっていてかすかに煙を上げているだけだ。

「アンからもらうはずだった力をすべて夢の投影に使いました。ですがもう残りがありません。夢の時間はもう終わりです」

「そう。やっぱり私の人生全部を費やしてもこんな短い夢がせいいっぱいだったってわけね」

アンは最後に小さく笑うと男装のユニに歩み寄り、その足元にひざまずいた。顔の前で両手を組み合わせ、祈るように目を閉じる。

「やっと終われるのね。長かった。最後の最後で、本当に良い気持ち」

もはやアンの覚悟は決まっていて揺らぐことはない。城も料理も極めて現実に近い幻影とはいえこれはしょせんは幻。アンの悲惨な身の上も、病に冒された身体も、何も解決していない。だったら優しい夢の中で綺麗に終わらせてあげるのが黒猫であるユニの愛というものだ。

ひざまずき天に召される時を待っているアンにユニも誠意で応えることにする。今まで隠していた黒猫のスプーンを具現化し、その柄を両手で構え持つ。

・

・　・　・　・　・

街に降り立ちアンが倒れていた場所を見つめる。もうアンはいない。マッチの燃えかすとバスケットが落ちているだけで、アン自身の痕跡はこの世のどこにも影も形もないのだ。役目を終えた黒猫のスプーンを消し、ユニは灰色の天を仰(あお)ぐ。

ユニの胸に満ちるものは初仕事の達成感と喪失感。それらが等しく混ざり合っている。表情は消え去り、ただ無言で空を見続ける。

道のかたすみにたたずむユニをたくさんの人が囲み、遠巻きに見つめていた。彼らのざわめきもささやき声も今のユニには遠い出来事だ。

21頁　「黒猫／メメントモリ街の殺人事件」

不幸な少女アンをこの世界から消滅させてから三日後の昼。ユニは独りで廊下の掃き掃除をしていた。
このところ物思いに沈むことが多くなった。いくらアンのことを想っても悲しいとも罪深いとも思えない。そういった生まれつきの非情さも黒猫の特徴だろう。人間を殺すたびにいちいち胸を痛めていては早々に心を壊してしまう。
本当にあれでよかったのかと迷うだけだ。未来に起こる出来事は死を司る(つかさど)黒猫にも分からない。アンの身体が回復し、何らかの幸運をつかんで餓えにも貧困にも無縁の光り輝く道を歩む可能性。それがまったくのゼロだとは言い切れない。未来の可能性を握りつぶして命を消すことが正しい選択だったのかどうかユニは迷っていた。
アンを葬ったことをユニは屋敷の誰にも話していなかった。恥ずかしいという理由が大きい。人ならざる黒猫の本能に従った所行というのはどうにも話しづらかった。人との差異があらわになってしまうし、内なる黒い欲望にあらがえなかったから自制が効かないと思われるのが嫌だったのだ。

「！」

ため息をつきながらわたぼこりを集めていると、ユニの聴覚は廊下のはるか向こうから迫る足音を感知した。四人分。だんだん近づいてくる。一人は人間の足音。三人は人間以外の足音。

「あなたが噂のユニですね」

「黒猫……？」

黒猫が三人、ユニの前に並び立つ。いずれも見たことがない顔だ。彼女達の後ろに追いすがっていたベスがあわててユニの背後に回り込んだ。

「思った通り、やはりこのハミルトン家に住んでいた。感心しませんね。この家にはすでにノーラが住んでいるというのに、彼女に続いてまた黒猫を囲っているというのは」

「……」

リーダー格の黒髪を結った黒猫がベスをにらみつける。ベスは目を閉じ沈黙を守ったままだ。

「ユニ。新しく生まれたあなたを同胞の黒猫としてまずは歓迎したいところですが……そうも言っていられません。手短に用件を伝えます。今から二日後、街の会議所へ出頭しなさい。詳細はこの紙につづってあります。当日までによく読んでおくように」

突きつけるように渡された紙には細かな字が長々と書かれていて呪いの手紙のようだった。下の方に朱いインクで署名がしてある。ユニの意思など初めから無視し権力者によって決定づけられてしまっている。

「……あの。どうしてわたしが呼び出しを受けるんですか？　わたし、何か悪いことをしてしまったんでしょうか……」

「三日前、あなたは街で人間の少女を殺しましたね。それが黒猫伝統のやり方と異なっているという通報を目撃者の人間から受けました。伝統から逸脱しているのが問題なのです。目撃者の供述からその黒猫が街で噂のユニという黒猫であると判断し、街中を捜して住

み家をつきとめました。
例外は秩序の混乱を招くものです。特にあなたのやり方は前代未聞であり、もたらされた影響は極めて忌忌(ゆゆ)しいと言わざるを得ない。会議所に街中の黒猫を集め、ユニを審議にかけます。もしも審議会から逃げ出したりすればこの街で黒猫としての信用を失いますよ。心しておきなさい」

リーダーの黒猫は冷たい声で一方的に伝えると、お供の黒猫二人を連れてユニとベスの前から足早に立ち去っていった。

「いったいどういうことなのです。旦那様の前ですべてを包み隠さず話しなさい」

ベスの極寒の目で見下ろされ、あっけにとられて忘れていた恐怖心が刺激される。ユニは渡された令状を両手で持ちながら、ユニは今さらになってがたがたと身を震わせた。

ユニと関わりの深いハミルトン家の住人がフランシスカの部屋に集まった。フランシスカが横たわるベッドの前にユニが立ち、その背後にベスとクロフォードが控えている。ノーラは壁に背を預けて座り、静かになりゆきを見守っていた。ダルジャンヌの姿は部屋の中に無かったが、ユニには彼女特有の暗黒オーラがドア越しにびんびん伝わってきていた。ダルジャンヌもダルジャンヌなりにユニを気にかけているらしい。
ユニは猫耳と尻尾を垂れ下げながらすべてを話した。アンという少女を黒猫の力で天に送ったこと。その時にユニ独自の方法をとり夢のような夢を見せてあげたこと。

「あれほど目立つ行為は慎(つつし)むように念を押したはずです。真性の馬

鹿ですね、あなたは」

「ごめんなさい」

こういうときは黒猫の優れた五感がうらめしい。振り返らなくても背後のベスの怒り具合が手に取るように分かってしまう。ベスの声はあいかわらず冷たいものだったが、彼女は心底怒っている。それが表に出ないのはひとえにベスの強靭な自制心によるものだ。

ベスの言うところによれば黒猫三人衆はハミルトン家のドアをくぐるなりベスの制止も聞かずに押し入ったらしい。ベスはベスでユニを守ろうとしたのだがユニの匂いをかぎ取り確信をもった黒猫達はまったく取り合わなかった。その横暴さとある種の敗北もベスの怒りに拍車をかけているようだった。

「……その黒猫達には以前から圧力をかけられていてね……。黒猫を人を死なせるものではなく、ただの家族として住まわせているのが気に入らないようだ。貴重な黒猫の無駄遣いだと何度も文句を言われている。……もしもの場合は私でもユニをかばいきれないかもしれない」

「クロフォードさん……」

ユニがおろおろと後ろを振り返っても、クロフォードは腕を組んだまま悲しい目で見返すだけだ。怒ってはいないが相当に困り、そしてひっぱくした現状をどう打開するか頭を痛めている様子だった。アンを葬ったときは罪悪感などほとんど感じなかったというのに今のユニは申し訳なさで胸が張り裂けそうな思いだった。

「……ノーラさん。あの黒猫達、わたしに何をさせるつもりなんでしょう」

「おおかた洗いざらいしゃべらせた後、よってたかってユニの考えと方法を否定するつもりなんだろうよ。事実確認と公平な話し合いにかこつけた釘(くぎ)さしさ。異端の黒猫を出さないようにするためのね。あいつらお得意のやり方だよ」

ノーラは壁に寄りかかったまま灰皿片手にタバコの煙を悠然と吐き出した。動揺しないノーラがユニには頼もしかったが、ノーラの表情は心なしか薄暗い。

「街の黒猫にも組織のようなものがあるんですか？」

「ああ。黒猫委員会っていってね。街の黒猫達を仕切(しき)ってる黒猫のリーダー連中だ。たしかにあいつらが働いてるから人間と黒猫の間のいざこざは減っている。だけど頭が固い連中で自分好みのルールをこっちに押しつけてくる。あたしは昔からあいつらが気に入らないんだ」

黒猫委員会。ユニに向けられた硬質な眼差しを思い出せば彼女達がノーラの言うとおり融通がきかなそうなのはうなずける。ユニは今から二日後が恐ろしくてならなかった。

「……すみません、フランシスカ。わたしが間抜けなせいで問題を起こしてしまって」

「いいのよ。気にすることないわ、ユニ」

ベッドの上で微笑むフランシスカと対峙していてもユニの心は安まらない。このところフランシスカはふせっていることが多くなった。病人の介抱の経験などないユニにも分かる。以前にも増してフラン

シスカの体から生気が失われてしまっている。
それに気にかかるのは彼女の身体からうっすらと漂う特別な匂いだ。この匂いに囲まれていた時期がユニにはたしかにある。それはおそらく生まれる前の前世。記憶は失われていても魂に焼き付けられた感覚は忘れられない。つい最近もユニはこの匂いに触れたばかりだ。肺を病み、餓えと絶望で死にたがっていたアンから発せられていた死の香り。いわば死期が迫った者にまとわりつく死神の体臭。それと同じ匂いがフランシスカからも漂っている。ただの勘違いであってほしいとユニは願う。フランシスカを見つめるほどにユニの胸は不安で揺れた。

「ユニは良いことをしたわ。間違っていない。委員会の評価がどうであれ、そのアンって子が幸せに逝けたのは間違いないと思うの」

「フランシスカ」

胸がいっぱいになりユニは泣きそうになる。うっかり泣いてしまえばベスにさらになじられそうだったので、ユニは己の尻尾を握りしめて痛みで涙を封じこめた。

「さあ、もう終わりにしましょう。これ以上罪もないユニをいじめないで」

ぱん、と軽く手を打ち鳴らすフランシスカの鶴の一声で臨時の尋問会議はお開きとなった。

街の中央に建てられた巨大な公民館。その中でひときわ広い一室を贅沢に借り切り、黒猫の黒猫による黒猫のための審議会が催されていた。

コの字型に並べられた机の空白部分にユニは独りで立たされている。
まるで裁判の被告人のような有様だった。
ユニを取り囲む机には街に住む黒猫達がずらりと並んでいる。その数は実に二十以上。その全員が女で、若い黒猫ばかりだ。ノーラいわく、黒猫は年をとる前に消えて無くなってしまうらしい。街の人間の全人口に較べればはるかに少ないものの、黒猫だらけの空間に放りこまれたユニは驚きを隠せなかった。そこらで黒い尻尾がにょろにょろとうねり、猫耳がぴくぴくと震えている。慣れないユニにはどうにも奇妙な光景だ。
今日のために呼ばれた黒猫の中にはノーラもアルマも含まれている。ノーラはやや不機嫌な顔で、アルマはその凶悪な本性を隠して大人しく椅子に座っている。

「それではユニ。あの日、どうやって人間を葬ったのか、あなたの口から事実の詳細を話して下さい」

「はっ、はひっ……！」

ユニの正面向かいに陣取(じんど)り議長を務める黒猫……黒髪を結い、ユニに令状を突きつけた堅物の黒猫が目を光らせる。

22頁　「黒猫裁判とユニイズム」

緊張でがちがちに固まり、セリフをところどころ噛みながらユニは言われた通りにありのままをしゃべった。
冷や汗を流しながらようやくユニが話し終えると、そこかしこでひそひそと言葉が交わされる。ユニのやり方は黒猫の間でも物議(ぶつぎ)をかもす類のものだということだ。
黒猫達の間に座っていてもノーラはむすっとしていて孤立状態だった。一匹狼ならぬ一匹黒猫らしい。アルマは柔和な笑みを絶やさず、周りの黒猫達の相談に柔軟に対応している。真実を知るユニから見ていても内面のどす黒さは感じさせない。さすがは生まれながらの詐欺(さぎし)師である。
室内に雑音が満ちあふれ収拾がつかなくなりかけたところで議長の生真面目黒猫が「静かにして下さい」と鋭い声を発する。それで部屋の中は静まりかえった。

「まずユニ。あなたに悪いという自覚はありますか？」

「……いいえ。悪いことをしたとは思えません」

それまでひざに手を置いていた黒猫議長は机に両ひじをのせ、組んだ手の上にあごを載せてため息をつく。
ゆっくりと揺れる尻尾と猫耳が変だとユニは何気なく思った。彼女は黒猫らしくない。まるでお堅(かた)い役人が黒猫の仮装をしているようだ。

「あなたは生まれたばかりだから知らないのかも知れません。黒猫は人間の命を糧にして生活しています。黒猫が人間を殺すときに得られる命の力は無色の強大な力です。黒猫次第でいかようにも加工

できる万能の力です。自身の命に上乗せすれば人間一人分の生命力でも三ヶ月くらいは何も食べなくても平気ですし、やり方によっては高価な金銀宝石を具現化させることもできる。
なのにユニは黒猫が得るはずだった力を人間のために使ってしまった。これは黒猫が人間の命を使って生きるという基本ルールを根本から揺るがす異常なやり方です。
あなたのやり方がはびこれば黒猫側の利益が無くなってしまう。街の黒猫皆に迷惑が及びます。それでもあなたは悪いと感じないのですか？」

「……でも……だって……」

にらむ議長に、全身に突き刺さる黒猫達の視線。無言の圧力にユニはうつむいたまま何も言えなくなってしまう。

「べつにいいじゃん。個人の好きにやれば。人間死なせて得しても何も受け取らなくても、その黒猫の自由じゃないの」

発言者のノーラに黒猫達の視線が集まった。まるで私刑（リンチ）のような詰問（きつもん）についに我慢がきかなくなったらしい。

「……個人の自由にすればいい。その考え方は自分勝手にほかなりません。一人の黒猫の暴走でルール全体が壊れる可能性が高いのです。身勝手は許されません」

冷静に応戦する議長。彼女の左右に座る黒猫委員会のメンバーが同時に立ち上がってノーラをにらみすえる。

「ユニを放置すればアンという人間のように死にたいと願う人間が次々と出てくるでしょう。実際、委員会にあの死に方は何だったの

かという問い合わせが寄せられています。早急な対策が必要です」

「そもそもノーラが何を言っても説得力などないわ。殺しもせずに人間の家に住んでいる黒猫なんて黒猫のいい恥さらしよ」

「……おい。どうしてあたしの生き方を引き合いに出す？　あたしのやり方とあたしの意見にどんな関係があるっていうんだ。筋道立てて説明してみろよ」

そもそもノーラは旧態依然とした黒猫委員会を嫌っている。その上家族のユニをよってたかっていじめられて相当頭に来ているようだった。にらみ合う委員会とノーラに場の空気が張りつめていく。

「例外は何もかもいけないというのは少々堅すぎるのではないでしょうか。ユニという今までにない黒猫は良い刺激になる。旧い街に新しい風を吹かせうるとも思うのですが、いかがでしょう」

アルマの声にしんと場が静まりかえった。アルマは黒猫の中でも珍しい前世の記憶持ちの黒猫だ。そのせいで街の黒猫の間でも一目置かれているらしい。

自分を奴隷にしようとしたアルマが味方につくという不条理にユニはぽかんと口を開けた。

こちらに微笑みかけるアルマを見つめ返し、ユニはすぐに彼女の恐ろしい魂胆（こんたん）を読み取った。これはアルマの作戦だ。不利な立場のユニを擁護し、この機会に恩を売りつける腹だ。売った恩をいずれユニの身体で返させるつもりだろう。味方に見えてそのじつ敵。ユニは身震いし、うつむいてアルマから目をそらす。

ここにノーラといっしょに来る途中、ユニは街中を歩きながら空気の湿り具合を意識した。メメントモリの街の空は常に厚い雲におおわれているので判断がつきにくいのだが、ユニがうすうす感じとっ

たように雨が降り始めた。窓からのぞく外の景色は豪雨で暗く染められている。

「ユニのやり方は急進的すぎる！　危険だ！」

「うちもユニのまねをしたら客が増えるかしら？」

「そもそもあの子、何で人間に夢なんか見せたの？　ぜんぜん意味が分からないんだけど。あの子、ちょっと変なんじゃない？」

とうのユニを放置し、雨が降る屋外と同じように会議は荒れた。話の流れは少しずつ本題からそれはじめ、たがいのけなしあいへと変わっていく。

そちらの店ばかり人間を持っていってずるい。そういうそっちこそ裏であくどいことをやってるのは分かってるんだから。そんな言葉が机の間を乱れ飛び交い、議長とその補佐達でさえ場を収めきれずにいた。

混乱の原因であるユニへの非難はノーラが怒りつつも懸命に反論している。アルマもほどほどにユニをかばっていたものの、一人の黒猫におきて破りまがいの営業方法を指摘され口をつぐんでしまう。ためこんだ怒りが爆発すればみんなの前で本性をむき出しにしてしまうから嵐が過ぎ去るのを待っているのだ。

ユニは猫耳と尻尾を垂れ下げながらじっと耐えていた。そのうちにだんだん周囲の音が遠くかすんでいく。音の無い暗闇の中に独りでたたずんでいるような奇妙な感覚だった。

悲しみも苦しみも恥ずかしさもある。だが最もユニの胸を灼(や)いているのは、ノーラや建前上中立的な立場を貫かなくてはならない委員会を除くほとんどの黒猫達が人間を金貨か何かのようにしか考えていないことへの怒りだ。人間を魂と人格を備えた者と見なさずに自身の懐を潤すための生活資源としか見なしていない。

「……どうして！　なんで！　そんなに人間を軽く見るんです！」
それまでかかしのように突っ立っていたユニの突然の大声に、満ちあふれていた雑音がかき消えた。
「人間には命があります！　心もあります！　頭の耳や尻尾のほかに、わたし達黒猫と何が違うっていうんです！
わたしは人間を物のように見られない。見たくないんです。死ぬことが変えられないのなら……せめて最後に少しだけでも幸せを味わって欲しい。わたしはそう思ってかわいそうなアンに夢を見せたんです！　わたしが夢を見せた理由はそれだけです！」
言いたいことのすべてをぶちまけたユニはまず胸の中の汚れをすっかり取り除いたような爽快感を味わった。それが汗や涙のような物質であれ、心理的なもの……形をもたない感情や言葉であれ、一般に何かを吐き出すのは気持ちが良いことなのだ。
だが自分に向けられる目がよりいっそう冷たく厳しいものへ変わっていくのに気づき、背中やわきの下に一気に汗がにじむ。胸をやんわりとおおっていた快感ははかなくも消し飛んだ。生まれたばかりで経験の浅いユニは分かっていなかった。言葉は慎重に選ばなければならないということ。言葉は姿形をもたない。相手に向けて一度口から吐いた言葉は取り戻したり取り消すことはできないのだ。
「――生まれてからずっとハミルトン家で養われているユニは苦労も忍耐も知らないでしょう。こういってはなんですが、私には甘ちゃんの理想論にしか聞こえません」
それまで中立を取っていた議長が底冷えのする眼差しを向けてくる。ユニの発言で完全に怒らせてしまったらしい。

「ユニは我々黒猫委員会がみっちり指導する必要があるかも知れません。心配要りません。私達の指示のもとにきっちり人間を殺していけばどこに出しても恥ずかしくない立派な黒猫になれますよ」

それは指導の名を借りた思想の矯正（きょうせい）……あるいは洗脳。熱のない議長の黒い目を見ていればユニにもそれぐらいは想像がつく。

「……おい！　勝手に話を進めるな！　お前ら厳しすぎるぞ。ユニは生まれて日も浅い。ちょっとは大目に見てやったらどうなんだ」

ノーラの大声をきっかけに凍りついていた場が息を吹き返す。隣り合う黒猫同士がユニの考えについてひそひそと話し合い、あからさまな罵声（ばせい）が飛び出し、ユニに軽蔑の目を向ける。

もはや士気は緩みに緩み、まともな会議の体（てい）をなさない。議長は無言で黒猫達を見回して小さなため息をつくと、「静粛に！」と一喝する。

「そもそもすでにノーラを独占しているハミルトン家がユニまで住まわせていることも大きな問題なのですが……それは委員会の方で追及します。

今日はここまでにします。ユニはよくよく反省するように」

背中と腕を伸ばし耳と尻尾も立てる黒猫が多数。面倒な会議が終わったというのに不穏な空気がまだ部屋に立ちこめているのはユニの発言ゆえだろう。あまりに異質なユニの考え方がほとんどの黒猫達をいら立たせていたのだ。

黒猫達が席を立ち部屋を出て行く中でユニは立たされていた場所から動けずにいた。会議は終わったというのにユニはいまだに酷い責め苦の中に取り残されていた。

23頁　「罪と罰」

議長の黒猫が二人の委員を連れてユニに迫る。会議の進行役に縛られていて言えなかった個人的意見を存分に叩きつけるつもりだ。ユニは身を震わせたまま三人の黒猫を見ることしかできない。
ノーラが足早にユニに歩み寄り左腕をつかんで出口へと引っぱっていく。ノーラの機転で機を逸した黒猫委員会は亡霊のような冷たい表情のままユニとノーラを見送った。

「ああ、雨が降ってる。しばらくは出られないかな」

公民館の軒先で雨雲を見上げるノーラにもユニは無言を貫いていた。手を繋がれていたが、うつむいたまま顔も見ずにいた。

「……ま、キツかっただろうけど気にする事なんてないさ。早く忘れるのが一番だよ」

優しく笑いかけるノーラの手を放し、ユニは降りしきる雨の中へ飛び出していった。背後からの呼び声にも振り返らずに道をひた走る。

「……一人になりたい時もあるか」

ノーラはため息をつきながら頭をかき、ユニと同じように冷たい雨の中をゆっくりと歩いて行った。

広い道の真ん中をユニは独りで歩いていた。豪雨の中をわざわざ出歩くような馬鹿がユニの他にいようはずもなく、いつもの街の活気はすっかり失われている。目に映る景色の印象は変わり、死に絶え

た廃墟にでも迷いこんだかのようだ。
世界でたった一人になってしまったかのような思いがした。審議会で言われた事やみんなの表情を思い出し鬱々と歩を進めるうちに、ユニはいつの間にかアンが横たわっていた場所にたどり着いていた。そこにあるのは建物の壁と道だけだ。アンの痕跡はどこにもない。当然だ。ユニ自身が黒猫の能力で天に送ってしまったのだから。
迷いで心が揺らぐ。自信を失って周りのすべてにおしつぶされそうだ。ユニの真実の思いは黒猫委員会に全否定された。他の黒猫達の反応も決して良いものではない。自分の善意が正しかったのか間違いなのかもうユニには分からなくなってしまう。
ユニはアンが横たわっていた場所に立ち、建物の壁に両手を当てた。そして何度も己の頭を壁に叩きつける。口からは悲鳴とも泣き声ともつかない声が漏れていた。理由はユニ自身にも分からずにまるで狂気に憑かれたような行為だったが、こうしなければならないような気持ちだったのだ。
頭が酷く痛む。触ってみれば指に赤い血がべっとりとついていた。
ユニはしばらく立ちつくし、やがてふたたび道を歩き始めた。
身にまとう黒のワンピースは雨水を吸って冷たく重い。傷を負ったこめかみの痛みはどういうわけか少しだけ心地よかった。ユニは全身が黒い。髪も目も服も尻尾も、何もかも黒い。薄暗い雨の中を歩く姿を化物と見間違えられても仕方がない。
死にたがっていたアンを望み通りに死なせれば上手くいくと思っていた。他のより良い解決方法を深く考えなかった。それはきっとユニが人を死なせる冷酷な黒猫で、しかも間抜けだからだろう。
明るい亜麻色の髪に青や灰色の瞳がこの街の人間の特徴だ。その中で髪も目も黒い黒猫は明らかに異質である。しょせん黒猫は人間とは別の生き物で、歩みよることなど不可能なのかもしれないとユニは考える。
生まれて初めて味わう苦悩の領域だった。否定された考えを皆が言うように改めるべきか、それとも自分の信念を貫くべきか。これか

らどのように人間に関わっていけばいいのか。人でない黒猫の自分とどう折りあえばいいのか。問題は山積みで、しかも一つ一つがあまりに重く難しい。とても一朝一夕で解決しそうにない。

ハミルトン家の門前にたどり着いたユニはまず服を脱いでパンティ一枚になり、水を吸ったワンピースを力の限り絞り上げた。濡れた靴も脱ぎ、玄関のわきに放置する。

丸めたワンピースを両手に抱えたままパンティ姿で廊下を歩いていたユニはとにかく眠りたい気分だった。眠ってこのわずらわしい世界から断絶したい。何も考えずに時間を流してしまいたい。身体も心もくたくただった。

「お？　やっと帰ってきたか」

自室へ向かっていたユニは廊下の曲がり角でノーラとはち合わせする。ノーラの髪がうっすらとしとっている。さっきとは服が違っていて、どうも着替えたらしい。

「何だかユニはいつでも裸だなあ」

沈みきってうつむくユニにノーラは苦笑し、手を引いて廊下を歩く。どこに連れて行かれても構わない気持ちだった。行き着く先が地獄のようなアルマの事務所だろうと黒猫委員会の所だろうと、もうどうにでもなれだ。

ノーラがドアを開けて中に入ると「ベッドに座りな」と言われる。この部屋にはまだ入ったことがない。ユニは部屋の中を見回しながら大人しくベッドに腰をかける。

「もしかしてここはノーラさんの……？」

「うん。あたしの部屋」

すっきりとしてあかぬけた部屋だった。ほどよく整頓がなされていて堅苦しくない雰囲気だ。ユニにはよく分からない趣味の民芸品や風景画が飾られ、奇妙な形の自然石も置いてある。
タオルを引っぱり出してきたノーラはユニの背後に座り、手に抱えていた濡れたワンピースを取り上げて遠くの机に放る。
雨に打たれた頭にタオルをのせられごしごしと拭かれる。その慣れない感触にユニはとまどった。何しろ人間と違って大きな耳が頭についているのだ。それをタオルでこすられるとものすごい音量の雑音が脳内に響き渡る。

「いたっ……！」

「んー？」

裂傷ができたこめかみに触れられ身を縮めるユニ。今までユニ自身が傷を忘れていた。身体の痛みを忘れるほどに胸を痛めていたからだ。

「ユニ。この傷、どうしたの？」

「え……。それは、その、ちょっと転んでしまって」

「あはは。ばればれだよ。嘘が下手だね」

「……じつは……」

ノーラに髪の水気をふき取ってもらっている間、ユニは傷ができた理由をとぎれとぎれに話した。肩はこわばり、ももの上に乗せた両手は固く握りしめたままだった。

「なるほどねー。まあ、深く考えずに適当に聞き流しておけばいいよ。阿呆委員会の連中の言葉はさ。アンって子を死なせたのだって黒猫としては何も間違ってない。
なんだろう、身体が獣に近いのかな。黒猫は傷の治りが人間よりも断然早いから頭の怪我もあっという間に元通りになるさ。心配ないよ。でも、いたずらに自分を傷つけるようなことはもうやめときな」

「……黒猫って、どうして人間を殺すんでしょう。人を死なせずには生きられないんでしょうか」

うつむいたまま暗い声を出すユニにノーラの手が止まる。数瞬後にはふたたび手を動かし、頭をなでるようなやわらかい手つきでユニの髪をぬぐう。

「黒猫はそういう風に生まれついているんだよ。ほとんどの黒猫は生まれもった気質には逆らえない。生まれついたようにしか生きられない。
だけど心が優しいユニなら――どうなるか分からない。ユニはユニの思うようにやってみたらいいさ」

ノーラは歌うような声でユニの道を祝福し、「はい、できあがり」と頭からタオルをどける。

「服は……まあいいか。黒猫はじょうぶだから裸でも風邪なんか引かないだろうし」

ノーラはベッドから降りると部屋の端に置いてあった木製の椅子をユニの前に持ってきて腰かけた。背もたれがユニの方へ向いている。ユニはパンティ姿でうっすらと膨らんだ胸がさらされていたが、ノ

ーラと向き合っていても何も感じない。ノーラも同じようだ。このあたりの羞恥心の薄さは人間と大きく異なっている。

「黒猫の命は人間よりもずっと短い。人間を死なせるから黒猫の方が強くて偉いみたいに見えるけど実際はそうでもないのさ。どこかの街で別の黒猫に生まれ変わっても前世の記憶が無いのなら死と変わらない。もしかすると人を死なせる罰なのかもしれないね」

椅子の背もたれに両腕を組んで載せるノーラは軽く笑う。そこに消滅への恐怖や悲壮感はうかがえない。尻尾もゆったりと宙をうねっている。

達観しているノーラをよそにユニは恐くて尻尾を震わせた。下を向いたまま胸の前でもじもじと両手の指を遊ばせ、やがて恐る恐る顔を上げる。

「ノーラさん。わたしもすぐに消えてしまうんですか……？」

「あはははっ。ユニはまだまだ小さいからそう簡単に消えないよ。あたしもまだ生きられる。安心しなよ」

「そ、そうですか……。よかったぁ」

目を閉じて胸に手を添えるユニにノーラはげらげらと笑い、笑いすぎてまなじりに浮かんだ涙をぬぐう。

「ユニ。これは忘れちゃいけない。黒猫も、人間も、常に残り時間が減り続けている。砂時計の砂が少しずつ、確実に下へこぼれ落ちていくみたいに。砂が尽きたら死だよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3995v/

黒猫と死にたがりのお嬢様

2012年1月2日10時49分発行